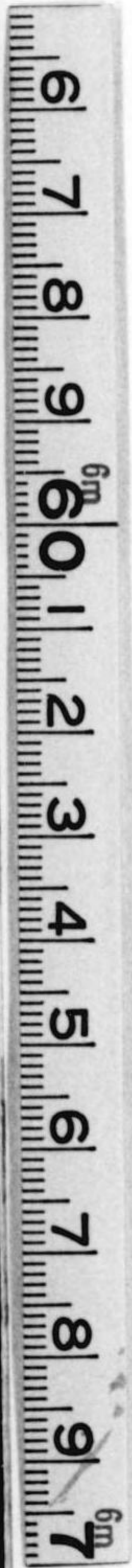


292.3  
K051



始



375 ✓



292.3  
K651

秘

大東亞問題調查會  
研究報告 第七卷

# 南方諸民族事情研究

國策研究會





はしがき

一、本稿は人種學的又は民族誌的研究を志したのではなく、南方民族對策樹立のための參考資料を提供せんがために、南方諸民族の政治的、經濟的、軍事的能力の調査を旨としたものである。諸民族の能力については、たゞに現状を明にするばかりでなく、その將來性についても出来るだけ公正な判断を下さうと心掛けた。勿論、民族の能力を直接的に捉へることは困難であるから、或は民族の歴史を顧み、或は生業を調査し、或は民族性を考察する等、多方面からの觀察によつて、民族本來の歪められざる民族資質を掴まふと努めた。時に民族の性癖や特殊技能について言及しておいたのもかゝる考慮に出づる結果である。又、人種學的乃至民族誌的には興味少くやゝもすれば等閑視されがちな種族についても場合によつては詳述するに努めたのも、同様の考慮からである。

一、叙述の仕方は劃一的でなく、體裁としては不統一のやうである。これは早急の間に資料を整理せねばならなかつたため資料の不備からくる制約もあるが、また諸種の民族を種々の仕方で描寫してみようとの意識的な試みも加はつてゐる。本調査の如き目的をもつ民族調査は之を如何に取扱ふのを最も適當とするかについては、

未だ成算はない。たゞそれ／＼の民族の能力の現状及びその將來性を把握するのに最も適切と考へるそれぞれの角度から之を觀察しようとしたのである。

一、タイ及び佛領印度支那については之を比較的簡略に取扱つた。この方面については既に多くの研究書が發表されてゐるからである。又、ニューギニアをはじめ小島嶼の原住民に關する記述を割愛したについては別段の意圖あつてのことではない。たゞ本調査の實際的目的からしてその必要を認めなかつたからである。

一、調査中、感得しえた南方民族の通有性並にその改善策については、別に一章を設けて簡單ながら之を概観しておいた。

一、本調査は十数名の専門家より成る委員會を數回開催し、その委員會におけるヒヤリング、その委員會に提出された覺書等を土台として、參考文献を涉獵しながら取纏めたものである。この際、委員諸氏の熱心なる御協力に對し深謝しておきたい。併し言ふまでもなく調査上の責任は本會自身のものである。なほ參考文献はその引用場所にいろ／＼出典を挙げず、卷末にまとめて之を掲載することとした。

昭和十八年十月

國策研究會事務局

目次

序論 南方民族對策の根本原理

第一節 東洋的社會の特徴	一
第二節 植民地的秩序の南方民族に及ぼしたる影響	四
1. 南方諸民族の文化的階層	四
2. フイリツビノ、ミナハサ人、カレン人	六
3. ジャワ人、マライ人、安南人	七
4. ビルマ人、タイ人	七
5. 東洋的生活圈基盤の儼存	八
第三節 南方民族の通有性	九
1. 體位の劣弱	九

2. 創意進取の氣象を缺いてゐること…………… 一〇

3. 郷土に對する執着心が絶對的なること…………… 一一

4. 勤勞意欲の缺如…………… 一二

4. 蓄積意欲の缺如…………… 一三

第四節 南方民族對策の根本原理…………… 一四

### 第一章 タイ國民族事情

第一節 人口と民族…………… 一七

第二節 タイ族の性能…………… 二三

1. タイ人の性能…………… 二三

2. コーラート・タイ族…………… 二六

3. ラオス族(ラオ、タイ族)…………… 二七

第三節 其の他の諸民族の性能…………… 二九

### 第二章 佛領印度支那民族事情

第一節 人口と民族…………… 三三

第二節 安南人の性質及び能力…………… 三五

第三節 カンボヂヤ人(クメール族)の性能…………… 三六

第四節 タイ族の性能…………… 三九

1. トー族(土人)…………… 三九

2. 白タイ及び黒タイ…………… 四〇

目次…………… 四三

3. 老	目次	四
第五節 其の他の種族	約	天
第六節 要		杏

### 第三章 ビルマ民族事情

第一節 ビルマの種族的構成とその變遷過程	六
第二節 各種族の諸性質	充
1. ビルマ人	充
2. チン	莖
3. カチン	共
4. ロロ	戈
5. タライ	△
6. パラウ	△

7. シヤン	△
8. カレン	△
第三節 各種族の經濟能力	九
第四節 ビルマに於ける印度人の問題	一〇四

### 第四章 マライ民族事情

第一節 人口と民族	二二
第二節 マライの先住民族	二七
第三節 マライ人の性質	一九
第四節 生業より見たるマライ人の能力	二七
第五節 勞力供給源としての支那人及び印度人	三三

目次

第五章 スマトラ民族事情

第一節 人口と民族……………一四

第二節 バタク族……………一四

第三節 アチエー族、ガヨ族及びアラス族……………一四

第四節 ミナンカボウ族……………一五

第五節 南部スマトラ人……………一七〇

第六節 スマトラの開発と移入勞力……………一七二

第六章 ボルネオ民族事情

第一節 人口と民族……………一七五

第二節 ダイヤ諸族……………一七七

1. ズスン族……………一七九

2. ムルト族……………一七九

3. 陸ダイヤ族……………一七九

4. カヤン族……………一八〇

5. 海ダイヤ族……………一八〇

第三節 海岸低地の土着民……………一八二

(1) 海漂民の土着せるもの……………一八三

1. バジヤウ族……………一八五

2. オラン・スンゲイ族……………一八五

3. ケダヤン族……………一八五

4. メラナウ族……………一八六

(2) 開化マライ族……………一八六

第四節 ボルネオの華僑……………一八九



第七章 セレベス民族事情

第一節 人口と種族……………一九一

第二節 マカッサル族 六三萬人……………一九二

第三節 ブギス族 一四一萬人……………一九四

第四節 ミナハッサ族 二五萬人……………一九六

第五節 トラジャ族 四五萬八千人……………一九九

第六節 セレベスの華僑とアラビヤ人……………二〇一

第八章 ジャワ民族事情

第一節 人口と民族……………二〇四

第二節 オランダ統治下のジャワ民族……………二〇六

- 1. ヒンズー王國治下のジャワ民族……………二〇六
- 2. 回教王治下のジャワ民族……………二〇八
- 3. 蘭人の群島占據と其植民政策……………二一〇

第三節 ジャワ人の能力……………二一四

- 1. ジャワ人の性情と教養……………二一四
- 2. 職業より見たるジャワ人……………二一八
- 3. 労働者としてのジャワ人の特徴……………二二四

第四節 マドゥラ人の性能……………二二七

第五節 スンダ人の性能……………二三八

第九章 比律賓民族事情

第一節 比島民族の體質的分類……………二四〇

第二節 比島民族の宗教及び言語上の分類……………二四一

1. 非基督教民族……………二四二

2. 基督教民族……………二四四

第三節 デユウトロ・マライ系諸民族事情……………二四五

1. テインクイヤン族……………二五六

2. ボントツク族……………二五九

3. イフガオ族……………二六一

4. ナバロイ族……………二六二

5. カンカナイ族……………二六五

第四節 イスラム教民族(モロ族)……………二六六

1. ラナオ・モロ及びマキンダナオ・モロ……………二六九

2. スール・モロ……………二五〇

3. サマール族……………二五八

4. パラワン族、ヤカン族及びサンニル族……………二五九

第五節 キリスト教民族(フィリッピン)……………二五九

1. タガロフ族……………二六〇

2. ビサヤ族(ウイサヤ族)……………二六一

3. イロカノ族……………二六二

4. ビユール族……………二六四

5. パンパンガ族……………二六四

6. パンガシナン族……………二六五

7. カガヤン族……………二六五

8. サンパール族……………二六六

9. イシナイ族……………二六七

第六節 國民としてのフィリッピンノ……………二六八

1. 文化と宗教と家庭生活の通有性……………二六八

2. スペイン植民政策の影響……………二七〇

3. 叛亂を通じて民族意識昂揚……………二七二

第七節 フィリッピンノ有通性……………二七四

1. 注意力に乏し……………二七四

2. 創造力の缺如……………二七五

3. 比律賓の軍隊……………二七六

南方諸民族事情研究參考資料一覽……………二七七

大東亞問題調査會事務局第一分科(南方諸民族事情)研究會の構成並に研究經過概要……………二八三

序論 南方民族對策の根本原理

第一節 東洋的社會の特徴

南方諸地域の民族生活を概観すれば、南方諸地域が東洋的生活圏の中に包攝せられるべきことは明かである。東洋的生活圏は西洋的生活圏に對立し、民族生活の様式を根本的に異にする圏域であり、そこでは所謂東洋的社會を形成して民族生活が営まれてゐるのである。

東洋的社會の第一の特徴は、灌漑農耕による米作であり、灌漑と米作とは東洋的社會を形成する凡ての民族の生活の基盤となつてをり、稲米に關する儀禮は、民族宗教の如何に拘はらず、民族慣習の紐帶をなしてゐる。比律賓におけるイフガオ族やセレベスにおけるトラジャ族が未開の文化發達段階にありながら營々として世界に誇る階段式水田を建設し、スマトラの武勇なるアチエー人がなほサワーに水を引いて米作を營み、マライ半島のマライ人が主要産業の悉くを外來民族の手に委ねながら引き合はない米作に致々として従事せるを始めとし、ジャ

ワを表徴する光景が水牛に犁を牽かせ膝まで泥田につかつて歩くクニ（農民）の姿であり、ビルマ人やタイ人が集荷・精米・輸出を外國人の手に握られながら米作農民の傳統を保つてをり、安南人が零細農として東京デルタに蝟集してゐるのも、彼等の社會が東洋的社會たることを表徴してゐるのである。

東洋的社會の第二の特徴は、社會生活の基礎的紐帯が共同體にあるといふことである。之に反して西洋社會にあつてはそれは集合體であるにすぎぬ。社會生活の基礎的紐帯が共同體にあるといふことは、東洋的社會が父家長制度と村落共同體として營まれてゐることであり、第一の特徴たる灌漑農耕と不可分の關係にあると考へられる。ジャワのデサ（村落）、スマトラ及びマライのカンボン（村落）、安南の村落共同體に於ける生活は、西洋社會の集合體生活の眼をもつてしては、その生活のよさは到底これを理解できない。併し、村落共同體は共同體としての秩序をもたねばならぬ。その社會秩序が東洋にあつては家族生活における父家長制の擴大として維持されてゐるのである。東洋的社會では村落共同體が政治組織の細胞となつてゐるのは當然とするも、その村落は血縁的集團と見られ、家族生活における秩序が村落生活の秩序にまで擴大されるのである。否、家族生活における父家長制の秩序は、東洋的國家構造の秩序にまで擴大されることは、支那における國家構造が之を示してゐる。ミナンカボウ族の社會は母系にもとづく系圖的社會であり、一見、父家長制と相反するやうであるが、その政治的社會の構造においては、上位組織から見るとスクウ、サ・プア・バルイ、ヂユライを通じて、ヂユライの首長たる

ママクが同時にサ・プア・バルイの首長たるバングル！であり、同時にまたスクウの首長（ダツク・ナン・ペラ）ともなりうる點から見て、大家族的集團としてのヂユライにおける秩序が最大の同族集團たるスクウの秩序にまで擴大されてをり、而してママクたる者はヂユライにおける最年長婦人の兄弟たるものであり、決して婦人が秩序の維持者たるのではない。即ちママクとしては一家の父であり、バングル！としては一個の自治社會の代表者であり、スクウの首長としては村落共同體の指導者である。たゞ異なるところは、ミナンカボウの社會では、この一家の父であり、自治社會の代表者であり、スクウの指導者たるものが父系によらず母系によつて決定されるといふにすぎない。だからミナンカボウを始祖とするといはれるマライ人においては、もはや母系は失はれて父系による系圖的社會が形成されてをり、母系にもとづく系圖的社會の構造が必ずしも本質的でないことを示めてゐる。吾人はミナンカボウ族についても、家族社會の秩序が村落共同體の秩序にまで擴大されてゐるところに、東洋的社會の構造原理を看取しななければならないのである。

第三には、第一の特徴たる灌漑農耕の生産様式が生んだ重農抑商政策の結果であるとも見ることが出来る。第二の特徴たる村落共同體の存続が産業の分化を阻止した結果であるとも考へられるであらうが、その原因が何處にあるにしろ、東洋的社會の一般的立運れは餘りにも大なるものがあり、西歐勢力の東漸を阻止することが出来なかつた點である。偉大な東洋の文化は西洋の物質文明の發達の前に壓殺されたのである。その時以來、東洋

的社會には更に西歐の植民地的ないし半植民地的秩序が押しつけられ、東洋はたゞ西洋的社會へと轉換することによつてのみ、向上の途が與へられてゐるかのやうに見えた。この途は東洋の西洋化であり、東洋の復興ではなく東洋の死滅であつた。併し、東洋の諸民族の解放は東洋の復興なくしては不可能である。

## 第二節 植民地的秩序の南方民族に及ぼしたる影響

### 1 南方諸民族の文化的階層

本來、東洋的生活圏の一部を形成すべき南方諸地域に西歐の植民地的ないし半植民地的秩序が定立され、南方諸民族の營んでゐる東洋的社會の中に容赦なく西洋的社會生活が押し込んで來た結果は、當然に彼等の民族生活に名狀しがたい混亂を惹き起した。今、南方諸民族を概観するに、その影響は要約して次の二點に歸せられる。即ち、その一は南方諸民族間に幾層かの文化發達の階層をつくり出したことであり、その二は南方諸民族の民族性及び民族能力に及ぼした影響である。

南方諸地方における文化の發達は一般的には概して低いが、その中にあつて最高の文化階層にあるものはフィリッピン(比律賓人)、ジャワ人、ビルマ人、タイ人及び安南人であらう。ジャワ人ビルマ人及びタイ人は西洋文

化の渡來以前から相當進んだ固有の民族文化を所有してをり、安南人は古くから支那文化を攝取してゐたが、フィリッピンは専ら西洋文化の注入によつて今日の文化段階に達したものである。

次に今日の文化發達段階が相當に高く特に將來性の注目さるべきものに、ミナハサ人、マカツサル人(プギス人を含む)、バダン人(ミナンカボウ人)、カレン人があり、之に最近中等階級の擡頭によつて民族的覺醒に進みつゝあるマライ人、並びに武勇の誇高きアチエー人が加はる。ジャワのスندگان、印度支那のクメール人は過去においては高き文化をもち活潑なる民族的活動を展開したこともあるが、現在においてはもはや民族力の衰退しつゝある過去の民族としか見られない。

第三の文化階層にあるものは、モロ族、イゴロット族、ダイヤ族、トラジャ族、ダヤク族、シヤン族等で、これらの諸族は次第に開化の域に進みつゝあるも、なほ多くの首狩り又は食人の惡癖を漸く最近において脱したばかりで、なほ文化の發達を今後に俟たなければならぬ。

第四の階層に屬するものは各地の山間僻地に散在孤立する諸族で、これらは人口も少なく今なほ殆んど原始の状態に止まるものであり、人種の見地から諸種の興味ある問題を提供するが、さしあつては民族問題の對象となることはない。

それ故、東亞共榮圏の建設に伴ふ民族對策の對象となる南方諸民族は、第一及び第二の文化の發達階層に進め

る諸民族であり、第三の階層にある諸族に對しては、専ら開化政策が問題となるが、未だ民族問題は起りえない。尤も第三階層に屬するモロ族は文化的にはなほ未開の域に彷徨しつゝあるも、王統の系譜を中心とする歴史をもつ民族であるから、この點は十分に政治的考慮を拂ふ必要がある。

## 2 アイリツピノ、ミナハサ人、カレン人

次に南方諸民族に及ぼしたる植民地的ないし半植民地的秩序の影響を見るに、誠に深刻なものがある。深く民族生活に結びついてゐた東洋的文化が壊滅され、又は抑壓されたことは言ふまでもなく、民族性の歪曲、民族資質の畸形化、民族能力の抑壓から、民族體位の低下にまで及んでゐる。その二三の例を示めさんに、第一例はアイリツピノ、ミナハサ人、カレン人等に見られる傾向である。これらの民族は南方におけるキリスト教民族として代表的なものであるが、彼等はキリスト教徒に改宗することによつてその文化は大いに發達し、アイリツピノの如きは南方における最優秀の文化民族をもつて自負してゐる。總じて云へば、彼等の文化程度が他の諸民族に比して遙に進んでゐることは事實であるが、それは西洋文化の模倣であるにすぎない。彼等は東洋的生活圏の中に生活しながら、西歐化することをもつて開化と心得、西洋崇拜、東洋蔑視の風習を作り出してゐる。アイリツピノのアメリカ化は周知の事實であるが、ミナハサ人が米作を厭ひ非キリスト教徒たる他民族を蔑視するが如きはその現れにほかならぬ。尤も彼等は原始に近き未開の状態からキリスト教徒に改宗せしめられ、キリスト教徒

として西洋文化を注入されて今日の發達程度に達したものであるから、彼等は民族固有の誇るべき東洋的文化をもたない。だから彼等には根本的缺陷として東洋精神が缺けてゐる。彼等が東洋的生活圏に生活し發展する民族として東洋精神を體得した曉には、彼等の發達した知能、特にカレン人に見られる如き進取、遵法の氣質は東亞共榮圏の建設にとつて有用の材たるや疑ひない。

## 3 ジャワ人、マライ人、安南人

第二の例はジャワ人、マライ人、安南人等に見られる傾向である。彼等は西歐勢力の侵入前においては嘗て潑刺たる民族的活動を展開した活氣旺盛なる民族であつたが、今日ではこの傳統を忘失したかの如く、眠れる如き無氣力状態にある。殆んど大聲で笑ふことさへない憂鬱なジャワ人、ともすれば夢みる如き冥想に耽るマライ人、自分の國の古典が讀めず自分の國の歴史がほんとはわからない安南人の青年、これが彼等の現状である。永い間の西歐の植民地的秩序の下に彼等の民族性、彼等の民族資質は殆んど一變せんとしつゝある。彼等の民族體位の低下も甚しい。これも酷暑と人口稠密のためといふよりは、永年の植民地的搾取の重壓の結果であるにちがひない。

## 4 ビルマ人、タイ人

第三の例はビルマ人、タイ人等に見られる傾向である。こゝでは植民地的ないし半植民地的搾取に疲弊困憊し

た民族の經濟生活がある。歐米の資本の手先き又は執達吏と化した印度人ないし華僑に、民族の經濟生活の實權を握られて、民族能力の發達は重い石にひしがれた草の如く伸び悩んでゐる。戦前、内燃機の導入を機としてこの方面に突如としてビルマ人が進出したことは、殆んど驚異ともいふべき例外的現象であつた。植民地的秩序の下に、彼等の民族能力は經濟生活のどこにもそれを伸張すべき場所が塞がれてゐたのである。伸びんとする彼等の民族能力は、歐米勢力の輸入資本と輸入勞力とによつて嚴重に抑壓されてゐたのである。

##### 5 東洋的生活圈基盤の儼存

之を要するに、西歐勢力の東洋的生活圏への侵入の影響は、文化發達の上位階層にある諸民族において最も甚しく、その總結果は、今日、或る地域では民族全體の西洋化が企てられ、他の地域では民族の東洋的資質が歪曲され、共同體としての東洋的生活圏の寸斷となつて現はれてゐる。これは東洋的生活圏の中に内部抗争の要素が植ゑ付けられたことであり、我國が指導する東亞共榮圈建設戦において、なほ東亞民族相ひ闘ふの不幸を招來してゐることは、我々の眼前に見る通りである。併しながら、他方において、ひとたび我國、鬼神もなほ避くべき決意をもつて東亞共榮圈建設の征戰を進めるや、各地の諸民族が奮然として参加し來るのを見るのは、本來一體たるべき東洋的生活圏の基盤がなほ存在するがためである。東洋はなほ儼存する。この事實こそ百萬の援軍にも勝る最大の味方であり、我々は深くこの事實を顧みなければならぬ。

### 第三節 南方民族の通有性

我々の先覺者は夙に「アジアは一なり」と喝破してゐる。我々はこの眞理の光を背負つて東亞共榮圈建設戦を戦つてゐるのであるが、しかし現實の把握には飽くまでも冷徹でなければならぬ。今南方の諸民族を概観するに、なほ大いに改善を要する通有性を少なからずもつてゐる。東亞共榮圈民族對策はその根本において、これら通有性の改善を指向するものでなければならぬ。而して改善すべき通有性の主なる點は次の諸點である。

#### 1 體位の劣弱

南方の諸民族も人種としては大體蒙古系であるが、蒙古系としては體格が劣弱であり、體力が不足してゐる。南方の民族が鑛山労働や船積労働の如き重労働に堪えないのは、彼等の體力が劣弱なることが與つて大である。比律賓人、ジャワ人、安南人等は多少とも諸種の鑛山で働いてゐるが、併し支那人に較べるとその能率において到底比較にならない。重労働に對する耐久力が不足してゐるからである。かゝる體力の薄弱なことは、一つには、營養不良のために體位が低下した結果である。彼等の食事は多くは二食であり、それも攝取カロリーは農夫で一日に二五〇〇カロリーに満たず、農夫としてはなほ二〇〇〇カロリーの追加を必要とする。特に食物の構成

から云ふと蛋白質及び脂肪分の缺乏が著しい。その二は南方民族の多くのものが病氣をもつてゐて自覺しないことである。マライイの話であるが、英人の實驗したところによると、マライイ人も自覺しないでもつてゐる病氣を驅除すると、俄然、活潑となり耐久力を取り戻すさうである。これらの原因に徴すれば、南方民族の體位の低下は大部分は永年の植民地的秩序の下における經濟的搾取と本國では到底許されないやうな不衛生状態の放置とに歸因すると言はねばならぬ。

## 2 創意進取の氣象を缺いてゐること

南方の民族は一般に保守的であり、その保守的態度は社會生活の萬般に及んでゐる。彼等の保守主義は東洋的社會を保持し、民族傳統を保存する點においては、むしろ尊重さるべきであるが、舊來の陋習を墨守して社會的停滯を伴ふ半面は之を打破しなければならぬ。例へば農法にしても品種にしても農具にしても、數千年來の父祖傳來のものに満足して自ら工夫改良しようとしぬ。かつてタイ國が我國から養蠶製絲の技術家を招聘してタイ人に之を教授せしめたことがある。日本の技術家の指導の下に養蠶製絲を行へば、タイ人の能力でも日本内地におけるとほゞ同様の成績をあげ、技術も之を修得し得たのであるが、この技術の修得者が日本人の指導を離れて自分の郷里に歸り養蠶製絲を行ふとなると、折角修得した日本の進んだ技術にはよらないで、相變らず舊來の仕來りの方法に従ひ新たな技術方法は一向に普及しなかつた。何故、日本の發達した技術を採用しないかと訊ねる

と、そんな面倒なことをしないで舊來の方法が安易でそれで十分満足だといふのが彼等の返答であつた。だから彼等には新たな技術方法を體得する能力に缺けてゐるわけではない。指導者の指導の下では立派にこなすことが出来るのである。たゞ彼等は新規なものを自己の生活に採り入れようとする創意進取の氣象を缺いてゐる。だから、これが如何なる事情によつて培はれて來たにせよ、彼等の社會的停滯を打破するには、單に植民地的秩序の破推だけでは不十分であり、進んで或る程度の指導者の指導を必要とする。

## 3 郷土に對する執着心が絶對的なること

一般に南方諸民族は愛郷心が強いと云はれてゐる。印度支那半島にも又群島にも、黄金の雨の降る他郷より槍の雨の降る故郷に勝るところはないといつた意味の格言がある。愛郷心の熾烈なことは尊重さるべき傳統ではあるが、彼等の郷土に對する執着は彼等の生れ且つ生長した村落生活を離れては、他郷では彼等が生活を創造し得ないことから生じてゐるのである。即ち彼等の退嬰因循なる生活態度から生じた心的傾向であつて、彼等の民族生活の發達をむしろ抑壓してゐるのである。ジャワ人や安南人は世界でも稀有の人口稠密なる中部ジャワや東京デルタに蝟集して、貧窮せる生活を営みながら、なほ容易に出稼ぎに出やうとしないのである。よし出稼ぎに出たとしても常に歸郷心に驅られて安住し得ないのである。これがため豊富な勞力の供給源が意想外の制限を蒙つてゐるのである。



## 4 勤勞意欲の缺如

何人も南方諸民族は怠惰であるといふ。この事實は疑ひないやうであるが、併しジャワや安南やビルマやタイの農民が水田に營々として農耕せる有様は旅行者の常に目撃するところである。この矛盾せる現象はどう解かれるであらうか。それはほかでもない、南方民族にあつては、生活の中における勞働はあつても、勞働の生活はないのである。グレッツァーはジャワ族について、「ジャワ族は東洋人であるから、生存するといふ事實から生活權を導き出す。必要とあれば生活し得るやうにと働くが、決して働くために生活を營むものではない」と書いてゐるが、その通りである。併しながら、傳統的生活圏の外に立つて新しい未知の世界で、與へられた職業を天與の使命として一身の快樂や幸福を犠牲にして、嚴格な規律的組織的生活の下に勞働するところの、ウェーバーが「職業倫理」と名づけた資本主義精神の一要素は、かくては生れ得ない。換言すれば、非人間的な目的に向つて孜々として働く勤勞理念と勤勞意欲とは生れ得ないのである。南方民族は一般に機械的作業に従事することを極端に嫌惡する。機械の操作が呑み込めないわけではないが、機械を相手に繰り返し同じ作業を繼續することを嫌がるのである。機械的作業に必要とする精神の統一的持續力をもち合せてゐないのである。これ南方民族が概して工場勞働者として利用せられ得ない最大の理由をなしてゐる。即ち南方には勞働の事實はあつても、勞働力は未だ形成されてゐないのである。南方社會が偉大な東洋的精神を保有しながら、社會的停滯性を脱却し得ない

理由の一半は、こゝにあるのである。

## 5 蓄積意欲の缺如

南方民族に貯蓄心の缺けてゐることも一般に人の認めるところである。彼等は一日働いて得た賃銀で二日分の食料が購へれば、他の一日はもはや働かうとはしないで、生活の餘裕を楽しむのである。林語堂は支那人について、「西洋人は進んで多くのものを獲得したり、作つたりする才能を持つてゐるが、それを享樂する能力は少ない。だが支那人は少量のものを享樂するにより大なる決心と才能とがある」と述べてゐるが、同様のことは南方民族にも當てはまるのである。君子不器で、東洋では寛濶なる生活が眞の生活とされてゐるが、西洋の資本主義精神では、極めて意志的なしかも理性的な禁欲主義的生活態度が生活倫理となつてゐる。この生活態度は極端に走れば、非人格化された營利機械となつて金錢欲の權化の如き人間が出来上がるが、併し西洋の物質文明の發達を東洋から隔絶せしめたのは、かゝる生活態度の所産としての蓄積であつた。今日の生産經濟にあつて、蓄積を伴はない經濟生活は自主自立性を保持することは不可能であり、眞の寛濶なる生活を營めようはずはないのである。

南方諸民族の通有性は、以上概説するが如くであり、これは西歐勢力の植民地的秩序を破摧してやれば、彼等が獨力で自發的に改善し得べきものとは思はれない。なるほど、それは彼等の自己改善の前提條件ではあるが、

併し彼等が自分自身で改善しようとすれば、その結果は、現代の爛熟せる、従つて既に頽廢せる西洋の資本主義精神の模倣輸入に終ることは火をみるよりも明かである。彼等に東洋的生活圏における民族としての大成を期待し得るには、東洋的立場に徹せる指導が必要である。東亞共榮圈民族對策はかゝる意味での指導對策でなければならぬ。然らば、その指導對策の根本原理は如何なるものであらうか。

#### 第四節 南方民族對策の根本原理

東亞における諸民族は、日本を除くほか、殆んど全部が西歐勢力の植民地的乃至半植民地的秩序の下におかれてゐた。東亞共榮圈民族對策の發足はまづかゝる植民地的半植民地的秩序の一切の撤廢でなければならぬ。即ち東亞諸民族の植民地的半植民地的桎梏よりの解放である。

南方諸民族の植民地的秩序よりの解放は、彼等の體力の向上を將來するであらうし、民族資質の回復生長を齎らすであらう。又、彼等の固有の文化の覺醒も促すであらう。併しその解放は所謂民族自決に歸着するものであつてはならない。思ふに、民族自決主義は自由主義的な對立觀を前提としてをり、各民族はそれ／＼自立しつゝ對立するものとなり、より高い理想の下に一層廣い生活を營むことを原理的に許さない理念である。従つて、か

ゝる民族主義の無制限な發展は、國際間には排外思想となり、各民族間の關係は敵對的とならざるを得ない。民族主義がやゝもすれば集團的利己主義または排外主義と混淆されるに至るのも偶然ではないのである。かくて民族自決主義は民族分裂主義であり、アジアは一なりとする東洋的生活圏を形成する東洋民族の民族的理念とはなり得ないのである。殊に南方民族は、上述の如く、その生長發展のためには、單に植民地的桎梏よりの解放といふだけでは不十分であり、東洋的理念に基づく指導を必要とする状態にあるとすれば、民族自決主義の不可なることは一層明瞭である。

民族自決主義が東洋民族の民族理念たるべきでないとするれば、東洋における西歐勢力の植民地的乃至半植民地的秩序を一掃した後には、東洋的秩序が建設されなければならぬ。そしてその秩序原理が東亞共榮圈民族對策の根本原理でなければならぬ。

既に日本政府はかゝる秩序原理として、「道義に基づく共存共榮の新秩序」といふことを宣言してゐる。我等はその道義の意味を具體的には「家」の道義と理解する。東洋における「家」は西洋における「家庭」とは別個の理念である。東洋においては「家」の理念は、如何なる社會組織にあつても、その秩序原理となつてをり、小は村落社會も大は國家社會も、「家」の構造と秩序とを象つて造られてゐるのである。「家」の道義は東洋では普遍的な社會生活の原理であり、それはその民族が如何なる文化の發展階段にあるを問はず、數千年間の父祖傳來の

原理として生活感情をもつて受け入れられてゐるところである。家長の統裁、家の傳統の崇拜、家族員の分際と自由、家族の共存共榮、これらの諸要素から成る「家」の道義は、單に家のみを安んずる道義ではなく、「家」の擴大であり、充實であるところの、小い村落國家における大は民族國家における生活原理をなしてゐる。即ち、「家」の道義こそ東洋における凡ゆる民族の諸種の形態において存する民族生活を貫くところの普遍的原理なのである。

八紘爲宇の原理は日本肇國の大精神であるが、これはまた東亞共榮圈建設の理念でなければならぬ。「家」の道義が東洋的生活圈に充實するとき、東亞における諸民族ははじめてその所を得ることとなるであらう。而して「家」の道義こそは、東亞の諸民族によつて極めて自然的に、謂はゞ本能的に受容され得る東洋的生活圈における絶對の秩序原理である。

## 第一章 タイ國民事情

### 第一節 人口と民族

タイ國の人口は、一九三七年の國勢調査によれば、總數一、四四六萬人に上つてゐる。そのうち、タイ國人が一、三八四萬人(九五・六%)、外國人が六二萬人(四・四%)である。外國人のうちでは支那人が壓倒的多數を占め五二萬人餘(三・六%)を占めてゐる。併し、一九三七年の右の數字は國籍別人口を示めてゐるだけで、民族別人口は示されてゐない。民族別人口を見ようとすれば、今のところ一九二九年の國勢調査に據るほかに、一九二九年の國勢調査によれば、人口總數は一、一五一萬人であり、民族別には次の如き構成を示めてゐる。

一九二九年國勢調査に依る民族別人口構成	
タイ人	比率
一〇、四九三、三〇四	九一・二
總數	

支那	四五、二七四	三・九
印度人	三七九、六一八	三・三
カンボチャ人	六五、九八九	〇・六
安南人		
ビルマ	三二、三八五	〇・三
その他	八九、六三七	〇・七

これによれば、タイ人が歴史的多数を占め、之に次ぐ支那人も問題でないやうであるが、實際はこの統計には歸化支那人及びタイ國において出生せる支那人もタイ人として計上されてゐるのであるから、かゝる支那系タイ人を支那人と見るとすれば、支那人の實數は二七八萬人（二四・二％）に達し、逆に純タイ人の比率は七三・八％に低下する。即ち、總人口の四分の一以上が異民族から構成されてゐるのである。これはタイ國が如何に異國化——特に支那化されてゐるかを示せる一斑であるといへよう。

タイ族は現在、南部支那と印度支那においては、西方はメーコン、サルウエン、ブラマプートルの上流、南はタイとカンボチャ、東は海南島までの廣大な地域を占據してゐる大民族である。彼等の中、東京の上部及び中部を占め、安南人と接觸してその習俗の影響を蒙つてゐるものを土人 *T'ho* と呼び、紅河や黒河の流域及び又安地方に住み、比較的固有性を維持してゐるものを白タイ及び黒タイと呼んでゐる。その西方メーコン上流の兩側を

占領してゐるのはラオス人であり、更にその西南メナム河流域にタイ人（シャム人）が擴り、その北西、上部ビルマと雲南の南部をシャン人が占領してゐる。その外廣東廣西の西江流域及び東京の河楊にはデイオイ、支那人の所謂狎家が居り、廣西と東京の國境にはヌン儂人が擴つてゐる。佛領印度支那に住するタイ族の人口數は約百五十六萬に達し、中七十九萬が東京に、他はラオスに住する。タイ國に住するタイ族は約一千百萬人位で、ビルマには百萬有餘、支那在住のタイ族の數は定かでないが、これも相當の人口數に達するであらう。

タイ族の起原は未だ確定されてゐないが、通説ではその原住地が西藏高原であると言はれてゐる。民族移動によつて、西曆紀元前相當古くから揚子江中流の河谷に移り、今日の四川、貴州、雲南、廣西の諸州に擴つて永く定住してゐた。併し一部のもの紀元後間もなく再び移動を起し、或るものは東南のメーコン河谷に出で、或るものは西南に進んでタイ國の北西に連るビルマのシャン高原及びサルウエン河谷に出た。前者がラオ族の起原であり、後者がシャン族の發生である。最後まで揚子江流域に留まつてゐたタイ族は南紹帝國を建て支那民族の南下に抵抗してゐたが、南宋軍に追はれ、次いで勿必烈の襲撃を受けて大理府が陥るや、大舉して南下し、メーコン、メナム河流域に移つた。これが今日のタイ國のタイ人である。

このやうにタイ族の南漸史について見るも、<sup>(註)</sup>又言語學上より見るも、シャン、ラオス、タイの三民族はその源を一にしてゐる。メイ R. L. May がタイ族の南下に際し、シャン高地及びサルウエン河谷に向つたものをタイ

・ *ロング Tai Lung* 即ち大タイと呼び、*メーコン*、*メーナム*河谷に下つたものは後より來れるが故にタイ・ノイ *Tai noi* 即ち小タイと呼ぶといふも、大タイに屬するシャン人と小タイに屬するタイ人とは、その起原は同一族であつて、そのメーナム河流域に到達した経路及び時期を異にするにすぎぬ。タイ人がタイと自稱するに至つたのも、彼等がメーナム河上流に來つて異民族を征服した後、自由を意味する言葉タイを自ら好んで誇稱したに始まり、決して古いものではない。支那に居住してゐた頃のタイ族の稱呼は、*Grindrod* によればシャンとなつてをり、*W. A. R. Wood* によれば哀牢 *Alao* として漢族に知られてゐたとす。

(註) 語系からすれば、シャン語もラオス語もタイ語もいづれもタイ語系であり、ビルマ語をもつて代表されるチベット・ビルマ語系及びビルマのモン語、カンボヂヤの古代クメール語によつて代表されるモン・クメール語系の三大語系が印度支那の語系をなしてゐる。そのうちタイ語系及びチベット・ビルマ語系は支那語と共通する點が多いが、最後のモン・クメール語は支那語とは何んの關係もなく、むしろマライ・ポリネシア語、メラネシア語など同一系統に屬する。

併しながら、現在においてはタイ國の西北境からビルマ領内に居住するシャン族と、北部タイから佛領印度支那にかけて居住するラオス族と、メーナム河中流以南を本據とするタイ人とを比較すれば、その間には明に差異が認められる。最北に居るシャン族は支那人に似て皮膚が白く身長も之に近いが、ラオス族は前者ほど白くなく、最南に居住するタイ人は甚だ色が黒い。之と同時に身長も漸減してタイ人は最も小柄である。併しこれとも赤道に近づくといふ環境の變化に順應せる肉體の變化の一例にすぎない。殊にタイ人とラオス族とは生活様式

の共通せると相互間の人間的交渉が繁かつた結果、相混じて殆んど見分け難くなり、今日では一樣にタイ人として取扱はれてゐる。

タイ族がメーナム河流域に南下して來る以前には、メーナム平野一帯にはモン族が居住してをり、東部地方一帯はクメール族(カンボヂヤ人)が支配してゐた。タイ族は北より追はれて南下し、モン族とクメール族との接觸點地方に侵入して兩族を東西に驅逐すると共に、殘留種族と結合して今日のタイ國の中核をなすタイ人を形成するに至つた。東に驅逐されたクメール族は、今日その大部分が佛領印度支那に居住してをり、西に追はれたモン族はビルマ領に居住し、ビルマのクライン人がその子孫である。

このやうにタイ國は、比較的後代において移動して來たタイ族によつて先住民族の征服をもつて建國されたのであるから、タイ國內の種族構成はなかく複雑である。種族の數はいち／＼數へ上げれば三十六の多きに上るが、その重要にして支配的な民族は言ふまでもなくタイ族である。タイ族の外には、マライ人(約四〇萬)、モン・クメール族のスイー(Si) (又はクイ Kwei) (約二六萬)、クメール族(約一六萬)、モン族(約六萬)などが主なるものである。次に主なる種族の性能について述べよう。(マライ人についてはマライ篇参照)

## 第二節 タイ族の性能

タイ國に居住するタイ族は更にタイ人、コーラート・タイ族 (Tai Kora) 及びラオス族の三種族に分れてゐる。そのうち、タイ人がタイ國民の中核をなしてゐることは言ふまでもない。

## 1 タイ人の性能

タイ人は外人は之をシヤム人と呼ぶ。タイ族が南下運動を終つた當時において、古來この地方を占據せる諸々の土王國をシヤム Syama と總稱されてゐたが、この名稱をもつてタイ族はシアマ人と呼ばれるに至つた。それが漸次に訛つて今日のシヤム Siam となつたと云はれる。併し、タイ人自身は自らをコンタイ (自由人の意) と稱してゐる。

タイ人は容貌が甚だ蒙古人的特色をもつてをり、頭は幅廣く、後頭部が平たく、顎は出張り、鼻は鼻孔部廣大にして、眼は長斜、耳は大、頬骨は高く、皮膚は白色又はチエコレート色である。體格は概して發育佳良であるが、下肢の發達が上體のそれに伴はず、平均身長は男にて五呎一時、女は四呎十一吋位で小柄である。

タイ人の固有 服裝はパマンである。男女とも布で腰の周圍を巻き兩端を前でからけ之をまた下へ通して後に

端折る。パマンは多くは無地の輸入綿布を用ひ、習慣上、毎日使用する色合を決定してゐる。その上に男は詰襟の上衣を着し、女は腕の下に體を巻くスカーフを用ひる。上流社會のものは靴下及び靴を穿くが、下層社會では上體を裸出し跣足のものが多い。

主食物は米で、副食物は主として魚及びカレーであつて、之に刺激性の香味料を盛んに用ひる。宗教上より獸肉を取ることは稀である。食事は多くは朝夕二回である。酒は多くは米及び砂糖より醸造した土産品であるが、佛法の戒律に觸れるので之を用ひるものは少なく、宴席にても酒の饗應は憚られる。即ちタイ國は稀に見る禁酒國である。但し烟草は頗る愛用し、男女とも幼時から國産の強烈なる烟草を嗜む風習がある。

タイ人の性情としての最大の特徴は、性温順にして人情に豊かなことである。氣質としては氣輕で開放的であるが、他人に對しては禮儀に厚く他人を遇するに丁寧親切である。明にこれらの美德は彼等の信仰の篤い佛教と關係するところが多い。彼等が一般に慈悲深いことも、むしろその現はれである。彼等は老衰不具者には合掌して喜捨し、中流以上の家庭では食客を多數扶持することを誇とする程にて社會的救恤機關の必要を更に感じないと云ふ。従つてまた暴力的犯罪を犯すものは稀有である。併し、他面、彼等は癡癖が強く、物に厭き易く、怠惰で生活するに必要な程度以上には働かうと欲せず、賭博に耽り、蓄財の念に乏しい。また迷信が強く、保守的であつて舊慣を墨守して容易に之から脱却できないし、また脱却しようとしないのである。かくの如き退嬰因循

な性質は南方民族の謂はゞ通弊であり、それは南方における唯一の獨立國たるタイ國においてさへ、今日に至るまで國民經濟の自立性を見ず國民經濟の中樞がイギリスの資本と華僑の手に壟斷されて來た原因の一半であるといはねばならぬが、タイ國では更にかゝる原因の他の一半として佛教の影響を見逃しえない。

タイ國の佛教は小乗佛教にして、その特色は、(一)保守的にして戒律を嚴守すること、(二)終身僧侶たる者は甚だ稀であつて早いのは三ヶ月、遅くとも三、四年をもつて還俗すること、(三)寺院には炊事場の設備なく僧侶は托鉢によつて生活すること等の點にある。而してタイ人の佛教に對する信仰は頗る篤く且、敬虔で、タイは事實において佛教を國教とする世界唯一の國柄であると言へる。上は國王から下は庶民に至るまで殆んど全部が之を信奉し、多少教義は異なるが在任支那人を始め、ビルマ人、カンボヂヤ人、モン人等も概して佛教徒である。然し意外に信教は甚だ自由であつて、古來、他宗教の禁止迫害を受けたることなく、必要な土地は之を下附され布教上には凡ゆる便宜が與らされてゐる。とはいへ佛教はタイ建國以來の宗教で確固不拔の基礎を有してゐる。寺院は一九三四年三月現在で總數一七、二三六寺、過去五ヶ年間に一、五〇〇寺を増加してゐるといふ。佛教僧籍にあるもの三五五、九八五人(一九三三―三四年)、ヨーロッパ人が當國を「黃衣の國」と呼ぶも故なしとす。

かくの如く佛教は事實上國教であり、國王は親ら「法の擁護者」をもつて任じ、一九二九年の國勢調査によれ

は實に國民の九五・二四%余は佛教徒である。しかもその信仰は頗る篤く貴賤貧富の差別なく男子は一生一度は必ず出家する風習があり、壯齡にして佛門を潜らねば社會上の信用薄く一門の恥辱とする。故に寺院僧侶の數も夥しく王室の儀式を始め公私の儀式及び祭事はすべて佛式に範り佛曆を採用して四月一日を正月とし挨拶に合掌するなど、日常習俗に對する佛教の影響は絶大である。又、寺院と普通教育との關係も密接で、今日なほ學童の大多數は寺院にて僧侶により初等教育を受けてゐる。官立小學校一九三校中、寺院内にあるもの一一五校、公立小學校九、〇八一校中、同じく寺院内にあるもの五、一四九校の多きに上つてゐる。

このやうに佛教(小乗佛教)はタイ國民の凡ゆる生活部面に深く喰ひ入つてゐるのであるから、佛教思想の影響が彼等の經濟生活に廣汎に及んでゐるのも不思議でない。古來、タイでは商業は之を外人、殊に支那人に委せて殆んど之に關心をもたない。その所以は、勿論熱帯特有の氣候並に生活の安易さに據るところも少くないが、しかしまた上層階級の商業に對する賤蔑の情に歸因することも看過できない。在バンコック精米所の多くは組合組織となつてゐるが、大部分は所有者經營者共に支那人である。前大戰後、當國の官邊並にタイ人有力者も之に投資する者を生じたが、その經營者は殆んど支那人である。大工場では歐人技師を使用するが、その他の雇庸者は殆んど凡てが支那人であり、粳及び米の積込み及び積出に携る苦力も凡て支那人であれば、原料粳の仲買人もまた支那人で、當國の輸出の大宗たる輸出米は、その生産をタイ人が行ふほか、他の業務は殆んどすべて支那人

の手に握られてゐる。

又、タイにおいて農業に次ぐ基本産業たる漁業においても、タイ人資本家が佛教思想上より漁業投資を嫌忌する關係から、投資家としては淡水漁業においては安南人及びその系統の者が多く、相當の資本を要する鹹水漁業にあつては殆んど支那人である。

かくて生業者としてのタイ人は、官吏か僧侶か、然らずんば農民である。タイ人は性質悠長であつて、農耕、特に米作には好適であるが、現在でも千古一日の如く父祖傳來の農法及び農具を墨守して、科學的改良は殆んど之を取り入れようとしない。蒔きて坐し實りて即ち食すといふ有様で、一般に貧困な生活に甘んじてをり、徒に金貸業者又は農産物仲買人の好餌となつてゐる。或る觀察者がタイ人の經濟的發達程度は七十年前の日本人にさへ遙に後れてゐると結論してゐるのも、あながち過言とのみ言はれないのである。

併しタイ國は建國以來獨立性を保有し、タイ人はタイ國民を形成して來てゐるのであり、殊に一九三二年六月には立憲革命が行はれ、新政府はその政綱の一として法權及び財政經濟の獨立を標榜してゐるのであるから、タイ人の經濟能力は今後急速に發達するものと見てよい。そして大東亞戰爭がこの發展を愈々急速するであらうこともまた明かな事實である。

## 2 コーラート・タイ族

コーラート・タイ族はコーラート及びナーコン・ラーチンマー地方一帯に居住するタイ族で、タイ語を話すが抑揚に稍粗野な調子がある。本族は十四世紀の中葉、アユタヤ王朝の初期、この地方に蟠居してゐたクメール族征討の軍を派遣した際、アユタヤ兵とクメール族の女から生れた後裔であると言はれ、従つてタイ人中に加へられるのが普通である。併し平地のタイ人に比すれば、性剛毅にして果敢なところがある。

## 3 ラオス族(ラオ・タイ族)

本族はラオ・ブンダム(黒腹のラオ人)とラオ・ブンカーオ(白腹のラオ人)との二部族に分れてゐる。前者は北部タイの全地域よりナーコン・サワン州に亘つて蔓延し、アユタヤ、ナーコン・チャイシー地方にも散居してゐる。腰から腿、膝にかけて刺青を施してゐるのでこの名がある。又、ラオ・ユアン或はタイ・ユアンとも呼ばれてゐる。後者は刺青の風習なく、東部タイの大部分に居住し、ピサヌローク、ナーコン・サワン、ラーチブリー州等にもその部落を散見する。

ラオス人はタイ族の先住種族たるためタイ人と容貌習慣共に酷似してゐる。たゞ上述の如く外見上、體格が比較的よく多少色が白く容姿が勝つてゐる點、女は頭髮を延ばし頭頂に束ねて花を飾り、バヌンの代りに腰から足首に達する縞のスカートを着け胸から一方の肩に掛けるスカーフ(時にはデヤケツ)を着けてゐる點、言語に外來語の影響が少ない點等を異にする。



北部ラオス人はタイ人の美點を具有すると共に、勤勉正直で落ち付きがあり、宗教的良心が豊かであるが、東部ラオス人は性質が之よりも劣つてゐる。殆んどすべてが佛教信者であるが、タイ人よりも活物崇拜の傾向が強く迷信もまた強い。藝術は可なりに進歩してゐて、銀細工、彫刻、刺繍、繪畫、音樂等はタイ人に比して遜色がないといふ。かくの如く彼等はタイ人に近似してゐるため、政府は統計上タイ人として取扱つてゐる。今後交通の開發と相俟つてタイ人と全く同化することと考へられる。

ラオス人、特に北部ラオス人の最大の特徴は、彼等がタイ國において最優秀の農業労働者であるといふことである。彼等は毎年隊をなして農業労働者として中部地方に出稼に出てくる。彼等は農業、殊に米作に習熟してをり、しかも勞銀も安く、性質は従順實直にして農業労働者として最も好適である。彼等に水牛一頭と所要の農具を給すれば、一人當りよく移植米田にて二〇畝（一畝は二・五エーカーにして我が一反六畝四歩に當る）を、直播米田にて三〇畝を耕作しうる。普通、家族とも雇傭され家人もまた農作に従事し、女も水牛を使役する。農業労働者としてはビルマ人、印度人、支那人などよりも遙に優れてゐるのである。賃銀は普通、五月より翌年二月に至る一米作期極めの年奉公で、熱練苦力にて九〇乃至一二〇銖、比較的年少なれば七〇乃至九〇銖である。その他に衣食住を給與する必要があるが、當國の氣候上、衣食費は八〇乃至九〇銖にて足るべく、住居は各自最寄りの材料を物色して自身造營する。

かくの如くラオス人は農業労働者として甚だ優秀であるから、又 チョンブリー地方の甘蔗の栽培にも北部ラオス人が多く使用されてゐるが、更にチーク伐採作業にも進出し、從來殆んどカムー人の契約苦力の獨壇場であつたこの方面においても漸次ラオス人を使用する者が増加してゐる。かづれにしてもラオス人はタイ國において困難なる農業勞力の調達にとつて重要な給源であり、かゝる意味において十分高く評價されなければならない。

### 第三節 その他の諸民族の性能

#### 1 クメール族

クメール族はタイ人の南下によつて東方に押しやられ、現在ではその主要部分が佛印のカンボヂヤに居住してをり、カンボヂヤ人と云はれてゐる。その性能については佛領印度支那篇において説明するつもりである。たゞ今日タイ國內に居住するクメール族について言へば、その實數の見積は區々であり、一説には一六萬人に上ると云はれるが、その風俗習慣宗教ともにタイ人又はラオス人と同様であり、たゞ大部分はなほ母國語（クメール語）を使用してゐるところに差異が認められる。生業は専ら小農業である。

#### 2 スーイSE族（又はクイME族）

本族はスリーン、クイカン及びウボン縣地方一帶の廣範圍に亘つて居住し、ロイ・エツト地方まで蔓延してゐる。言語はクメール族のそれとは可成りの相異を示してゐるが、種族としては非常に密接な關係にあり、カンボヂヤ及び東部北部タイの原住種族を代表するものである。クイ語を使用してゐる者のほかに、一般にはラオス人と呼ばれてゐながら單にラオス語を話してゐるクイ族にすぎないものも相當數に上つてゐる。彼等の總數はむろん判然としないが、二六萬人に上るであらうと推算されてゐる。

本族はラオス人やクメール族に比して遙に文化が遅れてゐる。彼等はソー族ほどではないにしても、一般に色が黒く、中には髪が縮れてネグリート族の系統の認めらるゝものがあるといふ。一般には佛教徒と見做されてゐるが、精靈崇拜的な迷信が廣く行はれてゐる。ラオス人又はクメール族の風習を見習つて耕作に従事し、或は家畜を飼養してゐるが、その家屋は非常に貧弱で且つ不潔である。たゞスーイ族は多數の部族に分れてゐるが、その中のクイ・ムアイといふ部族は象狩りに巧みなことで有名である。

### 3 モン 族

モン族は嘗てカンボヂヤ人の西隣に一大勢力を張つてゐた種族である。そのビルマ領イラワヂイ河口に榮えたモン族の國家(タライン人の國家)がビルマ族と數世紀に亘つて凄慘な鬭争を繰返へしたことは、後のビルマ篇において概説せる通りである。之に反して今日のタイ領メーナム河上流に西紀八世紀頃モン族によつて創建され

た Haripunjaya 國は十三世紀の末にタイ族に滅ぼされ、又十一世紀頃以來クメール族の屬國となつてゐたメーナム河下流域の墮羅鉢底國 Dvaravati も十四世紀の中葉にタイ族のために滅ぼされ、これらのモン族は殆んど痕跡をとどめぬまでにタイ族に同化されてしまつたのであつて、今日タイにおけるモン族と呼ばれてゐるものは、捕虜又は避難民としてビルマより入つて來たものの子孫である。主として首都附近の河岸に部落をなし、比較的富裕なる生活を送つてゐる。容貌、服裝、宗教はタイ人と異らないが、たゞタイ人よりも一般に身長が高、タイ語も話してゐるが、その多くはなほ母國語(モン・クメール語)をも話し得るのである。

### 第四節 結 語

之を要するにタイ國においては種族の數が多くその構成こそ複雑ではあるが、注視すべき民族としてはタイ族、殊にタイ人及びラオス人に限定されるといつてよいのである。而してタイ人は支配的種族ではあるが、その經濟的能力には特に卓越せるものを見出すことをえない。恐らくタイ人として最も優れた能力は彼等の政治的能力であらう。彼等が征服した民族を同化してきた點や、複雑な事情にある印度支那にあつて覇を唱へ永らくその獨立を保有してきた點等はその一證左であらう。之に反してラオス人は僻遠の地域に居住し、文化の光澤に浴す

ること比較的薄い事情にかゝはらず、その勤勉なる労働意欲には見るべきものがある。この意味において我々はラオス人の將來を重視すべきことを、こゝに再確認しておきたいと思ふものである。

## 第二章 佛領印度支那民族事情

### 第一節 人口と民族

佛領印度支那の總人口は大凡そ二千三百三萬に上つてゐるが、その人種的構成は頗る複雑で、各種族の身體的特徴、言語、宗教、文化の程度等は地方によつて甚しく相違してゐる。元來、印度支那半島はアジア大陸の東南に突出してをり、海上からの民族の移住が行はれたばかりでなく、内陸は幾條の褶曲をなしてゐる關係上、北から南に移動する民族の通路にあつてゐると共に、そこに幾つかの道が河谷に沿ふて開けてゐると謂へる。従つて絶えず新しい民族が此から入り込み舊勢力にとつて代つてゐる。概觀すれば、海上から侵入した勢力がまづ榮え相當の文化を築いた後、北から河谷に沿つて南下してきた勢力に征服された形になつてゐる。然し北方から南下して來た勢力のために古い種族が全く追出されてしまふかといふにさうではなく、彼等は新來の民族と混淆したり又は山地に残存して昔の儘の生活を營んでゐるものがある。このやうにして印度支那半島はビルマでもタイでも見られるやうに複雑な人種構成を示めてゐるが、佛領印度支那においてはそれが一層甚しいのである。

佛印におけるこの種族的構成の複雑性は、第一にこの國への移住民が多種多様で彼等は互に相接觸し又相混淆することによつてその原始的タイプを失つたこと、第二に印度（海上から）と支那（北から）とからの外部的影響が或る種族の高度の文化とその一時的又は永続的支配を可能ならしめたこと等に基因してゐる。今、一九三六年の佛印當局の調査に基いて、佛領印度支那人の民族構成とその地方別分布の状態を示せば次の通りである。（逸見重雄氏著「佛領印度支那研究」に據る）

佛領印度支那の民族構成

歐人及それに類する者 佛籍民又は保護民	佛領印度支那の民族構成				合計	實數	%
	安南	東埔寨	交趾支那	老撾			
安南人	1,655,000	1,217,000	3,999,000	2,700,000	7,664,000	1,655,000	21.4
東埔寨人	—	2,999,000	3,333,000	1,250,000	7,682,000	2,999,000	39.1
タイ族 （老撾人 その他）	800,000	110,000	100,000	565,000	1,675,000	565,000	33.8
インドネシア族	120,000	—	—	100,000	220,000	120,000	54.5
ミヌオン族	90,000	—	—	—	90,000	90,000	100.0
マン（ヤオ）族	—	—	—	—	—	—	—
メオ族	100,000	—	—	80,000	180,000	80,000	44.4
合計	3,565,000	4,326,000	4,399,000	4,735,000	17,025,000	3,565,000	20.9

マライ族及チャム族	21,000	27,000	8,000	—	56,000	21,000	37.5
ミン・フォン族	—	—	21,000	—	21,000	21,000	100.0
その他	—	—	—	110,000	110,000	110,000	100.0
アジア外人	—	—	—	110,000	110,000	110,000	100.0
支那人	11,000	108,000	121,000	2,000	342,000	342,000	100.0
印度人その他	100	2,000	1,000	100	3,100	3,100	100.0
合計	3,565,000	4,326,000	4,399,000	4,735,000	17,025,000	3,565,000	20.9

これによれば、總人口の實に九八%以上が土着民であるが、それが商權は僅か三二萬人の華僑その他に握られ、政權はたつた四萬人の佛人（うち一〇、五七四人は外人部隊を含むフランス人軍隊である）に握られ手も足も出ない状態にあるのである。

土着民族の中、主要なものは安南人、カンボチャ人、タイ族（特にラオス人）である。これらは人口數から見ても重要な割合を占めてゐるが、文化の發達程度からいつても當佛領印度支那における主要民族である。之に反して所謂インドネシア族以下の諸民族は安南山脈又は高地東京又は高地老撾に居住する「山地蠻」で文化水準のなほ極めて低い種族か又はチャム族の如く今日殆んど滅亡に瀕してゐる種族か乃至はミン・フォンと呼ばれる支那人と安南人の混血種族であつて、民族誌的又は土俗學的にはともあれ、政治經濟的觀點からはさほど重要性をもつものではない。

かくて、當領を代表すべき民族は安南族、クメール族（カンボチャ人）及びタイ族（ラオス人）で、この三種族は佛領以前に既に民族國家又は氏族國家を形成してゐたものであり、現在でも形式的に過ぎないといへ、各王朝を殘存せしめてゐる種族である。就中、安南族はその數において壓倒的優位を占めてゐるだけでなく、當領平野の至る處に根を張り、家族制度とその延長たる村落共同體を基礎とする傳統的農業を營み名實共に當領の支配的民族となつてゐる。

## 第二節 安南人の性質及び能力

安南人は平野を愛好し山岳居住を忌み嫌ふと謂はれる。實際、その地方分布を見ても判かる通り、彼等は東京デルタ、交趾支那平野、安南海岸地帯に密集して居住してゐる。印度支那の諸民族は概括して山地の住民と平野の住民とに分たれるが、歴史の各時代を通じて指導的位置を占め得たものは常に平野の占據者達であつた。安南人が佛領印度支那の平野を占據してゐることは、やがて彼等が徵則、徵貳の姉妹による獨立の年（紀元四〇年）より數へて約一千九百年前から當領における支配的民族であつたことを物語る事實でなくてはならぬ。

安南族は廣義の蒙古民族の一部で、蒙古民族中でも體格のあまりよくない方であり、日本人より丈が低く（平均一米五九五）短頭で頬がこけてをり、ちよつと眼つきは鋭いけれども何んとなく弱々しい。手足はしなやかで容貌は一見伶俐さうであるが、同時に狡猾な相を含み、皮膚の色は支那人と殆んど異らない。

松本博士は面白い記述をしてゐる。徳川時代に印度支那に漂着した日本人の漂流記によると、漂着した日本の船頭が大變安南人に歡迎され食事を出された。さうすると日本人は脚を折つて坐つたので見てゐる安南人があつたと驚いて雪崩こみ大騒ぎをしたとある。これは當時の安南人が日本人の如く膝を合せて坐ることをせず片膝に一つの足を横にし丁度立膝とあぐらの折衷式坐り方をしてゐたので、日本人のきちんと坐つてゐるのを見て驚いたものであらう。また同じ漂流記を見ると日本の漁師が街を散歩してゐると安南の不良が之とすれちがひ日本人を馬鹿にして前をまくらうとした。日本人が怒つてそこにゐた者を皆叩き倒したといふやうなこともあつて、脅力においても日本人に到底敵はぬ人種らしい。

安南人の歴史は古い。一説には安南人は昔浙江に國した越人の子孫であり、越國が楚に亡ぼされ、その王族が南に逃れ安南人の祖先となつたといふ。併し支那史に出てくる最初の安南人の名は西甌裸國とあり、眞つ裸であつたとある。周末に吳と並び稱せられ中原に覇を唱へた越國の子孫が南に逃れて來て眞裸の民族になつたとは考へられぬ。恐らく安南人は歴史時代の初頭から東京平野か廣東廣西の南疆に住んでゐた人種で、そこで種々の他

の人種要素とも混血し今日のやうな安南族になつたのではないかと考へられる（松本博士の説）。安南人は廣東に南越國が出来たときその治下に入つてゐたが、漢の武帝が南越を征服したとき（紀元前一〇一年）安南地方も支那の領土に化したものと思はれる。それから唐末まで約一千年、その間、後漢の時代に徵側、徵貳と呼ぶ姉妹によつて獨立運動が起きたこともあつたが、未だ獨立を確保するだけの實力もなく、安南人は支那人によつて支配せられて來たのであるから、支那文化の影響を著しく蒙つたことは想像される。金屬製の鋏の使用、灌漑耕作の慣行も支那から學んだものであり、儒教の傳承は云ふまでもなく、佛敎も支那から移入されたものである。文學も漢字漢文が用ひられ古典はすべてそれで書かれてゐる。

安南の支那統治は約一千年ばかりつゞき、今から約一千年前漸く支那の羈絆から脱することが出来た。即ち漢、六朝、隋、唐の間つと支那の領土であつたが、唐末の五代といふ紛亂時代、各地に節度使が獨立したとき、安南族も支那から獨立して最初の王朝を樹立した（紀元九三九年吳權による吳朝の樹立）。宋は之を征服しよと兵を派したが安南軍に大敗してゐる。又、蒙古人が元の時代に三回ばかり侵入し、殊に勿必烈の旗下の勇將は二度も都を陥れたが、餘りに氣候の悪いのと安南人が勇敢に戦ひその糧道を斷つたので、流石の蒙古軍も遂に安南を放棄せざるを得なかつた。當時歐亞に跨る大帝國の建設者である蒙古をして遂にその獨立を脅かし得ざらしめた。この時の安南人の民族精神の旺盛さは之を認めざるをえない。次いで明もまた安南を一時占領し郡縣制

度を敷いたが、遂に統治に失敗して、一四二八年黎利（黎朝の始祖）が立つや之を放棄せざるをえなかつた。支那流に徹底的な同化政策を強行してみたが、結局成功しなかつたのである。

この間、安南王朝は數回變つたが、その勢力は次第に南方へ延び、チャム族やクメール族を驅逐又は征服して南方デルタをも占據するに至つた。フランスが當領の攻略に着手した頃は、安南の歴史では黎朝の末期で所謂南北朝時代と云はれ、大越國王（黎朝）は虚位を擁するにすぎず、實權は鄭氏と阮氏とに握られ、南北の二大侯が互に對立抗争しつゝある時代であつた。フランスはその對立を利用して先づ南方の阮氏を援けて安南の統一を實現せしめ、次いで事を構へてこの國から交趾支那を奪取し、最後に安南國そのものをも保護國としてしまつたのである。フランスはそのため清とも戦ひ支那の安南に對する宗主權を放棄せしめるに至つたが、安南族が約一千年に亘つて支那から受けた影響は甚だ強くその制度慣習等において今日においても支那に極く近いものをもつてゐる。

一部安南人の知能の程度は決して支那人や日本人と較べて大して劣つてゐると思はれない。併し一般の教養は殘念ながら甚だ低劣である。これは民族資質に基くといふよりは、むしろフランスの植民政策に基因すると云はなければならぬ。安南人は質素勤勉な民族である。尤も南方民族の通有性として北方民族に較べれば勤勉の程度は甚だ低いと云はねばならないが、南方民族にあつては恐らく最も勤勉な民族として擧げることが出来よう。

彼等是一般に好學心に富み教育を尊重しその子弟を教育して官吏に育て上げるのを無上の光榮としてゐる。事大思想といへばそれにちがひないが、支那の影響が強く及んでゐることを思はしめる。又、凡ての社會を通じてそれ相應に讀書、詩賦、音樂の趣味をもつてをり、上流のものは可なり發達せる藝術的情操を有してゐる。祖先を崇拜し祭祀を重んずるが、舊習に對しては必ずして墨守する態度をとらない。十五、六世紀、民族膨脹の最高潮にあつた安南人は、性來の剛毅に支那人の執着力を加へた優秀民族であつたもので、今日でも訓練すれば立派な兵士となる能力を十分に具へてゐるといふ。資質的缺陷としては、詐りが多く、經濟觀念に乏しく、且つ賭博を好んで節制をなさないことである。

安南人の主食物は米で調味料として魚醬（ニョク・ナム）を用ひる。魚醬は魚を醗酵して作り、わが國の醬油の如き役割を果すのだが、鹽辛く甚だ生臭い。香を嗅いだだけでむか／＼するが、安南人はこれにより食欲を唆られるといふ。副食物としては多量の野菜と乾物、燻魚、豚肉、雞肉等を少量用ひる。料理としては支那料理に似てもつと淡泊である。茶は最も愛好とするところで、米から醸造した酒も用ひられる。烟草やベテルも愛用されるが、支那人との接觸によつて阿片吸飲の惡習も行はれてゐる。

服装も支那の影響で支那服ときはめて類似してゐる。上衣は腰部以上兩袖が身體に密着し下部は緩かに垂下して膝に達する。殊にズボンに廣く緩かなものを用ひる。男女とも殆んど同一であるが、たゞ異なるのは色調であ

る。一般に安南人は白、黒等の單色を好んで用ひるが、東京の女は茶褐色の上衣に白ズボンを多く用ひ、交趾支那、殊に南部では眞黒の服を着てゐる。勞働者はクナイ染の穢い茶褐色の衣服を用ひる。近年、都會の青年は背廣を好んで着用してゐるに對し、娘が依然として固の安南服に執着してゐるのは興味深い現象である。男子は以前は結髪の風があつたが現在では斷髪である。農民や勞働者は男も女も跣足で歩く。中流以上の男女は靴又はサンダルを用ひる。跣足か否かで、その者の社會的地位がほと判かるのである。

安南人の住家の構造も至つて簡單である。他の種族の住家が杭の上に建てられるのに反し、安南人の家屋は直接地上に建てられてゐる。家屋は長方形をなし、都會では煉瓦造りや瓦葺のものを見うが、通常は屋根は藁か浦葵で葺かれ、壁は竹で編んだり竹の骨組の上に粘土を塗つてある。窓が殆んどないのが注目せられる。それと貧富を問はず入口の正面に祭壇を安置してゐるのも共通の特徴である。これは彼等の生活にあつて、祖先崇拜が重要な意義をもつことを物語つてゐる。

安南人の大部分は農民で水田耕作に従事してゐる。彼等の祖先は、既に支那史で西甌裸國と稱せられてゐる頃から、デルタ地帯に河の水が上げ汐の海の水に押されて逆流し溝洫の中に流れ込むのを利用して、水田に灌漑し水稻を栽培してゐた。今日でも安南人の居るところ必ず水田ありと云はれるほど、彼等は本質的に農耕者である。若干の安南人は漁業にも従事し又多くは手工業に携つてゐるが、概ね副業であつて産業の分化は殆んど行は

れてゐない。だが手業は頗る器用で祖先傳來の方法をもつて刺繡、裁縫、編物、彫刻、象眼、箆籠の製作に従事してゐる。併し商業は一般に彼等は之を蔑視する傾向が強く、小規模の小賣業も之を女子供に任せて省みない有様で、卸賣業や外國貿易の如きは悉く華僑の獨占するところとなつてゐる。

かくて安南人の主たる生業は農業であるが、農業においては零細土地所有者たる自作小農民とこの小農經營に隸屬する半隸農的雇傭労働者が壓倒的多數である。農村の階級分化はフランスの植民地となつた交趾支那では顯著に之を認めうるが、保護領たるその他の地方では土地が著しく細分され（東京では〇・三六ヘクタール以下の耕地所有者が全體の六一・六三%を占め、一・八ヘクタール以下の所有者で全體の九〇%以上となつてゐる）、家族制度と村落共同体に緊縛された小農經濟が生活の土臺をなしてゐる。殊に安南族の根據地たる東京デルタはこの種の零細農民が充満し世界稀有の人口過剩地帯を現出してゐる（東京の南定州は一平方軒六七五人、タイピン州六四〇人、その他バクニン、ハドゥン、フエンの各州はいづれも四〇〇人を超過してゐる）。

かゝる人口過剩は、言ふまでもなく近代産業の開發にとつて有利なる勞力の供給源たりうるものである。それにも拘はらず佛印に從來まで近代的工業化が行はれなかつたのは何故であらうか。その主要原因は、一つにはフランスの植民政策の消極性にあつたものと考へられるが、こゝにはこの問題を追求することは之を措かう。他は安南人の勞力そのものにあると考へられる。

安南人の提供しうる勞力の質は如何といふに、屢々困窮して殆んど食糧にさへ事缺く安南人労働者の能率を、遙に健康にして抵抗力ある西歐の労働者のそれに比較することは、むろん問題にならない。けれどもベルナル氏の如き實務家の意見によれば、安南の労働者は日本の労働者に匹敵するといふ。安南の労働者はどんな場合でも異論をさしはさむ餘地なき手の器用さをもつてゐて、教へられた技術を極めて短時間のうちに習得するといふ特質をもつてゐる（ケエリアン教授の見解）。がしかし、他面において、安南人のかゝる優秀な勞力も之が近代的産業労働化を阻止する要素を含んでゐることを知らねばならぬ。それは安南人が労働意欲を缺如してをり、且つ他郷への出稼を極端に忌み嫌ふからである。労働者としての安南人は安定性を缺きその仕事に持続性がない。又、その生活が甚しく窮乏してゐるに拘はらず他郷に出稼することを欲せず、旅行さへも嫌ふのである。この點は多くの人々から強調されてゐる。安南人は實際、大概の事業に對して工具として利用出来ることは疑ひないが、この止みがたき歸郷心はその最大の缺陷となつてゐる。

一二の例として、こゝにまづ佛印のゴム栽培事業の例をみよう。ゴム栽培事業における労働者は主として之を安南人に求められる。交趾支那の灰色土地帯のプランテーションでは、村落及び米田の近くに位置してゐるから、經濟的にその地方の自由労働者を利用しうるが、赤色土地帯の大プランテーションでは労働力の不足を東京デルタの過剩人口地帯からの募集苦力によつて補はなければならぬ。一九二四年以來、労働法規に従つて三ヶ年



の契約條件で雇傭される契約苦力がその本隊をなしてゐる。契約條件は東京における彼等の生活條件に比すれば優つてゐるが、安南人は郷土に對する愛着が強く仕事に對する執着心がない。加ふるに賭博癖があつて貯蓄心を缺いてゐるから、農園主は彼等を農園に定住せしめるために種々なる文化施設を施さねばならない。これが勞力に對する農園主の負擔をして非常に高價ならしめてゐるのである。

第二の例は炭礦業である。印度支那においては、一方には極端な人口過剩地帯を有するにも拘はらず、鑛業企業家は勞力の不足と能率の低劣に悩まされてゐる。フランスの或る報告書は書いてゐる。「安南人はその聰明と多種多様の仕事に對する適應性とを發揮してこの缺點を補つてゐることは事實であるが、併し安南人は勞働者募集の説得に應ずるか否か、はたまた一旦炭坑に就職しても喜んでそこに落ちつくか否かに關しては懸念なきをえない。安南人勞働者は極めて小食に慣れてをり、他方においては炭坑から支給される賃銀が比較的高率であるため、仕事に對して甚しくムラがある。實際、勞働者の一週間の賃銀は二週間の生活を支ふるに充分である。されば炭坑業者は普通その經營に必要なるべき勞働者を少くとも二倍必要とする。東京の大炭坑の一つにおいて一萬人の勞働者中、毎日從業してゐるものはその半數で残りの半數は賃銀を消費し盡して已むを得ず再び勞働に従事せざるをえなくなるまで休息してゐる事實を指摘すべきである」と。

安南人における勞働者としてのかくの如き安定性の缺如は、主として次の事情に據るとせられる。即ち、安南

人の間において、特に東京デルタにおいて、今日もなほ強力に支配してゐる社會制度は村落共同體と家族制度とであるが、この制度はデルタ出身の農民を祖先の墳墓の地にいつまでも結びつけ、村落共同體生活に斷ち難き愛着を抱かしめ、彼等の近代的勞働者化を阻止してゐるのである。

安南人の社會生活の基礎をなすものは家族制度であり、この家族制度を土臺として廣汎な自治權をもつ村落集團が構成され、これが政治組織の細胞となつてゐる。而して家族制度も村落制度もその結合の中心が信仰におかれてをり、祖先崇拜は家族全體の心を結びつけ、郷村の守護神の信仰は全村民を結合せしめる精神的紐帶の役割を演んじてゐる。

安南の家族は、大分崩れてはゐるが、一の氏族を形成してゐる。この氏族の中には共通の祖先を有する子孫を包含する。氏族の長を族長トウチンといふ。現在では族長は分家に對して殆んど何んらの權力を有しない。僅に、時に本家で行はれる祭祀において司祭たるの役割を務めるに過ぎない。安南の家族制は父長制である。家長ヤウチンたる父は家族に對し殆んど絶對的權限を有し、或るときにはその子の生殺與奪の權さへも掌握してゐた。併し今日では、フランス文化の流入に伴ふ個人主義的思想の滲透により、その權力は次第に縮小されるに至つたが、なほ親孝行は安南道德の根柢をなし、これを怠るものは嚴重なる制裁を蒙り、不孝者の烙印はあらゆる社會的信用の失墜を意味する。この親に對する尊敬の念から出發して且つ儒教の影響もあつて祖先崇拜の念は甚だ厚い。祖先の祭祠を

司るものは一家の酋長であつて、死者も家族の構成員と考へられ、血統が非常に重んぜられてゐる。かうした祭祠を永続的に執行するために香火分フヤホフアツの制度がある。一種の家族共有財産（土地）で、父の死後遺産相続の分割に當つてこれを長男に相続し家に歸屬する財産として譲渡を許さない。一家の所有する土地は、遺産相続にあつて之を男兒に均等に分割しそのため土地の細分が行はれたが、他方、香火分の存在が土地の兼併を妨止する有力な原因ともなつてゐる。

これらの家族が幾つか集つて村落（社サといふ）を構成し、それは大小各孤立して自治的共同生活を営んでゐる。安南には「村落は小皇延なり」といふ言葉があるが、外觀から見ても安南の村落は一見小獨立國の如き感と與へる。高地においては村の周圍を巖石、山嶽、溪流又は密林をもつて天然の城壁とし、平原にあつては棘のあふる籐又は太竹で圍繞されてゐる。その緑の島の如き景觀は村落内の生活を外部と遮斷し、神祕的な感情と窺ふべからざる威厳とを備へてゐる。村民は皆同一の祖先から出たものと信ぜられてゐて毎年一回祖先の祭を行ふといふ。その他に村落には守護神を祀る亭テイがある。この守護神と村民の共通の祖先との關係は未だ私には判明しないが、いづれにしても守護神は郷村を守護すると信ぜられ、村民の尊信の中心となつてゐる。後に述べるやうに、亭において村政が議せられることになつてゐるのも、祭政一致の顯現として注目されねばならぬ。かくて村は政治的な集團であるばかりでなく、血縁的にも宗教的にも結ばれその團結は極めて鞏固で時に中央政府も内部行政

に干渉することが出来ない。

村落は自治的共同生活體であるから、安南人の社會では治者被治者の關係は中央政府對個人の關係といふよりは、むしろ中央政府對村落の關係として成立する。例へば、國家は直接人民に納税を命ずることなく、之を村落に命じる。村落は分課された人頭税及び地租を村民の人数及び資産狀況を考慮して之を村民に割當て、之を徵集して國庫に納入するのである。嘗ては軍務公用並に賦役についても同一の方法が用ひられた。要するに政府の指揮命令は村落の介在を通じて人民に普及徹底せしめられるのである。

かくの如く強大な自治性を保有する村落は自ら行政權と司法權とを有する。村落は輕罪に關する限りその司法權を發動することが出来、そのためには慣習法が適用される。村政は亭テイで定期に開かれる長老會議で評議決定され、長老が之を執行する。長老は學識、經驗、功勞または官位等により村民の尊敬を集めてゐる人物から、村民によつて選出される。たゞこゝに注意を要することは、里長リヤウと呼ばれる村落の長についてである。里長は村落の長ではあるが、村政に參與することなく、その役割は行政官廳に對する村落の要求、行政官廳の村落への命令を傳達具申するにある。謂はゞ中央政府と村落との連絡員にすぎないのであつて、村政そのものは長老によつて執行されるのである。

村落はかゝる廣汎なる自治生活を營むため一種の世襲財産を享有する。これは安南の村落特有の制度で、公田コンチン

土と呼ばれる。公田土は不可譲渡的性質を有し、村民はたゞこれが用益権を享有し得る。村落の創設に際し土地の一部を之に充當したもので、爾後、無主財産及び没收財産を編入し現在に及んでゐる。而してこれが果實は國税の納入、學生の補助、耗弱者、老人、寡婦及び孤兒に對する救護、守護神の祭祀、その他公共事業の諸費用にあてられる。

かくて自治的共同體としての村落の生活は自由潤達であるとともに相互扶助的であるが、併し村民は皆が平等の地位にあるのではなく、地元者と他國者とに分つことが出来る。地元者は團丁グレンディンといひ、その資格は十八歳に達したとき村落に届出ることをもつて發生する。かくの如く團丁は村落の人員簿への登録が必須條件であるから、フランス人は之を稱して登録民と呼んでゐる。團丁となりたる者は爾後村落に對し種々の權利義務を取得する。理論的には安南人はすべて一村の團丁たるのであるが、生活のために故郷を離れ、他村に移住すれば、之によつて故郷の村落では團丁たるの資格を喪失し、移住地の村落においては團丁として認容されない。これを團漏グレンラフといひ、フランス人は非登録民と呼ぶ。團漏が永住を欲する場合は申請によつて團丁となり得る。村落は理由なくして之を拒否しえない。團丁とならねば、彼は永久に他國者として輕視され、村民としての待遇を受けない。村落生活を享樂することをえないのである。併し安南人が他郷に出稼ぎするのを忌み嫌ふ心情は、この團漏となるのを惧れることも、むしろその一つの要因となつてはゐるが、併しそればかりではなく、もつと神祕的なもつと

本能的な故郷に對する愛着の情であることを、こゝに注意しておきたい。

安南人の言語は南方のモン・クメール語系、即ちオーストロアジア語系の言語にタイ語系の言語が混和したものを使つてゐる。文字は久しい間支那に支配されてゐたため漢字漢文を使用しその古代の書籍は全部支那的である。そのため語彙中には大變に漢語が入つてゐる。またそのみに満足せず日本人が萬葉假名を使用し出した如く、彼等も思喃オウナンといふ漢字から脱化した國字を作りそれで通俗的書物を作つてゐた。フランスが安南を支配するやうになつてからは、漢字を使つてゐる間は支那の影響を受け易くこれではフランスの植民政務の滲透を期待できないから、支那から絶縁せしめ永久にフランスの隸屬下におくために、文官登庸試験に漢文を用ひず、漢字を教へる學校には國庫の補助を與へぬといふやうに國民教育から漢字を抜いてしまつた。そしてその代りに十七世紀から用ひ始めたコクギユと呼ばれてゐるローマ字を通用させ始めた。かくて今日の安南人の青年は漢字が讀めず自分の國の古典が讀めず歴史がほんとにわからないといふ氣の毒な状態にある。

之を要するに、一言にしてつくせば安南人の性質と能力は支那人に頗る近似してゐる。たゞ支那人に對して一般に安南人は一つの重要な能力を缺如してゐる。即ち、勞働意欲、特に蓄積意欲の缺如である。かゝる重要な經濟能力の缺如が安南人に如何にして生じるに至つたか、それは民族資質によるものであるか、自然的條件に基くものであるか、それとも文化の未發達によるものであるか、遺憾ながら筆者は未だそれを確言するまでの域

に達してゐない。

### 第三節 カンボヂヤ人（クメール族）の性能

クメール族の起源については明瞭ではないが、印度支那の先住民であり、早く蒙古族の母體から分離したもので蒙古的特色は未だ充分に表はれず、むしろ白人種とも近似した點がある。彼等は群島に廣く分布してゐるデユウトロ・マライとも混血してをり、又西から渡來した印度人の植民者とも混血してをり、五世紀頃にカンボヂヤに王國を建て、十二世紀から十三世紀へかけてアンコールに都して嘆稱すべき印度文化を残した。支那書に出てくる扶南とか眞臘とか云はれた盛大な一國家がそれであり、その當時の文化の榮光を傳へるものがアンコール・ワットの大建築である。その後、カンボヂヤ王國は凋落し新興の安南及びタイより挾撃せられ、その體力と天才とを共に失ひ、もはや昔日の面影なく、民族的衰退の一路を辿つてゐるのみである。彼等は安南とタイとの二國に挾撃せられ次第に領土を失ひその屬國となつてゐた時、フランスが來り安南の宗主權を繼承してタイの野望を斷ち自國の保護國としてしまつたのである。

現在のカンボヂヤ人はこのクメール族の子孫であるが、タイ族、安南人及びマライ人との混血多く、共通の人

種的特徴を失つてゐると共に往時の民族的霸氣も文化も所有してゐない。併し佛領印度支那ではカンボヂヤの大部分と交趾支那の西部に分住し、その數において安南人に次いでゐるばかりか、文化水準においても安南人についで高く。

カンボヂヤ人の身長は平均一米六五、短頭顱で皮膚の色は安南人よりも黒く、毛髪は縮れてゐる。眼の色は概して黒く、小さく切れ長なのが特徴である。體軀は一般に均齊がとれ、肩幅は廣く筋骨もまた逞しい。女子の容貌は豐頬で俗にいふお多福である。

衣服は一般に甚だ簡素であり、男は小さな上衣と短いズボンを着用し、女は手頸と腰部に密着した上衣と垂れ下つたスカートを穿いてゐる。屢々上衣とサンボットと稱する布帛を股間を通して腰臀部に纏ふだけのこともある。この場合、女は派手な色彩のショールを斜に胸にかけ背と腕とを露出してゐる。このやうに衣服は簡單であるが、装身具は甚だ華美で男の上衣の胸を止めるボタンの如きは莫大の金錢を惜しまず金、銀または寶石を用ひてゐる。

カンボヂヤ人の食事は日に二回で一般に粗食である。主食物は米で、その他に魚、芭蕉實及び野菜などを攝る。従來は肉類、酒、茶など殆んど嗜まず、常用飲料としては清水を用ひてゐたが、上流は追々と支那人や安南人の影響で複雑な料理を好むやうになり、酒も下層社會にまで廣がるやうになつた。食事は右手の指で辨じ箸を

用ひない。食後には口と手を洗ふ習慣がある。煙草は好きで愛用してゐる。

家屋は木又は竹で造り多くは五尺位の高さの杭の上に建てられ、屋根は茅や椰子の葉で葺き床板は多く竹の格子を用ふる粗末なものである。室内は床と臺座よりなり、臺座には主人と同格の者のみが坐ることが出来る。客が身分高きときには客を上座に招じ、主人は床に坐る。その間の禮儀はなか／＼嚴重である。彼等は一般に花を好み、家の周囲には果樹及び草花を植ゑ、庭がないときには植木鉢した草花を家に飾つてゐる。

カンボヂヤ人の生業は米作農を主とし安南人と同様に極めて零細な土地の上に自作してゐる。けれども又、牧畜、林業、養蠶に従ふものも少なくなく、太湖(トンレサプ)の漁業や胡椒の栽培に携はるものもあるが、これらは安南人や華僑の技倆には及ばない。商業も安南人同様不得手で華僑に壓倒されてゐる。併し織物には優れた才能をもち、殊に圖案には獨創的な閃きが見られる。彫刻、金屬細工、陶器等も藝術的價値が豊かであり、クメール文化の面影を偲ばせてゐる。

カンボヂヤ人の性情は相異なる兩面を有してゐる。即ち一方には昔時における優秀なりし民族性の美德を残してゐるとともに、他方、被征服民族に共通の憂鬱さと無氣力さに蔽はれてゐる。彼等は實に禮儀が正しい。歩行中に長上に逢ふときは身を避けてこれを通らせ、僧侶と行き合ふ際は頭部で合掌して挨拶する。挨拶にしても最上の敬禮(地上に額き兩手を前方に伸す)、長上に對する敬禮(合掌した手を額に上げちよつと膝まづく)、同等の

者への挨拶(胸部で合掌)とそれぞれその仕方が分れてゐる。篤實であり正直であることも彼等の美德である。また慈悲心に深いのもその一特徴である。慈悲を説く佛の教は彼等の心に深く刻まれ行動となつて現はれる。例へば村落にはサラといふ旅人用の宿舎を用意してをり、サラなき村落では民家が未知の旅人を快く泊めてくれるのである。粗末ながらも心からの歡待をなし謝禮を出されても固く辭して受取らない。かくするのが務めと考へるが故である。

併しながら、他方、彼等は勇氣に缺け、決斷力に乏しい。進取奮闘の精神は何處かに置き忘れてしまつてゐる。これは特に戰場で曝露される。又、彼等は虚榮心に強く、殊にそれが男子において甚しい。彼等は富者と同一の生活を夢みてゐるのである。そのくせ怠惰であり、貯蓄心に乏しい。長時間の労働に適せぬ肉體的缺陷も考慮せねはならないが、しかし彼等を怠惰、無氣力ならしめてゐる最大の原因は、むしろ大部分が彼等の人生觀に存すると考へられるのである。即ち忍從諦觀の人生觀が自らの生活を蝕んでゐるのである。

カンボヂヤ人がアンコールに都して盛大に國威を張つた頃には、婆羅門教が行はれ、大乘佛敎が廣く信ぜられてゐた。それがタイ人のカンボヂヤ征服によつて忽然としてこの二大宗教は消滅し、タイ國の影響を受けて小乘佛敎が弘通することゝなつた。今日でも大部分のものがこの小乘佛敎に歸依してをり、彼等の社會生活は寺堂を繞つて營まれてゐるといつて過言でない。僧侶は數も多く又民衆の尊敬を受けてゐる。タイ國における如く子供

は多く十歳乃至十五歳の頃、僧院に入つて僧侶から教育を授けられ、やがて剃髮して佛門に歸依する。かくて幼少より幻想的諦觀的思想に育くまれ、自ら防ぐに先立つて萎縮し斷念し逃避し、能ふかぎり宗教と傳統の中に安住の地を見出さんとするに至つた。彼等の柔弱・忍従・無氣力・憂鬱などの一連の性質は、恐らく右の事情の下に胚胎したものであらうと云はれてゐる。

要するに現在のカンボチャ人は優雅で善良ではあるが、過去の民族たるの感を深うする。彼等にしてその宿命的な人生觀を一擲して、往時の民族的霸氣を取り戻すことなれば、その將來性は、哀しいかな、絶望に近いものと思はれないのである。

#### 第四節 タイ族の性能

タイ族は印度支那半島から南支那にかけて分布する大民族であることは、既にタイ篇において述べた通りである。當佛印においては東京の山岳地帯から老撾のメコン河流域一帯に居住してをり、多くの種族に分れてゐる。まづ東京高地及び中部を占據し、デルタの安南人に最も接近して居住せるものはトー族と呼ばれ、紅河及び黒河盆地に居住するものはその服裝の色彩によつて白タイ及び黒タイと呼ばれてゐる。カオバとラオカイ間の紅河北

部に住むナン族 *Nans* もタイ族の一種である。しかしメコン河峡谷を占める老撾族が佛印におけるタイ族の代表的種族であり、その數も多い。文化程度は山地蠻に比すれば稍々高いが、都會に住むもの以外はなほ未開の域を脱しない。恰も彼等の居住地が安南人の占める平原と山地蠻の蟠居する山嶽との中間の丘陵にある如く、その文化程度も兩者の中間に位するのである。

##### 1 トー族(土人)

土人は身長一米六〇乃至六五、色は淺黒くその體格は安南人よりよく、肥滿してゐる。農業を主とし狩獵及び漁撈を副としてゐる。彼等は丘陵地帯に居住するとはいへ、比較的低地を好み安南族の占據するデルタに接近してゐる關係上、その影響を多分にうけ、衣服も殆んど同一の裁方を用ひ、家族制、社會制度なども極めて之に近似してゐる。祖先崇拜、教育の尊重といふが如き風習も恐らくその影響であらうと考へられる。しかし安南人がクナオ染の茶褐色の上衣を着用するに反して、彼等が紺色の上衣を用ひ、又、安南人が地面の上に直接平小屋を建てるに反し、彼等が床の高い杭上家屋に住んでゐる點などにおいてタイ族の特徴を傳へてゐる。

土人の男は甚だ怠惰であるが、女は勤勉である。彼女たちは男に働かせることを恥とさへ考へてゐる。隣村の市場に買出しに行くにも、夫は馬上で悠々烟草をふかしてゐるが、妻は重い荷物を背負ひながら歩いてゆく。しかも女は一言の不平も云はず、生來の明朗さと微笑を失はない。これが土人の生活風景である。

## 2 白タイ及黒タイ

白タイ Thai-bianc は雲南國境より東京デルタに至る紅河及び墨河の流域に居住し、黒タイ Thai noir は主として黒河に沿ふて分布してゐる。白タイは側面又は前方をポタンで留めた肋骨様の飾紐のある上衣をつけ、服地は藍色であるが、白の上衣を着けることがあり、従つて白タイと呼ばれる。黒タイはその服裝が黒がちであり、それによつてかく名づけられてゐる。又、白タイが土葬であるに反し、黒タイは火葬を行ふ等の風習上にも若干の差異がある。

白タイ、黒タイは老撾人に比すれば遙に勤勉で且つ清潔であるが、その信仰する佛教は老撾人以上に頽廢的且つ迷信的であるといふ。

## 3 老 撾 人

ラオス人はメーコン河中流域に十世紀頃から發展をとげ、南掌(ルアン・プラバン)、萬象(ヴィアンチアン)といふ二王國をつくつた。十九世紀に入つて後者はタイ國に亡ぼされ、前者もタイ國の附庸國となつたが、フランスの干涉でラオスはフランスの保護の下に立つこととなり、今日ルアン・プラバンだけ辛うじて名のみを王統を保つてゐる。

ラオス人は身長一米五九、稍々小柄であるが、印度支那民族の中では最も容姿に優れ、卵形の容貌、しとやか

な舉措はむしろ優雅な感じさへ與へる。殊に女は小柄であるがよく肥満し、頭頂の髻を幾分左に傾けてリボンで結び、その姿態楚楚として艶美の風があるといふ。

性質は概して陽氣で温順であるが、しかしそれはよい意味ではなく、天性の懦弱、知性の愚鈍さ、無氣力さに發してゐる。ラオスの自然はあまりにも恵まれてゐる。河川、沼澤、森林では食糧を賑はし得る程度の魚獸を容易に捕へることができ、地味肥沃なるこの地では僅かの労働でもつて食糧を確保し得る。家の周圍に植ゑたバナナ、マンゴー、ココ椰子等は枝もたわゝに果實をつけてゐる。かゝる自然の恩恵に抱かれて、ラオス人は或る觀察者が書いてゐるやうに、「ヴェランダに身を横たへ、過ぎゆく雲の行方を見守りつゝ、ときには深い眠りに、ときには雑談を交しつゝ、一日を送つてゆく」ラオス人の、特に男子の救ひ難い無氣力さと怠惰とはかくして彼等の天性となつてゐるのである。

ラオス人の生業は一般に農業であるが、耕作には熱意をもたず、妻子及びカー族等に米田菜園の耕作を委せてゐる。狩獵や漁業は彼等の好んで従事するところで、未開の鬱蒼たる森林やメーコン河の流れは彼等の活躍の舞臺であるが、しかしそれも彼等にとつては生業といふよりも、むしろスポーツである。その代りに、狩獵、特に激流における舟艇の操縦は頗る巧妙で、メーコンの急流に一本の竿をもつて巧みに舟を操つてゐる。

ラオス人の最大の特徴は、かゝる性質にも拘はらず彼等が比較的商才に長けてゐることである。彼等は山地の

住民と華僑との仲介者としての役割を演ずるとともに、自らもラック、安息香、籐の如き林産物をもつて織物、鹽、烟草及び阿片等と交換する。安南人やカンボヂヤ人に缺けてゐる商業的伎倆をもつてゐる。これはラオスが由來華僑の活動不可能な地帯であつたことも原因してゐる。

### 第五節 その他の種族

佛領印度支那における主要民族は、以上の如く、安南人、カンボヂヤ人、及びタイ族であるが、その他になほ多くの未開民族が居住してゐる。

數の上では所謂インドネシア族が多數である。こゝにインドネシア族といふのは安南山脈中に蟠居する山地蠻の總稱で、安南人は之をモイ族と呼び、ラオス人は之をカー族と呼び、カンボヂヤ人は之をブノン族と呼ぶ。いづれも「蠻人」を意味する。人種的起原については未だ定説がなく、一はマラヨ・ポリネシア系と云ひ、他の學者は之をインドネシア系に所屬せしめてゐる。又、言語學的に見ればマラヨ・ポリネシア語系を話す種族とモン・クメール語系に屬する言語を語るものとがある。ヂヤライ、ラーデ、ラグラ、カンチヨウ等の種族は前者に屬し、ブノン、パナル、セダン、キユオイ等の種族は後者に屬する。いづれも未開で、昔ながらの傳統を保ち、裸

體でジャングルの中に住み、狩獵、採取、原始耕作に原始文化を守りつゞけてゐるものである。

このモイ族に近親の種族にチャム族がある。モイ族が印度文化に浴しないに反し、チャム族は海の方からこの地に移住した後、印度の植民者と混血して榮え、安南の中部海岸にチャンバ國を建てた。林邑、環王、占婆、占城などといはれてゐるのがそれで、伽羅香の産地として有名であつた。一時は國運旺んで安南王國と相對峙してゐたが、一七一四年これに滅されてからはその民族的活力を喪失し、現在は安南の寧順、交趾支那の西寧、昭篤、カンボヂヤのカンダル、クラチエ等の諸地方に敗殘の身を曝してゐる。母系制が家族制度の根柢をなしてゐること、婆羅門教と共に回教が行はれてゐることは、印度支那民族中、チャム族をして特異の存在たらしめてゐる。

紅河上流の雲南省境の高地にはマン族（又は獠族）及びメオ族（苗族）が居住してゐる。マン族は海拔三〇〇米乃至九〇〇米の丘陵又は山腹に居住し、現在では紅河谿谷に最も多く分布してゐる。マンランタン、マンタバ、マンシアオパン、マンクアンチヤン、マンシヤンイ等の種族に分れてゐるが、マンは野蠻を意味する。中背（一米五九九）で頑丈な體軀を有し、言語は單綴音で、文字は漢字を用ひる。智能はタイ族より劣るやうであるが、勤勉にして教育に熱心である。男の首の右下でボタンをかける上衣、膝までの短い股引、冬季に着ける脚絆、いづれも藍色又は青色のものを用ひる。祖先の祭祀は特に嚴格に行はれてゐる。



メオ族は廣西の支那人を祖とし十九世紀頃當領へ移住し來つて先住土着人と混血したもので、東京の國境地方のドン・ブンに入り、凄惨な闘争を経てタイ族及びマン族を驅逐して、一八六〇年頃更に北部に向つて移動したものと云はれる。性質極めて慍悍で、彼等の剛勇をもつてせば、先住民族を驅逐して東京高地の覇者ともなり得たであらうが、體質上海拔九〇〇米以下では生活出來ないので、現在の高地にとどまつてゐる。フランスは彼等の勇武の氣象を利用して、マン族とともに國境警備の任に當らしめてゐる。

### 第六節 要約

之を要するに、佛領印度支那において最も重視すべき民族は安南人である。カンボヂヤ人は既に過去の民族として衰亡しつゝあり、ラオス人は天恵豊かなラオスにおいてのみ生活しうべき自然兒である。之に反して安南人は諸種の能力、性質において優秀であり、それは單に佛領印度支那においてのみならず、廣く南方における諸民族の中にあつて第一流を占むべきものである。勿論、安南人にも能力上の缺陷はある。男子郷關を出づることを嫌忌し、且つ蓄積意欲を缺くことはその最大なるものである。併しこれは、既に見て來た如く、南方諸民族の通有性であり、その改善はやがて南方民族對策の主要内容とならねばならぬところである。

## 第三章 ビルマ民族事情

### 第一節 ビルマの種屬的構成とその變遷過程

ビルマの人口は、一九三一年の國勢調査に據れば、一、四六六萬七千人にして、男七四九萬人、女七一七萬七千人、男女の割合は男子一、〇〇〇人につき女子九五八人となつてゐる。女子の割合が普通より幾分少ないのは、この國の人口の約一〇%が外來人よりなり、しかもその流入が激しく定着性をもたないからであらう。人口の増加は、一九二一年から一九三一年に至る十年間に一四五萬五千人を計上してゐるが、しかしこの期間に合計三八六萬五千人の入國者があり、同時に三三八萬三千人の出國者があつたから、差引四八萬二千人の入國超過となつてゐる。この入國超過を控除すれば、人口の自然増加は右の十年間に九七萬三千人となり、七・三%の増加率となる。この増加率はジャワ人に比しては勿論のこと、マライ人に較べてもなほ低位にある。ビルマの人口の自然増加は緩慢であると言はねばならぬ。

ビルマの人口を人種的に見れば、土着民族、就中、ビルマ人が支配的である。外來民族の主なるものは印度人

及び支那人であるが、兩者を合して全體の一〇%に足らない。

人口の種別的構成

ビルマ民族	九、六二七、一九六	六五・八%
その他の土着種族	三、五九二、八二六	二四・五%
印度人	一、一九九、九九一	八・二%
支那人	一九三、五九四	一・三%
その他	三三、八九〇	〇・二%
合計	一四、六四七、四九七	一〇〇・〇%

このやうに外來民族は、マライとは異つてビルマでは、全人口の一〇%足らずを占めるにすぎないが、この外來人口について二つの現象が注意されねばならない。その一は前にも指摘したやうに人口の流動が激しいことである。

人口の流出入

年	入國者	出國者	差引
一九三一年	三〇九、四三六	三六七、三三	(一) 七二、一〇五
一九三二年	三〇〇、三六八	二八八、四九四	(十) 一一、八七四
一九三三年	二四三、三三三	二五二、一〇三	(一) 八、七七〇
一九三四年	二五八、〇〇四	三三六、六六八	(十) 七八、六六四

年	入國者	出國者	差引
一九三五年	二七三、八四二	三三〇、三三	(十) 五六、四一〇
一九三六年	二四四、五六	三二、六六	(十) 二一、八九〇
一九三七年	二四四、六四三	三三、三三	(十) 二一、三一一
一九三八年	二五、六六	二五、一〇	(一) 六、六六

一九三〇—三一年には印度人對ビルマ人労働者の衝突事件があり、更に一九三八年にはビルマ人の印度回教徒襲撃事件が勃發し、入國者よりも歸國者が多かつたが、平時においても大體入國者は廿五萬前後、歸國者は廿三萬前後であり、入國超過は平均二萬人足らずで、一九二〇年代よりは半減の状態となつてゐる。

次に外來人口の第二の現象として、ビルマの大産業都市の外來人化 *Soortendung* の事實を擧げねばならぬ。

都市及び田舎の種別人口

種別	大産業都市	都會	田舎
土着民族	三六・〇%	五八・五%	九三・九%
印度人	五三・八%	三四・七%	五・一%
支那人	六・七%	四・七%	〇・九%
その他	三・五%	二・〇%	—
計	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%

即ち、都會人口において既に外來人の割合が相當に大であるが、ラングーンを含む大産業都市においては、外

來人の割合が六〇%以上を占め、土着民族は僅に三分の一を占めるにすぎない。ビルマの大産業都市は外來人口殊に印度人の支配するところとなつてゐる。だが、これは單に人口的に然るのみではなく、産業的にもこの國が彼等に譲るところが多い一證左でなくてはならない。事實また最近諸種の形をもつて生起した印度人問題は、その根源をこゝにもつてゐたと言ふことが出来るのであるが、それは我々が後に見ようとするところである。

このやうにビルマにおいても外來人口が重要な役割を演んじてはゐるが、しかし、ビルマ全體として見れば、マライとは異つて、土着民族が全人口の九〇%を占め、その數一、三二二萬人に上つてゐる。そのうち最も有力な種族はビルマ族であつて、土着民人口の七二・七%を占め、質量ともにビルマの支配民族である。しかし、その他にも主要な種族だけでなほ七種族を區別しうるのであつて、ビルマの種族的構成は甚だ複雑である。

このビルマにおける種族の複雑性は、印度支那全體に通ずる現象である。印度支那は北方に大山塊を擁しそれに連る臺地と南北に走る山系の間は褶曲と浸蝕によつて深い谿谷をなしてをり、谿谷の下流には廣濶な沖積平野が擴つてゐる。この地方に幾度か押し寄せて來た民族移動の波は、この地系に應じて北より南へ向つて行はれいづれも肥沃な沖積平野を目指して南下した。そして又、この地盤を占據するのなければ、これら民族は國家といふやうな強力な組織をもつ運命共同體にまで結束することは出来なかつたのである。印度支那の諸民族は概括して山地の住民と平野の住民とに分たれるが、歴史の各時代を通じて指導的位置を占め得たものは常に平野の

占據者達であつた。山地の住民はそれに對して多くは未開であり、より原始的な生活形態をもち、集團は小さくて分裂的でもある。これら山地の住民は、民族の移動に際して山地に残留したのか、或は平原における先住民が驅逐せられて逃避したものか、もしくは新たな民族移動として始めて山地に到達したものである。このやうに、平原を占據する支配的種族もそこに到達するまでには多くの先住民族を吸収してをり、又、その一部山地に残留して移動の跡を残してをり、そして一つの民族が移動南下すれば、そのあとの山地には新に別の民族が移動してくるといふ状態であつたから、印度支那の民族分布が複雑多岐を極めるのも不思議でないのである。

ビルマにおいては、このやうな民族移動の大きな波が、少なくとも三回押し寄せて來たことが認められる。その移入の順序と種族とは次の如くである。

#### 1 モン・クメル族

之にはモン(タライン)族、ワ族、ラ族、タイ・ロイ族、バラウン族、バレ族、苗族、猿族、バダウン族、リアン族等を含む。

#### 2 チベット・ビルマ族

これらは三類に分けられる。

A ビルマ族 之にはビルマ人、ガヂウ族、ボン族、マル族、ラシ族、マン族、アラカン族、ヤンピエ族、ダ

ポイヤン族、チャウンタ族、メルギー族、ダヌー族、インタ族等を含む。  
B チン・グループ及びカチン・グループ 之にはチン族、カチン族、ガウリ族、シンフォ族、デウレン族を含む。

C ロロ・グループ 之にはロロ族、リス族、ラフ族及びムーソ族、カウ族、クウイ族、モソ族を含む。

### 3 タイ・支那族

之にはシャン族、シャム族及びカレン族の種々なる部族が含まれてゐる。

モン・クメル族の侵入は中央アジアから印度支那半島への最初の大きな歴史的侵入であつた。その進出の主な線は南方メーコン谿谷に沿ひ、カンボヂヤとタイとに入り、そこから横に西進してビルマに達し、その上に疏散した。しかしついで後より来たビルマ族の侵入によりまた押し戻され、最後まで踏みとどまつてゐたタライン部族の凄惨な抗争の後に、今日では民族力を涸枯し盡し、僅に、ワ、ラ、タイ・ロイ、パラウン、バレ、リアン、タライン等の部族として、ビルマ東南國境の邊隅に孤立して残存してゐる。

チベット・ビルマ族の移動は揚子江と黄河との盆地を西に走り、數條に分れ、その一が西藏に達した。この西藏に來た部族の一つの支れが更に南進し、ビルマをチン・カチン、ビルマ、ロロの三つの主流となつて侵略した。チン族の流れはチンデインの流れに沿ふ線をとリ、西側ビルマ全體に汎り、山脈に沿ひ散布した。カチン族

は遙に後に之に追従し、上ビルマに入つて東南に轉じた。ロロ族はメーコンとサルウインの路をとリ、主として支那に居住する。今日ビルマ領たる地域にはごく東端にのみ侵入し、東北國境にリス(ヤウイン)、ラフ(ムーソ)、クイ、カウ、アコ等の散在せる部落によつて代表せられてゐるのみである。併しビルマ族の波の主要部分には西暦の初頭に中央部、即ちイラワディ路をとリ、平原に根據をもつに至つた後(九世紀頃)ビルマ人と發達することとなつた。最初、彼等はブニー(驃)、カムラン、サクの如く凝集力なく、疑ひもなく今日のチン族、カチン族と極めてよく似た單純なる遊牧民族であつた。又マイ大溪谷を南に下つていつたその進路において、彼等は其の跡にヌン、マル、ラシ、アチ、ボン、カデウ等の如く棄てられた移住民を残してゐる。だから、島嶼の如く散在してゐるこれらの少數部族も、發達の程度は遅れてゐるにしても、種族的には明かにビルマ族である。

タイ・支那族の波は太古からの移動の波の最後のものであり、シャン族に關するかぎり、嘗て南詔のシャン國が存した大理府の地方から進んで來たことは明かである。この波(その一支流がタイを席捲した)はまつすぐに上ビルマを横斷してアッサムと東ベンガルに入つた。その波の引いたとき、カムチ、チンデイン、ミイチナ、パ一モ及び下ビルマに點々として孤立無援のシャン部落をとり残したものであらう。カレン族も殆んど凡ての印度支那の種族の搖籃の地たる西部支那の高地から來たことは疑ひない。南シャン州のカレンニ近くの一地點でビルマに入り、彼等は同類との衝突の危険を避け、むしろ小山やジャングルや無住地帯の險難を選びつゝ、最少の抵

抗線を傳はつてゐた。その移動史は従つて他の種族の歴史になんらの痕跡を残してゐない。この超然たる性質は今日のカレン人にも見られる。彼等はなほ何等の歴史なく、優れた指導者を殆んど生み出してゐない。カレン人の中には、タウンテウ、カレン・ブユ、サガウ及びプロの諸部族が含まれてゐる。

このやうに民族移動の波は押し寄せては激突し、或る種族は押し出され、或る種族は押し戻され、互に凄惨な流血の抗争を通じて、或る種族は勃興し、或る種族は衰滅した。かくて今日、ビルマにおける主要種族又は部族の人口勢力は次の如き形勢を示めてゐる。

- |   |           |                         |
|---|-----------|-------------------------|
| 1 | モン・クメール族  | 三三七 <small>千人</small>   |
|   | タライン人     | 一六六                     |
|   | バラウン人     | 九、六二七 <small>千人</small> |
| 2 | チベット・ビルマ族 | 三四九                     |
|   | (1) ビルマ人  | 一五三                     |
|   | (2) チン人   | 九三                      |
|   | カチン人      |                         |
|   | (3) ロロ人   |                         |

- |   |        |                         |
|---|--------|-------------------------|
| 3 | タイ・支那族 | 一、〇三七 <small>千人</small> |
|   | シャン人   | 一、三六八                   |
|   | カレン人   |                         |

我々は次にこれら主要種族の諸性質について若干の観察を試みよう。

## 第二節 各種属の諸性質

### 1 ビルマ人

アラカン人、タゾオイ人等の支族を含めて、ビルマ人はイラワディ流域の低地(中心はデルタ地帯)、テナセリム及びアラカン海岸に亘つて廣く分布してゐる。彼等はチベット・ビルマ族に屬してゐるので、顔面は廣く平で皮膚は暗褐色で、身長は平均一六〇—一六二種である。農民や労働者は體格ががっしりとしてをり、筋肉も發達してゐて、力仕事にも堪えることができる。

ビルマ人の性格については、諸種の批評が行はれてゐる。或る英人は、ビルマ人は英帝國の全體の中にあつて最も魅力ある人民であると云ふ。又、他の一人は、ビルマ人の性格は世界で最も理解しにくいものの一つである

と云ふ。ビルマ人が愛すべき民族であることは確に事實である。彼等は性情が極めて快活で、萬事開放的で親しみ易く、頗才に富み、寛容であり、想像力も豊かで優雅でさへある。が、しかし、他方では、彼は、輕信的で、無責任であり、重厚の風を缺き、霸氣をもたないやうにも見える。彼等は自尊心に富み、獨立的で、男性的でもあるが、他方、我儘で感情的なところがあり、粗暴で闘争好きである。ビルマでは身體及び財産に對する傷害事件が多く、又、或る意味ではビルマ人は訴訟狂でもある。要するに、ビルマ人の性格には、一連の美德が一連の悪徳と連なり合ひ、不思議な混淆を示めしてゐる。彼等の性格が理解しにくいと言はれるのもこれがためである。併し又、彼等の輕卒や濫費性や我儘さへも、善意に満ちてをり、その過失は單に衝動的な、むしろ小兒的のもので、すぐ見のがし出来るものである。それだけ、彼等は愛すべき民族だとも謂へるのである。

軍人としてビルマ人は非常な創意をもち、直に命令權を發揮するやうになる。彼等は民族的誇りをもち、熱烈な愛國心をもち、輕々しく外國の風俗習慣を真似るやうなことはしない。兵士として彼等は機敏であり、爆撃、ルイス輕機關銃操作、信號等の如き機械的な仕事に卓越してゐる。彼等は前大戰にメソポタミアにおいて自動車運轉の妙技を發揮して大評判をかち得たほどである。しかし、彼等は無味乾燥な仕事で多くの努力を要する行軍や射撃はあまり上手でない。

ビルマ婦人は性情温和であり、男よりも勤勉である。下層階級には獨力で店舗を經營して一家の生計を営むも

のが多い。女子の學校教育は殆んど行はれないが、白人の女子以外には他には見られないほどの自由をもつてゐる。

ビルマ人の服装はルンギーといふ踵まで垂れるスカート様のものを用ひるのを特色とする。これはジャワ等のサロンと同様のもので、色彩は極めて美麗であつてビルマ人の流行性を追ふ民族性からしてその色合や柄に對する關心は深いものがあり、流行の消長が激しい。男女ともルンギーとしては絹織物を好み最も貧乏なものでも一着の絹のルンギーをもつてゐる。絹はマンダレー附近で織られる獨特のものが用ひられ、今日でも最も上手な絹織物業者はアマラブラにゐる。今までは輸入絹布には高率關稅がかゝり、頗る高價であつたが、關稅が除かれるか又は輕減されるなら、ビルマは日本絹の相當の市場となるであらう。ルンギーの上に男女によつて少しは異なるが、*エインギー* *aingyi* と呼ばれる短くジャケット様のものを用ひる。女子のものは極めて美麗で光彩陸離たるものがある。

最近ビルマでは國產愛用運動としてビニー運動が起つてゐた。ビニーとはビルマ語で赤い木といふ意味で、ビルマ特産のシルケットヤーンから織つた光澤ある布の名である。往時はビルマ婦人用の上衣は悉く之を使用したのであつたが、近來はイギリス製のオーガンテイ又はデョーゼットが使ひられてゐた。然るに一九三八年の大暴動以來、ビルマ僧侶の指導監視の下に急激にビニー運動が起り全ビルマを風靡する勢にあつた。かくして手織業

も復活し再び隆盛に向ひつゝあつた。手織業はそれ自體としてビルマ人の性格に合つた生業の一である。ビルマでは男より女がよく働き又規則的労働を好まないところからしても、近代的紡織業よりも氣儘で自宅で働きうる手織業の方がビルマでは發達する地盤があるのである。

ビルマ人はタイ人と共に小乗佛教徒で、佛教は彼等の生活で重要な地位を占めてをり、總ての村落の精神的中心は黄衣をつけた僧侶である。ビルマ人の民族的自覺及び民族解放運動を促進させ發達させたものは僧侶である。即ち民族運動は國民的宗教たる佛教と深く關聯してゐる。現在のビルマ獨立運動の母胎となつたものが、有名な親日僧ウ・オツタマを中心として結成された佛教青年會であることは之を物語つてゐる。屢々起つた排英的な暴動にも僧侶は常にその指導者として參與してゐた。それほどビルマでは佛教が常に深く民衆に接觸しその日常生活に深く滲透してゐるのである。だから又、ビルマでは佛教は甚だ盛んであつて、町や村落は大抵土壁で圍まれてゐるが、この土壁の外には僧院が建てられてゐる。僧院は同時に寺小屋式の學校でもあり、男子は一生涯のうち一度は必ず僧院に入り、初等教育及び佛教教理を學ぶのである。

このやうに佛教はビルマ人の國民的精神的生活に對して重大なる意義をもつてゐるが、他方では又、ビルマ人の資産あるものは必ず一寺一塔の建立を一生における最大事業とするから、昔から「ビルマは塔仆れの國」との悪評があるのである。佛教法に依り遺産は男系男子に讓渡されず子孫に分割されるが、しかしそれも多くは遺産

を残さず悉く佛陀へ喜捨されるのである。ラングーンからマンガレーに到る車窓から見れば次々に去來する白色金碧のバゴダ（佛陀紀念塔）の美觀は全く旅行者をして驚かしむるものがあるが、その代りにビルマにはこれのために巨大な民族資本の蓄積が阻害されたこともまた否定できないのである。

2 チン族 チン族もチベット・ビルマ族に屬するが、ビルマ人とはビルマ侵入の経路を異にしてゐる。現在

チン族はチン丘陵本土とバコック丘陵地方に分布してゐる。

チン丘陵は行政上、北部（チディム）、中部（フアラム）、南部（ハカ）に分れるが、概して云へば北部のチディムのチン人は強壯で背低く、腿や脰は驚くべく發達してゐる。中部のフアラム人は屢々身々恰好とも不良で一般に劣つてゐる。之に反して南方のハカ人（即ちライ人）は普通、優秀な體格で背高く、すらつとして立派な發育を示めてゐる。

一般的に言ふと、チン人の性質は質朴と猜疑との奇妙な混合を示めてゐる。信用し、納得したと感じた時にはチン人は容易に統御される。彼等の頑固さは無智から生じてゐる。そしてその智慧に應じて彼等は正直である。身體は良し、性質は素朴であり、且つ山地住民として精悍であるから、彼等はイギリス人の根氣よさと巧妙な募兵方法によつて、兵士となつてゐるものが多い。募兵に應じ軍隊勤務に就くことが、これらの野蠻にして無智なチン人を教育し、啓蒙するに驚くべき影響を及ぼしてゐることは、十分留意されねばならない。チン人ばかり

りでなく、次に述べるカチン人、カレン人等の教化工作としてイギリス人が募兵に努力してゐることは、一石二鳥を目指した巧妙な方法であつて、イギリス人自身誇らしげに、「住民は野蠻で彼等を文明に導く唯一の速い安易な方法は之を軍に徴用することである」と述べてゐるほどである。かくしてイギリス人は土着民の軍隊と勞役隊とを編成することが出来、前大戦には彼等をフランスとメソポタミアの戦線に送つたのである。

チン族の中にあつて、兵士として優れた能力をもち且つ募兵に對して熱心な部族はチダイム・チンである。就中、その支族の一たるシイン人である。チダイム・チンはシイン、カムハウ、ソクテの三分派から成つてゐるがシイン人はイギリスのビルマ併合に當つて最も頑強に抵抗した種族であり、その戦闘能力はイギリス人からも賞讃されてゐる。彼等は理智的、進取的で、正にその證據として巡查や召使ひ等に採用される。又、彼等は地方憲兵に召募された（一九〇八年）最初のチン族である。彼等はまた林業部や行政部に雇はれ、上チンドウインの警察でも雇はれてゐる。しかし、シイン人は徴兵應募の先驅をなしたことや、不相當な昇給を得るだけの賢さをもつてゐるためにその隣人から憎まれてをり、特にソクテ人やカムハウ人等に信望がない。シイン人は誰とでも一緒に勤務するが、誰もがシイン人と一緒に勤務することを欲しない。彼等を正規兵に採ることが他の種族の人々の中に募兵を偏見をもつて見る傾向をさへ生ぜしめた。一九二二年陸軍募兵が始まつたとき、シイン人は遺憾ながら除外されねばならなかつた。しかし、それは訓練され、開化された要素の中核を奪ふに等しかつた。それ

で一九二四年以來、再びシイン人からも募兵されることになつたのである。たゞ残念なことにはシイン人は人口が僅に三千五百に満たない少數である。しかもシインの婦人は、恐らく重い荷物を運ぶ習慣のためか、不妊となる傾向があり、ために人口は減少しつゝある。

チン丘陵中部に居住するフアラム・チンは約四萬人強の人口を有してゐる。しかし概して彼等はその同族の他のものより剛健でなく兵役には不適當であり、訓練には適しないと云はれる。之に反して南部ハカのチン人は良い戦士である。ハカ族叛亂においても長期の勇敢な抵抗をなし、之と交戦した者すべての尊敬をかちえた。智識的にはハカ人は他のチン人より伶俐であるが、しかしその國土は遠く離れてゐるため、その教育と開明の程度はチダイムやフアラムの智能の劣るチン人よりも遙に下位にある。募兵に對し無關心なフアラム人でさへもハカ人の軍隊應募を見ると「吾々は文明人である。吾々は忠誠である。然るにかの裸ん坊の謀叛人たるハカ人がカーキ色でのさばりかへるのに、何故吾々が依然苦力の仕事をなさねばならぬのか」と考へはじめ、フアラム人の間にすら兵役希望が生ずるといふ。それほどハカ人は未開の状態にゐるのである。

パコック丘陵地方のチン人はチンボク人と呼ばれる。チンボク人は勝氣で民主的であるが、ハカ人以上に未開である。彼等の衣服は簡單極まるもので、重要な所が殆んど缺け、手のつけやうもなく、その志願兵がビルマを練り歩くときは、被服が給與されるまでは大變な騒ぎを沿道に惹き起す。女子は頬から顎にかけてのやうな文様



で文身する。上唇には斑點をつけ、鼻と顎とに直線が縦に引かれる。その線條は恐しい印象を興へるが、この惨めな習俗は今なほ盛んに行はれてゐる。チンボク人の素晴らしい特質は、彼等が極めて優れた歩行者たることである。途中いくつかの険しい登り道をもつ四十六哩の行程を、彼等は一日で悠々と踏破しうるのである。

全體としてチン族は優れた愛すべき住民である。彼等には未だ教育も開化も十分に及んでゐないが、ビルマ研究家の一人は言つてゐる「チン人は興味ある種族だ。といふのは彼等は彼等の間における佛教と文明とがそれからビルマ人を發達させたところの素材を示顯してゐるからである。要するにチン人は原木である。それからビルマ人が彫り上げられたのである」と。

3 カチン族 カチン族は僅か二、三世紀前にビルマに到達したばかりなので、少なくともその移住の漠然とした傳説は保持してゐる。その傳説にはマジヨイ・シングラ・ブム（自然に平坦な山）といはれる場所の記憶が残つてゐる。そこはこの種族の生誕地であり、恐らく蒙古の臺地或は東部チベット、西部四川省の國境地方であつたにちがひない。そこから彼等はまづ最初の移住に出發した。ロウイス氏の「ビルマの部族」によれば、チベット・ビルマ族の移住はその進行中、サルウエンの西、緯度三〇度のあたりにある山脈の障壁によつて分裂させられたといふ。これらの雪を嶺く連山を避けるために、ビルマ部族は障壁の東に進路をとり、チン人は障壁の西に來た。そして彼等よりすつと遅れて來たカチン族は、現在のチン丘陵が既に占領されてゐたのを見て、上ビル

マを横切つて東南に方向を轉じなければならなかつた。このため彼等はチン人から離れて、ビルマを横切り、東方に進路をとつた。ビルマ部族の中に入つていつた。カチン人とマル人、ラシ人等（いづれも原ビルマ人）の現在の協同はかういふ原因より生じ、カチン人は彼等に或程度同化した。が、それにも拘はらず、現在別々になつてゐるカチン人とチン人との言語の類似は著しいものがあり、彼等はチベット・ビルマ族のチン・カチン・グループをなしてゐるのである。

現在カチン人はビルマ東北隅、雲南國境近く、サルウエン河、マリカ河、ヌマイ河を含む地方一帯に分布してゐる。彼等はマリツプ、ラータウ、ラーバイ、ヌカム、マランといふ五つの主なる氏族に分れる。漠然と部族と呼ばれてゐるカチンの區分は實際は、これらの氏族でしかない。この五つの主なる區分は、カチン族の有名な祖先ワチエト・ワ Walyet Wa の五人の兄弟から下つて來た五つの高貴の氏族である。そしてこの五つの主なる氏族が更に細分されてゐるが、順位は右に擧げた通りであり、マリツプが宗家である。氏族の間にはその精神的能力に顯著な相違が認められ、ラヅム、パウル（いづれもマリツプ系の支族の一）、パウサ（ラータウ系）、ヌカム等は純に聰明であり、ツアワン（マリツプ系）は屢々小男で精力がある。一方、ダシ（ラータウ系）は殆んど矯正せられぬほど常に愚鈍である。ラーバイはカチン族の中にあつて最大の部族であり、就中、シヤダン・ラーバイは最も重要なものである。

カチン人は一般にはなほ未開状態にとどまつてゐる。併し概して云へば、性質は剛健で且つ伶俐であるから、ビルマ人に同化した部分はチン人と共に兵士として勤務してゐる。そして既に述べたやうに、この募兵によつてカチン人も次第に開明に齎らされつゝある。

4. **ロロ族** ロロ族は雲南、佛領印度支那、ビルマの國境附近の丘陵民の大半を構成してをり、ロロ人、リス人、ラフ（若しくはムソ人）、モソ人、カウ人、クウイ人及びアコ人を含んでゐるが、ビルマにおける主要部族は、リス人、ラフ人（ムソ人）及びカウ人である。

リス人はムソ人がメコン河を下つたと同じく、サルウエン河谷に下つて來たロロ族の移住者を代表してゐる。彼等はカチン人からヤウインと呼ばれてゐるが、これは支那語の野人の轉訛したものである。ビルマにおいてはプタオのアーチヤン谿谷にリス人の大きな聚落があり、今なほマン人を驅逐しながらそこに移住しつゝあるが、その他にも例へばバーモ、シマ、サドン、パンワ等に小聚落をなしてゐる。

彼等は良き外觀、整つた容貌、そして平均五呎六吋の身長、頑丈な體格をもつてをり、體質的に云つて彼等はカチン人よりも立派な種族である。その成人も子供もカチン人より強壯で、幼兒死亡率も比較的低い。彼等は性情としては溫和で、暢氣な、親切な種族であり、歐人に對しては常に友好的であると誌されてゐる。彼等の打ち解けた溫順さは鈍感な野人的なカチン人の態度よりも好感がもてる。ビルマ領内においては、彼等は平和、法

律、秩序の愛好者である。彼等は酒をよくのみ、阿片を多く栽培する。併し自分たちではそれを大して消費しない。その主食物は玉蜀黍及び蕎麥である。彼等は更に馬鈴薯や麻や藍をも植えてゐる。このやうに彼等は定着住民の如く見えるが、本質的には遊牧民であり、少しでも干渉されたりすると直ぐ他所に移る傾向がある。阿片栽培の禁令は、このやうにして定着してゐたリス村落を消滅させる結果となるやうである。

しかし、リス人を單に溫和な種族とばかり考へるのは誤りであり、彼等は獨立心強く、戦闘となれば頗る勇猛な種族である。彼等の武器は長劍、弩及び矢であり、就中、弩はその愛好の武器である。子供はこれをもつて遊び、大人はこれでもつて生活する。彼等は寝る時にはこれを頭上に掛けて寝ね、死したる時は之を墓上に掛ける。弩の最大なるものは五呎の長さを有し、弦を張つたときには三十五ポンドに相當する發射力を有する。矢は長さ十八吋で、太さは編み針の約四倍もあり、先は尖るやうに削られ、トリカブト毒を塗られた尖端が傷の中で折れて残るやうになつてゐる。それでリス人の住む地方を「弩の國」と呼ぶものもあるが、しかし、弩を愛用するものはリス人に限られてゐない。ラフ人もカウ人もすべてロロ族は之を好んで使用する。

リス人も良き兵士たる素質をもつてゐる。素質の點ではチン人に勝るかもしれない。彼等はメソポタミアでその酷熱にもめげずに健闘して、仲間の種族とかけはなれた昇進と榮譽とをかちえた。但し、これら山地人にあつては溫暖な氣候の地方までも南下したものは、山嶺近く住むものに較べて、素質が著しく低下することを注意し

なければならぬ。

ラフ人はリス人がサルウエン河谷に沿つて移動したやうに、メコン河谷に沿つて南に移動したロロの一族である。彼等はケントウン及びサルウエン彼岸のモン・パン（いづれも南シャン州）に押し寄せ、又、タイ及び東京にも達した。ラフ人居住の北の限界は大體北緯二十四度であり、これは同時にその縁族たるリス人の南の大體の限界である。一部のものからムーソと呼ばれてゐる部族はラフ人のことであり、又、クウイ *Kui* と呼ばれる種族も今日ではラフ人として分類されてゐる。南シャン州でミヤン *Myan* と呼ばれるのもラフ人のことである。

ラフ人は平常は平和的であるが、彼等種族の膨脹の結果としてシャン人及び支那人と屢々衝突して來た。この點では彼等はなか／＼好戦的な種族であると云はれよう。彼等の生來の武器は總てのロロ族と同じく弩である。彼等はその縁族のカウ人と同じく、偉大な獵師である。そして事實、ムーソなる語は「獵人」を意味するシャン語である。シャン州においてはムーソ人は人畜に被害を興へる虎の退治に招かれるのが常で、彼等はそれを弩を驅使してこの仕事を完うし、そして被害を受けてゐた村落の各戸につき三ルビーの勞賃を要求する慣はしであつた。諸種の點から見ても、もし軍隊にリス人の供給が不充分であるならば、その縁族たるラフ人をもつて補充することも考へられるところである。尤も彼等の言語はリス人とは異つてゐるので、兩者をもつて混成隊をつくることは出来ない。

カウ人は時にアカ人とも呼ばれてゐる。彼等はその縁族たるムーソ人とともに總ての丘陵民の中でも最も多數を占め、そしてサルウエン河からメコン河にかけてかなり廣く分布してゐる。カウ人もロロ族である。物怖ちをし引込みがちであるが、しかし又、極めて獨立心が強く陽氣な剛勇な種族である。彼等は實に勤勉な、歌の好きな丘陵民で、疑ひもなくカチン及びリス人同様に素晴らしい兵士たり得るのである。事實、彼等はリス人と密接な關係がある。カウ人の若者は背が高く頑丈であり、眞に丘陵民らしい歩き振りをする。彼等の顔は年をとつてから、阿片を吸ふまでは明るくて人なつこい。彼等はビルマの山地人と同様、ナット（精靈）を崇拜する。單純且つ迷信的であるが、カチン人の如く魅力のある奇麗な種族である。そしてカチン人の丘陵では多數見うけられる白痴、啞、不具がカウ人の村では全然見られないのである。

カウ人はカチン人と同様、焼畑耕作を行ふが、しかし又、彼等は偉大な獵人で、カチン人の如く常にジャングルの丘陵を歩き廻つて、その弩で狩獵を營んでゐる。要するにビルマの丘陵民族は、概していづれも健康にして清純な民族で、なほ未開の域は脱しないが、兵士として立派な素質をもつてゐることは、注目されねばならない。

5 **タライン族** タライン人はモンと自稱し、モン・クメル族に屬してゐる。モン・クメル族のビルマに下つたのはこの地への民族移動の最初の波であつた。その移動の主なる部隊はメコン河を下り、更にそこから侵入が横に擴がり、ビルマ全體に疏散した。後、西暦の始めに、イラワディ谿谷を下つて來たチベット・ビルマ族の侵

入によつて散在してゐたモン・クメル族は南に追ひやられ、遂にプロムの周りに集結した。他方、チベット・ビルマ族は九世紀に至つてバガンに集結した。かくて最近まで國中を血で血を洗ふ永年の闘争が始まるのである。一〇五七年、バガンのビルマ王アナウラツタの有名な襲撃をうけ、首都タトンは陥落し、タライン國はひとたびは亡んだ。タライン人はセイロンから純粹の南方佛教を受け入れ、六、七世紀頃には既にバリ語と梵語とを使つてゐた。これらの文化はすべてバゴダ建築の藝術と共にアナウラツタの征服の結果としてバガンのビルマ人に譲渡されたのである。

併し、タライン族は今一度は復活した。ビルマの最古の法律書「ワガル・ダムマタト」の著者となつたワガルの下に、一二八一年マタバンにタライン國家が興つた。その勢甚だ旺んで、アヴァを占領し、シャン諸州を侵略し、一五六四年にはシヤムに侵入してアユチャを占領してゐる。ベグは再び首都となり、その立派な文化は初期のヨーロッパの文人を驚かせた。しかしこのタライン國家も十八世紀の中葉には衰滅に向ひ、當時シウエボで小官吏となつてゐたウ・アウンザヤ(後のアランブラ王)の指揮下に再び勃興したビルマ人のために、一七五七年ベグが占領されるに及んで、ビルマ人とタライン人との間の永年の闘争は遂に終局を告げた。タライン人は完全に撃破され、タライン語は禁止され、比較的短い期間にタライン人はベグ及びデルタ地帯から姿を消した。ビルマ人によつてこの種族はみる／＼うちに同化されてしまつたからである。しかしながらテナセリムが一八二七

年英國領となつてからは、この不幸な民族は僅にそこで安棲の場所を見つけることが出来た。今日、アムハーストの住民の大部分はまだタライン人であり、そこにのみタライン人の民族性と言語とが幾分保持されてゐる。タライン人は大部分がビルマ人に同化されてしまつたのであるが、彼等は文化をもつた民族であつたから、彼等は今日ビルマ人のうちに生きてゐる。ラングーンにおけるビルマ社會の指導者の多くは事實タライン人であるといふ。

6 **バラウン族** バラウン人はビルマにおけるモン・クメル族のいま一つの重要な部族である。彼等は雲南の南詔シャン人の南に住み、恐らくシウエリ谿谷を下つてビルマに入つて來たものであらう。彼等は確にミイチイナのサドン地方で現在バーモのガウリ人(カチンのラーバイ族の一支族)の居住地となつてゐる地點を占有した。併し、カチン人によつてそこから掃蕩され、現在はルビイ鑛山、モメイク、シウエリ河の左岸に沿つて居住してゐる。又、その近隣のタウン・バインヤシバウヤラシオと南センウイの諸州にも居住してをり、少數のものは南シャン州にも入り込んでゐる。バラウンはビルマ名であり、彼等はル・マイと自稱し、大半はビルマ内に住んでゐる。パレ人もこのバラウン人の一分派であると思はれる。

バラウンは小奇麗な勤勉な種族で、カチン人より身體は大きい、男性的でないといはれる。彼等は特に内氣で引込み思案である。彼等をビルマ勞役隊に徴集する努力は、これがために失敗したが、少なくとも彼等の言語

を話す官吏の支配下に来るまでは彼等の能力を判断することは無理であらう。事實、かくの如くしてのみ未開人の信用はかち獲られ、かくしてのみ彼等は悦んで新しい勤勞形式に入るやうになるのである。ビルマ國境では人怖ぢする部族は始め將校の從僕、或は會社の雇人として見習期間を経る。次の段階は村の巡查か警察巡查として雇はれる。それから憲兵となつて勤務をつゞけ、その後、早く彼等は正規軍に入ることが出来るやうになるだらう。カチン人はこの訓練を経るに二十年を要した。勿論、バラウン人と多數の他の部族もまた同じ方法で見事に教化することが出来ることは疑ひない。

7 シャン族 シャン族は印度支那において最も廣く分布してゐる種族である。諸種の異つた名稱で、彼等は西はアッサム（こゝでは彼等はアホムと呼ばれ印度教徒となつてゐる）から、ビルマ、タイを横切り、東は廣東まで廣がつてをり、客家人 *Ching* は疑ひもなくシャン起源である。佛領印度支那のラオ人も同じ種族であり、タイ人もさうである。シャムといふ名はシャンの別名にすぎない。

ビルマにおけるシャン人の人口は一〇三萬七千人である。南北兩シャン州が主要な居住地であるが、シャン州の領外でも遠くカムチの北方や、上チンドウイン及び上ビルマの平原の至るところに住み、ミイチナヤカクでは住民は主にシャン人である。下ビルマでもその種族の殘留者をなほタウシグー、タトン又はメルギにさへ發見することが出来る。これら外延地區においては彼等は主にビルマ人化してゐるが、しかしその起源は見まぢがふこ

とはない。家内での言語はなほ多くの場合シャン語であるからである。タイにおけるシャン人は約五〇〇萬であり、ラオスでは三五〇萬である。廣東と廣西においては七〇〇萬人もあらう。それ故、支那と印度支那半島のシャン人の總數は二、〇〇〇萬を下らないと考へられる。

シャン人、即ちタイ族の以前の住地は四川における揚子江の地域であつたと信ぜられてゐる。その起源については何も知られてゐない。西曆一世紀頃、支那人から南詔と呼ばれてゐた揚子江南岸の國がシャン人の國家であつたことはほとゝ間違ひない。その首府は大理府か騰越かのいづれかであつたらしい。

古代においては南詔國の住民は哀牢人として知られ、雲南の全部、四川、貴州、東京、上シャムの一部を占領してゐた。相當の文明を有し、彼等は上ビルマを蹂躪し、恐らくチベット・ビルマ族の移住の波が過ぎた後にベングガルにも侵入した。ビルマの最初に知られた都タガウンはシャン人の創設に歸せられてゐる。ビルマ人のバガン朝のアナウラツタ王（一〇一〇年）の時までシャン人はヤメティン、メイチラ、マグウエ、チャウクセ、マンダレー及びその北方の地域を支配してゐた。ビルマ人のシャン征服の波に洗はれず高所に殘つたこれらの諸邦の殘存は、なほ上述の如きカムチ、上チンドウイン等に見出される。アナウラツタ王やチャンチツタ王のバガン時代はビルマ人が優越し、大ビルマ諸王の支配した時代である。しかし、一二八七年、バガン朝の終末に際しシャン人は確に支那人と協力してバガンを包圍した。バガンが陥るや支那人はその後に宣撫使を残したが、その多く

はシャン人でありその中でも三人のシャン君侯はミンザイン、メカヤ、ピンレの三地方にそれぞれその國土を拓いた。これらの小國家は間もなく統一され、シャン王朝は一三六四年までサガインに續いた。その後サガイン王朝は亡んでも、シャンの諸侯とその國とは上ビルマに存続した。その間、タライン人のシャン征伐も行はれたが、シャン人の上ビルマ占領は維持された。かくてアラウンブラ王の下にビルマ王朝の再び興起するに及んでシャン・ステーツはビルマの屬領となつた。

シャン人がビルマの最後の王朝に隸屬してゐた程度は、ビルマの諸王の性質と勢力とに應じてゐた。その最後のテイバウ王の時代にはシャン人はまた全然獨立し、たゞ名のみ服従に過ぎなかつた。テイバウの亡ぶや（一八八五年）、彼等はいつもの如く内亂状態にあつた。ビルマ國の一部として、彼等は英國のビルマ合併のすぐ次年に占領された。現在、數個のシャン州は聯合州を形成し、大小三十六の王領酋長領に分れ、各々英人官吏の輔導の下に統治してゐる。

シャンといふ語はビルマ語で「雲集」を意味する。シャン人が支那方面から雲の如く侵入し來つてビルマの一角を占據した事實に緣由する名稱であらう。之に反して支那人はシャン人をバイイと呼ぶ。これはバイイ即ち平原に住む蠻人の謂である。併しケントンの寺廟を見ても判るやうにシャン人は相當の文化をもつてゐる。廟内の天井や欄間の精密な彫刻や圓青の彩色等はなかく、侮り難いものがある。そしてこれらの裝飾は大體シャン固有の

文化が基礎になつてゐるのは勿論であるが、更に支那、タイ、チベット等の諸文化が影響し、融合して成つたものと言ひ得るであらう。彫刻の美しい線の中には、支那的な種々の象徴が見受けられるが、又ネストリヤン風のローマ寺院内部の壁畫に見るやうな魚模様の形式も採用されてゐる。一般に廟内の裝飾は動物を誇張的に圖案化した壁畫や彫刻が多く、建物の内外を飾る硝子はビルマ特有の佛像や龍の模様が金色その他の極彩色で描かれてゐる。

シャン人は他種族と雜居せず、ビルマの中にあつても別社會をなしてゐるが、社交的であるとともに、性質も快活、溫順で親しみ深く、ユーモアをも解する。しかし、實は短所も多分にもつてをり、たゞその嗜みによつて自制してゐるやうに見受けられる。シャン人の一部は阿片を好み、少しく大袈裟な言ひ方をすれば、全部のものが賭博常習者で、これが日常生活のすべてであるといつた觀がある。要するに彼等は怠惰で氣紛れで、趣味も極めて低調單純であると同時に、皆が美食を好み烟草を愛用し、美衣を纏ひ祭と娛樂を追つて過してゐる。併し、その生活は都會の近代的文明から遠く數百哩も隔絶してゐるので、彼等がこの活氣のない土地を桃源境と考へ、かゝる生活を樂しむやうになるのは、むしろ無理のないことである。兵役に對しシャン人が嘗て熱意をもたず、募兵も遂に停止（一九二五年）せざるをえなくなつたのも、彼等の桃源境の生活が之を然らしめるのである。實際、彼等の土地は肥え、氣候は快適で、國土は半分しか居住されてゐないので、この幸運なる住民は少しも努力

せず豊かな生活を送ることが出来るのである。明かにさういふ住民の募兵は甚だ困難である。たゞ、一般に住民の層富裕である北シャン州よりも、南シャン州においては募兵の發達する可能性がないではない。

シャン人の生業は主として農業であり、凡そ五穀蔬菜は皆よく栽培する。手工業の織物も旺んである。加ふるに最近では商業に従事するものが増加し來り、將來は進歩發達するものと見られてゐる。

シャン人はタイ人の嫡系であるから、文字言語も等しくタイ人と通ずる。最近ではビルマ文又は英文の教育を受けるものが増加し、これらの智識人はビルマ人を目指して競争してをり、進取的精神の見るべきものがある。シャン人の特技は拳闘術であり、これには甚だ熟達してゐる。宗教は佛教であり、佛事はなか／＼盛んである。

8 カレン族 ビルマ人に亞ぐ多数の人口を擁してゐる種族である。近時、カレン族はビルマにおける最も注目すべき民族をもつて目されてゐるが、それは單に人口が多いといふばかりでなく、彼等がキリスト教宣教師の教化を受けて以來、次第に素晴らしい民族性を發揮しはじめたからである。

カレン族の起源については、今日、一般に支那起源が認められてゐる。彼等が平和に靜に控へ目に通りすがりの部族との接觸を出来るだけ避けつゝ移動した状況に鑑みても、彼等が孤立的で他種族に對し冷淡でよそ／＼した性質をもつてゐることは首肯しうるところである。そしてこの性質は今日でも、所謂丘陵カレン人においてはハッキリと窺ひうるのである。彼等の移動史は他種族の歴史に何等の痕も残してゐないし、又、嘗て彼等の間に

は優れた一人の指導者も現はれなかつた。このことは、他面から見ると、ビルマに入つた彼等の生活が、トライン人とビルマ人との激しい闘争の間は勿論のこと、ビルマ朝の時代においても、慘澹たる状態であつたことを意味する。彼等は永らく日蔭の民族として暮して來たのである。併し、さういふ生活もイギリスのビルマ合併によつて過ぎ去つた。今や彼等は非常に繁榮せる種族であり、ビルマにおいても最も英國に對する忠誠の念に燃えてゐる種族である。

カレン人は通常、平原カレン人と丘陵カレン人とに分けられる。大ざつばに云へば、平原カレン人は極めて開明の民族で、賢明でよく教育も進んでゐるが、丘陵カレン人は無智で物怖ちする民族であるといはれる。併しそれはごく一般的に見た場合のことであり、殊に丘陵カレン人にあつては分派の如何によつて性質は著しく異つてをり、例へばタウンテウ人の如く平原カレン人に勝るとも劣らない優れた部族もゐるのである。従つて、單に平原カレン人と丘陵カレン人との區別に基づく一般的判断をもつて満足すべきではない。

平原カレン人の最も重要な區分はブオ<sup>ပူဝါ</sup>。人とスガウ<sup>သီပေါ</sup>の<sup>ပူဝါ</sup>人<sup>သီပေါ</sup>とである。兩者のカレン族中に占める割合及びその地域的分布は次の如くである。

スガウ 人

五一八、〇四〇人(三八%)

ブオ 人

一〇一、三四一

イラワディ地区	一四一、五七二
テナセリム地区	二六九、六五〇
ブオ人	四八七、八二四 (三六%)
ベグー地区	二二、八二三
イラワディ地区	二九九、四八五
テナセリム地区	一六五、一二五
丘陵カレン人	三三三、七四二 (二四%)
その他カレン人 (特に名を挙げず)	三八、〇六七 (二%)
カレン族合計	一、三六七、六七三 (一〇〇%)

ブオ・カレン人は、彼等が遙に南の方に移住して、現在絶滅しつつあるタライン人と混血せる故をもつて、時にタライン・カレン人と呼ばれてゐる。このタライン人から彼等は佛教を傳承したといはれる。スガウ・カレン人は時にビルマ・カレン人と呼ばれてゐる。カレン人はビルマにおけるキリスト教宣教師の大成功をみた種族である。實際、彼等に二つの缺點があるとすれば、一は余りに彼等がキリスト教的であることであり、他は余りに愛想に乏しいことである。スガウ・カレン人は特にキリスト教をそつくり受け入れ、その信者の總数は二一萬八千餘人に及んでゐる。カレン人は天性賢さは劣つてゐるかもしれないが、ビルマ人よりも教育は進んでゐる場合

が多い。そして協力することその種族的個性を培ふことを教へ込まれてゐる。この點で彼等を推奨し過ぎることはない。實際、彼等がもつと自由に打ち解けてビルマ人と交際したならば、彼等の進歩は一層顯著となるであらう。

平原カレン人は總じて勤勉であり、その點ではビルマ人は遠く及ばない。富裕階級でもその生活は淳樸である。彼等は賭博をせず阿片を吸飲せず、おのづからその生活は概ね裕かであり、常規を逸することがない。協同することは彼等の美しい徳性であるが、彼等は凡そ公共事業の寄附や勞役に對して逃避するやうなことをしない。ビルマのキリスト教學校の大半はこの種族の經費によつて創設されたものであり、中等程度の家庭で一時に支出することの出来ないものは、その分擔金を數十年もかゝつて喜んで年賦で支出してゐる。

佛教徒もあるが、キリスト教徒の信仰態度は余りにキリスト教的であると云はれるほどあつて甚だ敬虔で日曜日の拜禮を嚴守し、日曜日には彼等の間を旅行するのは不可能だと云はれる位である。教育はキリスト教の關係で大半は歐化してゐる。そして西洋醫、牧師、辯護士等になるものは、多くは彼等の間に出で、カレン人はビルマの智識階級の重要部分を占めてゐるのである。大部分のカレン人は優秀な農耕者として農業に従事してゐるが、彼等は忠順であるからビルマ人よりも訓練し易く、従つて夙にカチン人及びビチン人とともに多年軍警として、又少數ながら正規兵として勤務してゐる。一九三〇年ビルマ部隊に徵募されたものは、カチン人六八〇人、



チン人六六六人、カレン人六〇九人が主なるものである。ビルマ人及びシャン人の募兵が停止されてゐるとき、兵士としてのカレン人の重要性を見るべきである。又、カレン人は事務員、小學校教師、車掌等として使はれてゐる。無愛想であるが、忠順であるから、使つて最も使ひ易いのである。同様にカレン人の女は看護婦や阿媽として適してゐる。

丘陵カレン人は最良の兵士となりうると説かれてゐるが、これは疑ひなきをえない。現にカレン人の應募者もその殆んど全部が平原カレン人である。素質の點から云つても、丘陵カレン人は非常な酒飲みであり、極めて遠慮深く且つ疑ひ深く、天性勇敢でなくたゞ教導によつて勇敢ならしめられてゐるのである。彼等は外來人、殊にビルマ人を見ると逃げかくれ、後者に對して昔から世襲的な恐怖心を抱いてゐる。その人怖ちの程度は之を経験したものでなければ到底想像できない。彼等はわざ／＼その村を深いジャングルの中におき、出來うるかぎり道路や河川から遠ざかる。もしその傍に道路が拓かれると屢々全村をあげて移轉する。それほどその孤立的傾向は根深いものである。ダウナ丘やタウンジン川の丘陵カレン人は特に孤立的である。彼等は實際に外界と何らの交通なく、萬事を自分等の内部で處理してゐる。しかし、他面、彼等は極めて外人に對し愛想よく、外人は許しを請はずに家に入り食事をすることが出來ると誌されてゐる。村民は大變正直で米は遠く住家から離れた田地の中につくられた貯蔵所に入れてある。これらのカレン人は體格すぐれ、歩行に疲れを知らず、鐵砲を持てば俊敏な

狩獵者である。

丘陵カレン人の中、最も重要な分派はタウンテウ人 *Taungtha* である。人口も二二萬六千人を數へ、丘陵カレン人の七〇%を占めてゐる。タウンテウ人は表面上カレン人に余り似てゐない。又、この種族の他の分派とも共通點があまりない。しかし、タウンテウの言語は明にプロ語と關聯してゐる。彼等は自分をバ・オと呼んでゐるが、これは平原カレン人のプロの訛つたものである。タウンテウはそのビルマ名であり、これは「南の人」を意味する。彼等がタウンを根據地としてビルマ人の南に住んでゐたからである。

タウンに會てタウンテウの王があり、彼等は今もこの地を故郷と考へてゐる。王朝の倒れたのち人民は廣く分散したらしく、今日でもタウン地方には五萬三千人餘のタウンテウ人が住んでゐるが、他の四分の三は奇妙な分布を示めてゐる。シャン州のタウンデのやうな北にまで擴つてゐるかと思へば、モウルメインのカウカレイクのやうな南にも散ばつてをり、そしてその間タウングー、ベグ、パアン、ナウンロン、チロンに移住地がある。サルウエン河に沿ふパアンの周圍には最も多數ゐる。現在シャン州に發見される北部タウンテウ人は強健な高原人であり、彼等はシャン語を語り、シャン・タウンテウ人と呼ばれてゐるが、一七八一年にサトウンに移住して來たといはれる。サトウンのミョザ（土侯）はタウンテウ人であり、この公國の人口は殆んどこの種族で占めてゐる。その女子はシャン人に劣らず眉目麗はしく、その國粹の風俗を維持し、黒い袋のやうな上衣をつけ、黒い

ターバンを巻き、金銀の装飾とゲートルとをつけてゐる。タウンテウ人はその男性さと独立性において傑出してをり、同族のカレン人の如く控へ目で非社交的なところは少しもない。どこの移住地にあつても彼等は共同一致の結束を示めてゐる。パンンにおいてダコイト人がむしろ多数であるが、タウンテウ人の村落には一指も觸れることが出来ない。この事實は彼等が頑健なる獨立的種族であるといふ印象を確かめてゐる。彼等の行状は確に魅惑的である。酒は或程度まで飲むが、阿片には耽らぬ。彼等の軍隊に入つてゐるものは極く僅かであり、地方警官になつた者も少ない。それで、かゝる實状はタウンテム人の素質に照合して、少なくとも立派な兵員資源を等閑視してゐるものと惜しまれてゐるほどである。

### 第三節 各種屬の經濟能力

民族の生業はその民族の現在における經濟能力を或る程度において表示してゐる標徴と見ることが出来る。ビルマにおける諸民族の生業状態は一九三一年の國勢調査に示されてゐるが、手許の資料では實數を得られないから、百分率で示めすと、まづ産業別には次の如き人口構成となつてゐる。

第一表 産業別各種族人口構成 (百分率)

	全人口	ビルマ人	其他土着種族	印度人	支那人	其他
農業	六九・六	九〇・一	八二・五	四六・〇	三三・三	四七・七
鑛業	〇・六	〇・四	〇・三	一・三	四・二	三・六
工業	一〇・七	一〇・九	八・〇	三・六	一六・七	九・九
交通業	三・六	二・六	〇・九	一〇・五	六・三	三・四
商業	九・〇	九・五	三・九	一六・四	四二・七	一九・六
行政業	一・三	〇・八	〇・八	二・〇	〇・七	一五・九
自由業	三・三	三・八	二・五	三・二	一・六	一七・一
その他	二・一	一・三	一・一	七・〇	五・五	七・八
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

本表にはビルマ原住民族のうちビルマ人を除く他の諸民族については一括されてをり、その内譯を缺くことは遺憾であるが、産業別人口分布の状況はビルマ人の場合とほぼ同様であると見てよい。ビルマ人にあつては、その歴倒的部分が農業に従事してゐることに別に不思議はないが、工業及び商業に従事する人口が低いながらもほそれぞれ一〇%内外を占めてゐることは注目に値する。印度人が農業にその半分近くのものに従事し、他の半分近くが工・交・商業に従事してゐることはやがてビルマ經濟における印度人の地位を示めすものであり、他方支那人にあつてはこゝでもその人口の絶對的多数(四二%)が商業に従事してゐることと共に、第二の注目すべ

き事實である。併し、産業別の各民族人口構成は各民族における産業別の發達程度を示すものであり、そのかざりにおいて各民族の經濟能力の判断指標たりうるにとどまるのであつて、各民族のビルマにおける經濟能力の發達程度は一層直接的には次の職業別各民族人口構成について見なければならぬ。

第二表 職業別各民族人口構成 (百分率)

	全人口	ビルマ人	其他土着民族	印度人	支那人	其他
耕地所有者	100	48.9	1.3	49.9	8.4	4.5
耕地借地人	100	60.6	0.3	33.4	6.7	1
農業労働者	100	37.1	0.0	56.3	2.6	1
牧畜者	100	1.2	0.2	98.1	0.6	1
漁師及獵師	100	28.1	1	71.1	0.8	1
事務員	100	29.1	1.8	56.5	5.6	7.0
企業管理人及役員	100	18.9	0.8	30.8	2.8	3.7
技師	100	25.7	0.5	56.0	1.7	2.1
不熟練及半熟練労働者	100	8.6	0.2	89.2	1.0	0.6
技師及専門家	100	24.4	2.8	34.4	3.8	3.6
商業従事者及販賣者	100	3.7	0.5	71.4	3.9	2.5
金利生活者	100	3.4	2.3	46.4	5.2	3.7
陸海空軍及警官	100	17.7	4.0	67.5	0.5	10.3

一般公務従事者	100	33.6	3.4	10.9	3.0	48.9
宗教關係者	100	7.9	2.6	70.6	1.0	17.9
醫療關係者	100	34.2	2.0	55.2	9.2	8.6
掃除人及芥取者	100	1	1	99.9	1	0.1
其他	100	50.1	5.3	36.4	2.6	5.6
計	100	0.3	2.6	88.5	6.3	2.3
記載事項不明	100	15.2	0.6	74.8	6.6	2.8

本表によつて見るに、まづ第一に各職業に亘つて印度人の占める割合が歴的に大なることに驚かされる。印度人の占める割合が比較的少ない職業にあつては、代つて(歐人本表にては「其他」に含まれる)の割合が大である。企業者管理人及役員、技師及専門家、一般公務従事者等の高級の職業においては、いづれも歐人の割合が著しく大である。ビルマ人の割合の最も大なるは僅に耕地所有者と耕地借地人とであり、農業労働者にあつては既に印度人によつて過半を占められてゐる。之によつて見るに、ビルマの社會經濟は農業部面を除いて外來人によつて、特に歐人及び印度人によつて壟斷されてゐるといつて過言でない。しかもその農業部面においてさへ、耕地所有者の割合は印度人の増加が顯著であり、印度人の耕地所有者の増加につれて印度人の耕地借地人もまた増加する傾向にあり、これは特に一九二九—三二年の世界恐慌によつて強化されてゐる。ビルマ人の唯一の優勢な職業地盤としての農業部面においてさへビルマ人が特に印度人によつて驅逐される傾向が激化したところにビ

ルマにおける印度人問題發生の根本的原因があるのであるが、これについて次節に之を見よう。

第二に本表によれば、技工、不熟練及び半熟練労働者において印度人の割合が甚だ多いことが注目される。支那人を加ふれば、七〇%乃至九〇%以上に達してゐる。これはビルマにおける鑛・工・交通業が専ら外來の勞力特に印度人の勞力に依倚してゐることを示めてゐる。實際、近代ビルマの工業的發展は専らヨーロッパ資本と印度人勞力とに依據してゐた。かく印度人がビルマ労働市場においてビルマ人に優越するに至つたのは、多くの要因が複合して因をなしてゐるのであるが、本源的な原因は、印度人の勞力が低廉且つ豊富であることにあつた。加ふるに、フアーニバルも言ふやうに「ビルマ人は工業的進歩、工業上の諸方法を最初から學ぶ機會をもたなかつたし、高級な労働市場に刺込むことも不可能であつた。といふのは、ビルマ人を雇ふよりも印度人を雇ふ方が、單に低廉なるのみならず、簡單で煩はしさが少いからであつた。ビルマ人は近代工業の作業をやる上には訓練を必要としたが、印度人は既にこれを習得してゐた。蒸氣機關は、ヨーロッパ人がビルマに來る以前に、既に印度に到着してゐたし、ヨーロッパ人が蒸氣機關をビルマに齎したときには、ヒンドスタン語を生嚙りにしたスコットランド人の技師はビルマ人を訓練するよりも、既に近代工業に慣れいくらか機械のことも知つてゐる印度人を雇ふ方が面倒が少ないことを見出してゐた。かくして、印度人はその低い生活水準と低賃銀を甘受することを別としても、産業組織上のヨーロッパ式の方法を知悉してゐたために、ビルマ人に比し遙に有利な地位を占

めてゐたのである。このやうに、ビルマにおける勞力の供給者としてはビルマ人は印度人に壓倒されてゐるが、併しこのビルマ人の劣勢は、ビルマ人が近代的労働に對する素質を缺いてゐるといふよりは、むしろビルマの工業的發展が主としてイギリス資本の手によつて行はれたがためであることを知りうるのである。

第三に商業従事者及び販賣者においても、印度人は壓倒的多數を占めてゐる。南方諸地域において殆んど例外なくその地の商權を握つてゐる流石の支那人もビルマにおいては印度人の下風に立つてゐる。併しこゝに注目すべきはこの職業分野においてビルマ人の數が支那人のそれに匹敵してゐることである。この事實は、或る意味では商人としてのビルマ人の未發達を意味するが、併し他の意味では資質においてビルマ人も商人として支那人と拮抗できるといふことを示めてゐる。ビルマでは大概の町や若干の部落には公營バザアがある。フアーニバルの記述によると、「商人の多くは、奥地のバザアにおいてさへも、印度人である。だが、バザアは種々の部門に分たれてゐる、ビルマ生産品を扱ふ部門ではビルマ人が優越を示してゐることは注目に値する。貿易商としてのビルマ人は、むしろ外國人に比肩しえないが、たゞ農産物の輸出貿易においては、農民と眞の輸出業者との間の仲介者は主としてビルマ人である。材木業においてもまた、木材が森林から大材木會社の手にわたるまでの間、主としてビルマ人の手にある。それ故、ビルマ人はビルマからの輸出品を取扱ふ上において重要な役割を演じてゐるのであつて、かゝることは南方地域においては全く見られない現象であり、ビルマのために充分強調するに

値する。併し、之に反して輸入貿易に關してはその地位は大いに異り、そこにおけるビルマ人の地位は比較的重要なでない。輸入商品についてはその國內配給にさへビルマ人の従事するものは甚だ稀れである。その理由をフア・ニバルは説明して云ふ、『英國人はビルマに來る遙か以前に印度にゐたので、この爲印度人はヨーロッパ人の輸入する商品の配給に有利な地歩を占めることになつた。そして英國人がビルマにやつて來たときには、同時に英國人の取引上の慣行を理解し、英國人と會話することの出來る印度人も亦流入して來たのである。印度人はこの利點によつて、輸入會社から消費者に至る輸入品の配給を統御することが出來たのであつて、また既に述べたやうに、奥地の小さな町のバザールにおいてすら、布店の多くは印度人の所有になるものである。ラングーンでは少數のビルマ人が布及び衣服の販賣に地歩を占めはじめつゝあるが、これらのものと雖も、ヨーロッパ人、印度人乃至は日本人の輸入業者からなくては品物を手に入れることが困難なことを見出してをり、また金融の點においてもハンディキャップをもつてゐる』と。この説明に徴しても明らかな如く、ビルマ人が輸出商品における如くに輸入商品の國內配給に有力に参加できないのであるのは、ビルマ人の資質が印度人に劣つてゐるからでなく、ビルマ人がイギリスの植民地的市場として開發せられたといふ歴史的制約のためである。勿論、今後ビルマ人が輸出入の貿易業そのものに活躍するようになるには、輸出品の仕向地、輸入品の仕出地における市況についての相當の知識をもつ必要があるので、なほ若干の年月を要するであらうが、東亞共榮圈建設の曉には貿易商とし

て必要な豫備知識の如きも一層簡單になり、又、金融上のハンディキャップの如きも除去されるであらうから、ビルマの貿易をビルマ人が營むことも十分期待できるのである。

第四に右の商業の場合と同様に、ビルマ人は印度人に各職業分野において倒されてゐるとはいへ、事務員、技工、技師及専門家としてはそれぞれ二五%乃至それ以上の割合を占めてをり、企業管理人及役員としても二〇%近くに上つてゐる事實は、無雜作に之を看過すべきでない。むしろこの事實からは、ビルマ人にもかゝる職業に對する能力が全く缺けてゐるのではなく、チャンスさへあれば、彼等もまた印度人や支那人に拮抗して發展しうる事が推測されるのである。現に、マンダレーでは電車従業員が完全にビルマ人で占められたとき、ラングーンでは電車従業員にビルマ人を使用することは殆んど不可能だと考へられてゐたのである。

併しビルマ人が鑛工業及び交通業方面に大いにその職業分野を開拓するチャンスは内燃機關の導入と共に來た。蒸氣が石油によつて置きかへられた時、蒸氣船に雇傭されてゐた印度人の機關手や水夫はそのまま雇はれつゞけられるだらうと思はれたのであるが、思ひきやビルマ人は自動車、モーター船及び内燃機關を動力とする工場に職を見出し、また海洋航行船が石油を用ふるやうになつたとき、ビルマ人は火夫として雇はれたのである。石油工業においても、大石油會社はまもなくビルマ人に職を與へ、ビルマ人の割合は増大の一途を辿り、遂に今日ではその多くは熟練技術者として責任ある地位を獲得するに至つてゐる。ビルマ石油會社の提供にかゝる數字

によると、一九二七年度に油田作業に従事してゐたヨーロッパ人以外の従業者中、ビルマ人の占める割合は五〇・一四%であつたが、一九三二年には五六・六六%に、一九三七年には六一・〇四%に増加してゐる。この會社の従業者中では、ビルマ人は單に數の上で印度人を壓倒してゐるのみならず、平均してみても上級の地位にあり、俸給のパーセンテージも印度人に比して高い。近年、ビルマでは農業に石油發動機が應用され、稷の切穂作業や搾油作業においてのみならず、耕耘その他の農事作業においても用ひられるやうになつたが、これもビルマ人が石油及び内燃機關に關係する職業分野に大進出をなしたことが、少なくともその一因となつてゐるであらう。

併しビルマ人が進出してゐる職業分野は、何もこればかりではない。フアーニヴアルによれば、ラングーン及び實際上同州のすべての主要都市における電力使用の増大は、ビルマ人に對して又別なチャンスと與へたもので、彼等は専ら支那人と競争して、このチャンスを取入れたのである。ビルマ人はまた別の新たな職業分野、即ち映畫事業にも地歩を見出した。即ち、ビルマ人の生活を取入れた映畫に對する需要があり、それ故、ビルマ人の映畫作者やプロデューサーに對する需要が生じてゐる。そしてこの事業においては、ビルマ人は獨占的地歩を有してゐるのである。出版業もまた之と同様である。百年前印刷術が輸入されたとき、出版業を始めたヨーロッパ人はビルマ人の植字工を訓練するか、或は印度人の植字工にビルマ語のアルファベットを教へるか、何れかを選ばねばならなかつたのであるが、當時、僧院式の教育制度が普及してゐたお蔭で、ほとんど全部のビルマ人は讀書き

が出来たので、印度人の植字工にビルマ語のアルファベットを教へるよりもビルマ人に組版を教へる方がいくらか容易であつたのである。この小さな有利な點が印刷業においてビルマ人の出立を可能にしたのであつて、ビルマにおける印刷の大部分は英語で行はれ、主要新聞紙の印刷工組長は印度人にも勝るヨーロッパ人であるが、しかもビルマ人の印刷工は、より低廉な印度人労働者の競争に打ち克つて地歩を固めて來たのである。

そこでフアーニヴアルの如きも、ビルマ人の經濟能力について述べてゐる。曰く「かくの如くビルマ人のみが充足し得る需要があつたとき、彼等がその需要を充足し得たといふことは、もし機會にさへ恵れれば他の職業においても同様な役割を演ずることの出来ることを示唆してゐる」と。これはビルマ人の經濟能力に對する將來性について疑ふべからざる判断だといふことが出来る。實際、現在のビルマ經濟においてビルマ人が大部分の點において印度人とその地歩を譲つてゐるのは、彼等の能力が印度人に比して劣つてゐるからではなくして、むしろビルマがイギリスの植民地として開發されて來たといふ歴史的制約に多分に基いてゐるのである。ビルマがイギリスの羈絆から解放され、東亞共榮圏の一環としてビルマ人のビルマが建設されるときには、ビルマ人の經濟能力が急速に發達するであらうことは、今から斷言することが出来る。勿論、これがためには彼等の生活態度において幾多の改善を必要とするのであるが、併し彼等がそれがための資質を有することは、以上の事實に徴して何人も之を否定しえないところである。

## 第四節 ビルマにおける印度人問題

ビルマでは支那人よりも印度人が遙に勢力がある。人数も印度人が壓倒的に多い。南方の大概の諸地域では華僑問題が発生するが、ビルマでは印度人問題が発生する。ビルマの印度人は、上掲第二表に示されてゐるやうに金貸業者チエチャ、商人、農業地主から小作人、農業労働者、牧畜者に至るまで、企業管理人、技師及専門家から技工、工業労働者、苦力、掃除人に至るまで、あらゆる分野に亘つてその根を張つてゐる。所謂印度人問題はかくの如くビルマ經濟の隅々にまで及んでイギリスの支配を背景とする印度人がビルマ人を壓倒してゐるところから生ずる複雑な事情に基因するのであり、その全貌をこゝに説く余裕はないが、併し、印度人問題が尖鋭化する政治問題として発生するのは、端的に言つて、土地問題と小作人問題をめぐつてである。即ち、チエチャによるビルマ農民の土地の收奪と、印度人小作人によるビルマ小作人の驅逐とである。

一九三一年の國勢調査によると、ビルマの耕地所有者はビルマ人四八・九%、印度人四〇・九%、支那人八・四%で、印度人の割合は異常に高い。一八六九年スエズ運河の開通と蒸汽船の發達とはビルマ米に對する大量需要を喚起し、米價の昂騰を來したが、それに伴つて下ビルマ、特に三角洲地帯(デルタ)は急速に開發された。

その開發の資金を賄つたものがチエチャ Chettyars であつた。チエチャは南部印度の世襲的金貸業者の階級である。彼等はイギリス人がやつてくる以前から金融業に従事してをり、近代銀行業の發展初期にイギリスと接觸し、イギリスの銀行制度及び印度におけるイギリス銀行家を知悉してゐたのであつた。銀行は最高の利潤をあげられる見込があれば何處にでも金を貸すのであるが、チエチャは充分な利子を提供することによつて、必要とするだけの金をイギリスの銀行から借出すことが出来た。換言すれば、チエチャはイギリスの銀行の遊資を自己の責任において危険の多いビルマの開發に融資する役割を果たす高利貸金融業者である。ビルマには多年の間チエチャがゐた。即ち一八二六年におけるテナツセリムの併合直後、英人はこの國を開發するために低廉労働を得る目的でマドラスからの苦力の移入を奨励したが、その外にも英人はマドラス人より成る苦力部隊をいくつか使用してゐた。このやうな南部印度との關係の結果、下ビルマの主要な町には長い間チエチャが地歩を固め、これらのチエチャは農民の必要とする一切の金を銀行から得ることが出来たのであつた。土地が耕されたところでは、農民は喜んで高率の利子を拂つたので、チエチャは巨大な利潤を擱みとる機會を與へられたのであつた。農耕地が擴大するにつれて、チエチャはデルタ地帯に擴まり、今日ではほとんどビルマ全土に及び主要金融業者となつてゐる。一九二九—三〇年に銀行調査委員會が推算したところでは、チエチャがビルマ全土に對して貸出してゐた資金の總額は七億五千萬ルーピーで、そのうちの三分の二、即ち五億ルーピーは農業金融に充當さ

れたものであつた。チエチャが不在地主として巨大な地位を占めるに至つたのも蓋し當然のことである。

元來、多くの方面において印度人はビルマ人よりも土地取得上利便を有してゐたのであつた。その最も主要な利點は英國統治の初期において、印度人は公的・商業的業務上の英國流の方式に慣れてゐて、その結果ヨーロッパ人官吏又は商社と土着の人民との間の仲介者として行動するに至つたといふことであらう。フアーニヴアルの語るところによれば、『金貸業者の大部分は印度人であり、ごく最近までは法律家の大部分も印度人であつたし、下ビルマにおいては政府官署の殆んどすべての絞刑吏、僕婢は印度人である。下ビルマの土地のほとんど全部は過去二十年間において、裁判所の手を経、ないし金貸業者の手を経たのであるが、このやうなことが起るたびに印度人が好條件で土地を取得する機會が生れたのである。彼等はまた法律の機構を利用乃至悪用して、ビルマ人よりも遙に良い土地獲得の機會をもつた。更に彼等の大部分は印度に歸るために金を貯める目的でビルマに來たのであつて、土地は彼等の貯蓄を投資する唯一の確實な方法なのであつた。單にこの記述を讀むだけでも、下ビルマにおける農村の急激な分化、即ち自作農の小作人への轉落と不在地主の土地の兼併とが、イギリスの支配を背景とする印度人の活躍を通じて如何に急激な過程を辿つたかを想起することが出来るのである。

この過程は一九三〇年に勃發せる世界恐慌による米價の暴落によつて一層激烈なものとなつた。債務者たるビルマ農民は債權者に對する契約不履行によつて幾多の破産者を出し、その結果、土地は農業者より非農業者たる

チエチャを主とする高利貸の手に集中されていつた。第三表はこの狀況を示めてゐる。

第三表 下ビルマ主要米産地十三地方における農地所有者の異同

	(1) 全占有面積	(2) 非農業者占有面積	(3) チエチャ占有面積	(3)の(2)に對する比	(3)の(1)に對する比
一九三〇年	九、三四九	二、九四三	五七〇	一九%	六%
一九三七年	九、六五〇	四、九二九	二、四四六	五〇%	二五%

即ち一九三〇年には全占有面積の三二%が非農業者の手中にあつたが、一九三七年には既に五一%が彼等の所有するところとなつてをり、そして非農業者の占有面積のかゝる大増加はその大部分がチエチャの占有面積の増大に基いてゐるのである。即ち、チエチャの占有面積はその間に實に四倍以上に増大したのであつた。その結果は言ふまでもなく、夥しい數の自作農の小作人または農業労働者への轉落である。然るにそこでもビルマ人は印度人の生活破壊的な競争に出合はすのである。

年極小作が普及してゐる多くの國では、同一の土地は年々同一の小作人に賃貸されるものであるが、ビルマの小作慣行では驚くべき程大部分の小作人が毎年別の土地を耕してゐる。ペグーにおいては賃貸される土地の五〇%は一年間だけその土地を耕作する小作人によつて保有され、一七%は同じく二年間繼續の小作人により、八%は三年間持續の小作人により、殘餘の二五%が四年間又はそれ以上持續の小作人により保有されてゐた。インセ



インにおけるこれと同様の数字は、それぞれ四七%、二二%、一〇%及び二二%であつた。ある場合には小作人は自發的に土地を去り、ある場合にはより高額の地代を約束する新な小作人に土地を譲るために追立てられるのである。かういふ小作慣行に乗じて、今日、小作人の多数は印度人であり、その割合は益々増大しつゝある。これは一には土地所有者としての印度人が増加する結果でもあるが、又、ビルマ人の地主も小作人として印度人を喜ぶからである。それは主として兩民族の生活程度の相異から來る小作料の大小に依るのである。即ちフアーニツアルが説くやうに、一〇エーカーの土地の耕作により穀を年四〇〇籠だけ收穫するとすれば、印度人は一八〇籠で生活し、二二〇籠を小作料として納めうるが、ビルマ人は二〇〇籠を生活必要量とし、小作料としては二〇〇籠しか納めえない。しかも印度人は精勵して四一〇籠を收穫するのであるから、近年の小作料の昂騰によつてビルマ小作人は次第に窮地に追ひ込まれつゝあるのである。穀の消費量がビルマ人に多いのは、僧侶への寄進、客人の接待、派手な祝祭等の生活慣習に基くものであつて、ビルマ農民の生活費の膨脹は避けがたい。従つて生活水準の低く且つ勤勉なる印度人の競争にはビルマの農民に不利な立場にあり、結局、チエチャから高利の消費信用をうけ、その支拂のために或は所有田地を取上げられ或は青田賣りをなし、益々窮迫につきおとされるといふ過程を辿つて來たのである。

かくてビルマにおける印度人問題は、ビルマ農民問題と表裏の關係にあり、ビルマにおける反英運動が印度人

排斥と結びついてゐるのはかゝる事情によるのである。

## 第四章 マライ民族事情

### 第一節 人口と民族

舊英領マライは行政区劃として海峡植民地、マライ聯邦州、マライ非聯邦州とに分れてゐた。海峡植民地は、シンガポール、ピナン、ウエスレイ、マラツカ、ラプアン、クリスマス及びココス諸島から成り、その面積三、五〇〇平方秆である。マライ聯邦州は、ペラ、セラングール、ネグリ・スンプラン、パハンの四州で七一、〇〇〇平方秆、マライ非聯邦州は、ジョホール、ケダ、ケランタン、パリス、トレンガヌの五土侯州及びブルネイ（ボルネオ）から成り、六三、〇〇〇平方秆ある。以上の總面積は一三八、〇〇〇平方秆となり、わが九州、四國、北海道を合せた位の領域である。

マライ半島の總人口（一九三八年末現在推定人口）は五二四萬人で、その民族別構成は次の如く、典型的な植民地的性格を遺憾なく現出してゐる。

マライの民族別人口構成

	一九三一年		一九三八年	
	實數	%	實數	%
マライ人	一、九六二	四四・七	二、一七九	四一・六
支那人	一、七〇九	三九・〇	二、二一四	四二・三
印度人	六二四	一四・二	七四三	一四・二
歐米人	一八	〇・四	二八	〇・五
歐亞混血人	一六	〇・四	一八	〇・三
其他	五六	一・三	五七	一・一
合計	四、三八五	一〇〇・〇	五、二四〇	一〇〇・〇

(註) 海峡植民地中のクリスマス、ココス島を除く。又非聯邦州中のブルネイを除く。

右表は二つの事實を語つてゐる。その一は七年間に總人口八五萬五千人を増加してゐることである。増加率年平均二・八%弱であるが、この大増加は決して自然増加によるものではなくその過半が移民による増加である。即ち一九三二年から一九三八年の間は入國者數三三〇萬九千人、出國者二八六萬三千人、差引四四萬六千人の入超である。人口の流出入が激しく、且つ移入民に依る増加が大なることを知り得るのである。その二は原住民人口よりも移入民人口が多いことである。一九三一年現在ではマライ人が過半とはいかないまでもなほ辛うじて最

多數を占めてゐたが、最近ではそれさへも失ひ、代つて支那人が最多數を占め、單に人口數から見てもマライ半島の地がマライ人の土地ではなく、外來人の、特に支那人の土地であるかの觀を愈々深うするに至つてゐる。この二つの現象の外に、更に第三の植民地的性格として、男女の人口比率の甚しい不均衡を挙げねばならない。人口構成が出稼的移民によつて左右されるとすれば、男子人口が女子人口に對して過多の現象を呈することは當然の結果であるが、マライ半島はこの點においても、次の如く典型的である。

男子人口千人に對する女子人口

	一九二一年	一九三一年
マライ人及原住民族	九五六・九	九七〇・七
支那人	三八四・八	五一二・六
印度人	四〇五・九	四八二・一
歐洲人	四八八・三	五三六・〇
合計(其ノ他ヲ含ム)	六二八・八	六八八・〇

マライ人及び原住民族においては、定住人口の自然的傾向として、男女の人口比率はほど均衡状態にあるが、支那人及び印度人にあつては、端的に出稼的移民人口の性質を露呈して、この點甚しい不均衡を示めてゐる。尤も最近、この傾向が相當修正されつゝあるのは、若干なりとも彼等の人口に定住性を帯びて來たことを示めす

ものであらう。が、それにしても男子人口に對し女子人口が七〇%にさへ足らぬことは、今後においても一の社會問題を提起するものといはなければならぬ。

上述の觀察によつて明らかな如く、マライ半島の主要な住民は、マライ人、支那人及び印度人であり、他に少數のヨーロッパ人が特殊の地位を占めてゐる。然らば、これらの住民は地域的に如何に分布してゐるであらうか。まづ一表を示さう。

地域區人口分布（一九三八年末推計）

地域	海峽植民地		聯邦州		非聯邦州	
	實數(千人)	%	實數(千人)	%	實數(千人)	%
マライ人	三〇二	二二・三	六八七	三二・六	一、一九〇	六七・〇
支那人	八六一	六三・五	九二二	四三・八	四三二	二四・二
印度人	一五〇	一一・〇	四六四	二二・五	一三〇	七・三
歐洲人	一八	一・三	九	〇・四	二	〇・一
合計(その他を含む)	一、三五六	一〇〇・〇	二、一〇三	一〇〇・〇	一、七八一	一〇〇・〇

この統計によれば、海峽植民地及び聯邦州においては、外來住民の數は壓倒的に多數であつて、土着民たるマライ人は僅に四分の一乃至三分の一を占めてゐるにすぎない。殊に海峽植民地においては支那人は單獨でよく三分の二の割合を占めてゐるのであるから、平均的に云へば、この地方では三人に出合はせばうち二人までが支那

人だといふことになる。マライ人が過半以上を占めてゐるのは非聯邦州で、この地方では三人のうち二人までがマライ人である。

ところで、かくの如き地域的人口分布から豊かな意味を汲み取るためには、それぞれの地域のもつ經濟的意義を掴まなければならぬ。今これを端的に云へば、海峽植民地はシンガポール、ピナンを含む商業地域であり、聯邦州は錫の主産地であり且つゴムの栽培地である。實にマライの錫總生産の九七%が聯邦州の産出にかゝり、又、ゴム植附面積の四九%が聯邦州にある。非聯邦州がゴム植附面積において三〇%を占めるのは、ジョホールが非聯邦州に入つてゐるからである。ジョホールはゴムの栽培においては非聯邦州中格段に開發されてゐるのである。そこでこれらの商業地域または錫の生産ないしゴムの栽培において特に開けてゐる地域のみをとつて、民族別人口分布を見れば、事態は一層鮮明となる。

産業地域における民族別人口構成（一九四〇年六月現在推計）

産業地域	商業地區			
	マライ人	支那人	印度人	歐洲人
シンガポール	一〇・〇%	七七・九%	八・〇%	一・七%
ピナン	一六・九%	六七・三%	一三・一%	一・〇%
錫及びゴムの生産地	三二・八%	四五・〇%	二一・六%	〇・五%
合計(其ノ他ヲ含ム)				一一五

イムの主産地			
ジョーホール	四一九	四七〇	一〇三
			—
			一〇〇〇

即ち、これらの主要産業地域においては、外來住民の比重は愈々重く、商業地区では八〇%を越え、非聯邦州にあつてもジョホールでは過半が外來住民をもつて充たされてゐる。このやうに産業地域に於て外來住民の比重が大なることは、他の側面から見れば外來住民は之等の産業地域に集中してゐることを豫想せしめるが、事實もまた之を證してゐる。即ち各地域に對する民族の人口分布を見るに次の如くである。

各民族の地域別分布

	マライ人	支那人	印度人	歐洲人
商業地區(新嘉坡及びヒナン)	五%	三二%	一二%	五三%
聯邦州	三一	四一	六〇	三五
ジョホール	一四	一六	一一	—
合計	五〇	八九	八三	八八

マライ人はマライ半島における主要産業地域には半分の人口しか居住してゐないが、外來住民は殆んど九〇%近くがそこに居住してゐる。このやうに外來住民はマライの主要産業地域に集中し、且つその地域における人口構成に決定的に重要な地位を占めてゐるが、この人口分布に現はれた事實は決して偶然の現象ではなく、それ

ぞれの地域における産業の發達と表裏の關係にあるものと見なければならぬ。然りとすれば、マライの經濟開發は外來住民に依存してゐるといふべく、土着民族たるマライ人はその土地の開發には甚だ關係が稀薄であるといはなければならぬ。そして之は少なくとも過去においては事實であつた。然らば夫は如何なる事情に由來するであらうか。マライ人には抑も自分の古來居住してゐる土地を開發する能力も素質も本來的に缺けてゐるであらうか。

第二節 マライの先住民族

マライ人はマライ半島の原住民族ではない。別項スマトラの土着民族について述べる際言及するつもりであるが、スマトラのバレンバン地方は七世紀の頃より相當の文化を發達させ、近隣に勢力を振ひ、その影響は半島にも及んでゐたが、このバレンバン及びミナンカボウ地方を中心として發展したデユウトロ・マライは、十二世紀頃より半島に渡來するもの多く、農業をもつて半島の自然を開き、こゝに先住民族のそれとは全く異なる新たな植民の形式によつて、はじめて飛躍的な人口増加を齎す地盤をつくつた。かくて十三世紀の終の頃までには、マラッカその他に擴大し、近隣の先住民族を或は驅逐し、或は吸収して、遂に質量ともにマライ半島の人種主幹となるに至つたものである。

マライ半島の先住種族は、今日、山中未開の地に僅に殘喘を保つてゐるネグリト族、サカイ族及びジャクン族である。これらの種族もその渡來の時期並びに經路を異にするであらうが、これが研究は本調査の目的の外にある。

ネグリトは、ケグー及び上ペラにおいてはセマン(グ)、ケランタン及び東海岸地方ではバンガンといふ種族名によつて呼ばれてゐる。彼らは農耕を知らず、ために定着することなくして浮浪してゐる未開種族である。現在全く絶滅に近い種族で、一九一一年の調査の際においてすら、この種族の純粹なものは僅に百十三人と謂はれた。マライ半島のタイ領域内のものを含めて、彼等の總數は二千内外と見積られてゐる。

サカイ族はクラカンサルからセラシゴールに至る山間に住んでゐる。彼等は、ネグリトよりは大分進んでゐり、農作を行つてゐるが、移動耕作の幼稚なものである。狩獵は巧みで幾種類かの良のほかに特有の吹矢を利用して獲物を捕へる。又手工に秀で、諸種の籐細工品を作り、鐵の鋏さへ製作することを知つてゐる。恐らくその文化の發達程度は、ボルネオのダイヤ族に近似するであらう。

ジャクン族は南部バハン、ネグリ・スムピラン、ジョホールからリオ・ウリンガ諸島、スマトラ東海岸にかけて散在してゐるプロト・マライである。英領マライではビドウアンダ、ブランドスマントウラ、またはオラン・ベヌアなどの名稱で呼ばれてゐる。文化の發達は區々で概してサカイ族に近似してゐるが、中には定着生活を營

まないものも相當に多い。海岸に居住するものは漁撈に従事し、海に親しむことが多いために分布も比較的広く、混血の機會も多く、従つて社會的にも他種族の影響を多く被つてゐる。

さてこれらの先住種族は、上掲の人口統計の中では「其の他」に含まれ、總數三萬二千人にすぎない。マライの五百萬以上の全人口に對しては一%にも達せず、しかもその文化内容は他の優勢な種族に對してその比重を絶してゐるがために、質量ともに今日のマライ社會の構成内にあつて、政治的經濟的に能動しうるなんらの要素でもありえない。もし彼等が問題とされるとすれば、それは人種學または民族學の見地からのみであらう。

### 第三節 マライ人の性質

一九三一年の國勢調査によれば、マライ半島におけるマライの人口は一九六萬二千人となつてゐるが、この中にはマライ群島に居住する諸種のマライ族の半島への移住者を含んでゐる。ジャワ人の一六萬九千人、バンジャル人の四萬五千人、ミナンカボウ族の一萬四千人、プギス族の一萬人等がその主なるものであるが、少數ながらダイヤ族、バタク族、アチエー族なども含まれてをり、合計で三二萬人に上つてゐる。これらの種族のものも勿論マライ族ではあるが、併し今日マライ人といへばマライ半島のマライ人であり、又はかゝるものとして群島の諸地方に、例へばボルネオの沿岸地方に、ジャワのバタビア附近に、或はスマトラ東海岸地方に散在してゐるマ

ライ人のことである。これらのマライ人は嘗てジョホール王の支配下にあつたもので、その性質や能力において半島のマライ人とほぼ同様であると考へられる。

体格、マライ人は色浅黒く、身長は低い方であるが、四肢五體の釣合は比較的よく且つ頑丈であり、耐久力にも富んでゐるといはれる。彼等は小さつぱりした服装をしてをり、足の上にしつかりと立つてゐる。武器の使用も網投げ、櫂のさばき、小舟の操縦等には甚だ器用である。又、泳ぎも飛込みも巧みである。勇氣は大概の男子のもつてゐる程度のものもつてをり、かへつて南方において屢々見うけられる所のかの異常と思はれるほどの卑屈さが無い。否、むしろ彼等には外國人に對して威張る傾向さへある。

性質、マライ人の一般的性質として、マライ人研究家の一人は次のやうな特徴を擧げてゐる。

- (1) 魯鈍である
- (2) 懶惰であるが適應性もある
- (3) 貯蓄心が無い
- (4) 保守的である
- (5) 忠誠である
- (6) 道徳的である

(7) ユーモラスである

これらの特徴はマライ人の一般的性質を確に表はしてゐることに間違ひはないやうであるが、しかしこれらの諸特徴を觀念的に理解してこの型にはめてマライ人を見ることは決してマライ人の生きた姿を掴んだものとはいはれない。

彼等は懶惰であり、魯鈍であり、その上貯蓄心が無い。彼等は賭博が好きであり、めかし屋であり、浪費者である。しかし彼等が働くことが嫌ひなのは諸種の事情に基いてゐるのである。第一に土地が豊饒で容易に生活することが出来、しかも酷暑のため身體を安易に休める必要があるといふ自然的事情がある。第二に、これは彼等の性情の一であるが、彼等は努力して根氣よく働かうとする氣持よりは夢みるやうな冥想に耽る氣持を強くもつてゐる。稍もすれば彼等が仕事を放り出してぼんやりとしてゐるのはこれがためである。加ふるに第三として社會的事情がある。彼等は數百年の間に、彼等が決心し離脱と働いて財寶を貯めても貯めても、財寶を所有することとは權力者たちの注目を惹き忽ちその財寶を失ふに至るといふことを學んだのであつた。マライ人は哲學者であり、宿命論者である。彼等は世の中がこのやうであるなら、骨を折つて働いてみても仕方がないといふ結論を引き出してゐるやうである。

しかし、理由はともあれ、マライ人はこのやうに一般的には仕事を續けてやる根氣に缺けてをり、身體の活動

も不活潑であり眠つてゐるやうであるが、ひとたび彼等に仕事における興味を覚えしめんか、彼等は非凡の手腕を發揮する。彼等は努力し、よく堪え忍び、そして最善を盡して快活に元氣よく働くのである。彼等に興味を覚えしめるものは、危険を伴ふ狩獵とか冒険旅行でもよい。或は官吏の地位とか社會的名譽でもよい。もしくはよい賃銀とか面白いスポーツでもよい。彼等の努力を傾倒する目標がハッキリしてゐればゐるほど、疑ひもなく彼等は懸命の努力を惜しまず専念するのである。例へば、彼等を冒険旅行に伴はんか、彼等は完全に目覺める。諸君は彼等に勝る従僕を求めようとは欲しないであらうし、彼等以上に愉快な好伴侶をどこにも見出しえないであらう。もしくはまた、彼等を彼等の自由に放任しておかんか、彼等は屢々最も美しい精巧な藝術品をつくるだらう。彼等の作つたチュウタムまたはヂヤダムと呼ばれてゐる諸種の容器は、その地金に金銀及びエナメルにて作られたる象眼の精巧にして模様のオリジナルな點において、誠に驚嘆に値するものがある。

マライ人は單調な仕事を嫌ひ、目先の變化のある仕事を好むやうではあるが、生活様式とか社會制度については、むしろ甚だ保守的である。數世紀に亘るマライの悪政が、マライ人から進取の氣象を奪ひ去つたのであつて、彼等は革新的なことにはなんでも疑惑の眼をもつて眺め、原則として之に反對し、容易に之を採用しようとならないのである。かつて債務奴隸制が廢止されることとなつたとき、解放された或る者は、彼等が新に見出した自己の自由をもつて何をなすべきかを殆んど知らなかつたので、かへつて自己の自由の回復を後悔したといふ話

さへある。かういふ性質は確にマライ人の經濟生活に大きな暗影を投げかけてきた。彼等が自己の居住する半島の經濟開發になんらの役割をも演んずることなく、之から取り残されてきたのも、一つにはかういふ無氣力な保守的性質のためであつたと言へよう。

マライ人は忠誠で道義心に厚い。彼等は見知らぬ人には容易に打ち解けないが、自己の友人に對しては丁寧で深い同情心をもつてゐる。通常の知人としては、彼等は殷勤で無口である。二三の質問をするかもしれないが、自分では稀にしか答へない。併し、ひとたび彼等の信頼を得たなれば、彼等は全く腹藏をおかず、彼等の出来る凡ゆることを諸君に打明けるのを喜びとする。彼等が諸君と知り合へば、恐らく諸君から金を借りることは確かである。彼等は稀にしかその負債を返へさないであらう。しかし彼等は諸君のためなら如何なる仕事でもするつもりである。そして恐らく諸君は時がたつうちに自ら感ずるやうになるであらう。負債はむしろ諸君の側にあるといふことを。

祕密を守るといふことは、マライ人の間には知られない道德である。他人の不名譽や生死に關する祕密でも之を少數の人々にとどめておくことは出来ない。これは一見、彼等の忠誠の性質と矛盾するやうであるが、決してさうではない。祕密を洩らすことが彼等の忠誠に反すると彼等が信ずる事柄については、外來人はたとへ如何に貧しい者からも何んらの情報を得ることは出来ないのである。マライ人は口が輕いと非難される。それは事實で



ある。彼等は他人の秘密を喋ることが不道德だとは知らないからである。併し、それが彼等の忠誠に背くことだと知つたなら断じて口を緘して語らない。この點は彼等のラジャー（王）や首長が絶対の信頼をおいてゐるところの、大いに尊敬さるべき傳統である。

民族としてマライ人はその頭腦よりもヨリ多く心情によつて動かされてゐる。彼等は忠告を受け入れ、死を賭してまで信頼する者に従つてゆき、又は彼の命するところにゆくことを躊躇しない。が、これは彼等がさうすることが立派な行爲であると確信してゐるからであるといふよりは、むしろ、單に彼が好きであるといふ簡單な理由からである。

このやうに見てみると、マライ人は本來立派な素質をもつてゐながら、それが厚い膜で蔽はれてゐるやうに思はれる。優れた素質が時々厚い膜を破つて光を放つこともあるが、全體としては眠つたやうな無氣力状態によつて蔽はれてゐる。マライ研究家の一人はこのマライ人の無氣力状態の根因を次の四つの事情に歸してゐる。

- (1) 保守的な性質
- (2) 回教の偏見
- (3) 原始的な社會組織
- (4) 生理的根氣の缺如

これらの事情につき、こゝに詳しく説明することは控えなければならぬが、之を要約すれば、彼等は彼等の祖先が半島に移住植民した當時に明かにもつてゐた進取潑刺たる民族性を忘失してをり、既に上に指摘した如く凡ゆる革新的なものを拒まうとする保守主義の停滞性に陥つてゐるのである。彼等のこの澁んだ性質にびつたりと合つた生活は、彼等の唯一の社會組織ともいふべきカムボン（村）の生活である。太陽が東に上り西に沈むで日々が過ぎてゆくやうに、カムボンの生活も傳來の慣習に守られその軌道の上を眠むつたまゝ過ぎてゆく。それは安易で、平和で、牧歌的な生活ではあるが、進歩はない。なぜなら、進歩はカムボン生活の軌道を破ることを意味するからである。かういふ生活の上に、回教の偏見が押しかぶさつてくる。女子は教育をうけてはならない。高利のみならず、適正な利子でも、利子は取つてはならない。これでは女子の養育に當る母親が無學文盲である。勤勉の成果を資本として蓄積のしようがないのである。社會生活ばかりでなく、文化も經濟もたゞ今日を明日も繰返へす停滞があるばかりである。そして彼等は生理的にも根氣を缺いてゐる。マライ人の不活潑と無關心とは大部分が病氣のためである。病氣を治癒し榮養をもつと取るやうになれば、マライ人が少なくとも肉體的に活潑になることは、一部の實驗で立證されてゐるところである。

新時代の覺醒、マライ人の無氣力状態が右のやうな事情にあるとすれば、かゝる状態から脱却し生得の天稟を發揮しうることも決して不可能とはいはれない。この點において我々の注目に値することは、近時、マライ人の

間における中流階級の擡頭である。中流階級に屬する代表的なものはタンジョン・マリムで教育をうけた村の首長（ベンダール）と學校教師とである。そして彼等とともに優れた農業者たるマライ人がある。これらの人々の中にはゴム事業によつて又錫鑛區の權益の所有によつて相當の財産を築き上げてゐるものもある。又、諸種の資格において政府勤務に従事してゐるものもある。元來、マライ人の社會は庶民（農民）と貴族（ラジャヤ階級）とから成り、上下ともに上述の如き無氣力状態に眠つてゐたのであるが、こゝに新に中流階級が擡頭してきて、カムボン生活を揺り動かすはじめたのである。中流階級に屬する大多數の人々は、しつかりした性格をもち、實際的な能力もあり、常識も具へてゐて、先達ちとなるには充分である。儘に今やマライ人は中流階級の發展により彼等の新時代に進みつゝあるといふことが出来るのである。

アモク、なほマライ人の性癖の一としてのアモクについて一言しておかねばならぬ。彼等は現實の又は想像上の侮辱に對して甚しく神經過敏で、突如として逆上氣味に暴行を演んずる。それは實際發狂状態であり、屢々自己の家族を手はじめとし、彼の眼に觸れる者は男女、子供を問はず之を殺傷する。これがアモクであり、彼は之によつて彼の堪へられぬ侮辱感を癒やすとともに、又彼自身の生命を捨てるのである。アモクの原因は多くは女に關する間違ひであるが、たゞ實際上の侮辱ばかりでなく、彼の想像に基く侮辱感からもアモクに陥ることがあるだけに、この點マライ人の接觸には慎重の注意を拂ふ必要がある。

#### 第四節 生業より見たるマライ人の能力

マライ人の生業は主として農業である。それも米作農が歴倒的の大部分を占めてゐる。今マライ人が如何なる事業に従事してをり、且つ外來の他民族との比重關係がどうなつてゐるかの一般的状態を示めすために次の一表を掲げよう。この表は聯邦州における一九三一年の調査で、主要事業に従事せる主なる民族の數を示めたものであるが、マライ人の生業状態の一般を推測するには足る資料である。

聯邦州における主要民族別従業状態

職業	歐人	マライ人	移住マライ人	支那人	印度人
漁夫	1	5,715	307	7,291	56
米作農	1	78,009	11,113	1,038	1,892
ゴム園所有者管理人等	1,121	1,803	910	1,514	58
その他ゴム栽培に従事せる者	1	27,618	20,825	100,789	131,099
椰子園所有者管理人等	1	744	669	23	9
その他椰子栽培に従事せる者	1	4,262	5,982	1,256	8,010
雑多農業	23	18,168	7,381	16,115	9,883

錫所有者管理人等	四八	八	二二八
その他錫従業者	二八二	五四三	四六五
事業主、支配人	二四六	四七五	七〇、七〇四
販賣人、店員等	一四四	五四一	一六、八九四
		一〇五	一六、五七六
			三、七九〇

この數字はその表其まゝに正直に受けとることができないのは明瞭であつて、種々の手加減を加へなければ、これより精密な結論を引き出すことはできない。例へば、ゴム栽培業において比較的多数のマライ人がゴム園所有者等としてあげられてゐるが、ヨーロッパ人のゴム園や支那人・印度人のゴム園の少なくとも一部のものが巨大であるに對し、一般マライ人のゴム園が比較的小さいことを考へると、この數も無意味なものとなる。錫鑛についても、全般的には支那人が小さな鑛山の所有者管理者であるに比し、ヨーロッパ人の鑛山は大規模な株式會社の所有または支配の下に合併されて來たことを考へれば、全く同じことが言へるのである。しかしかやうに明瞭な保留條件もあるが、右の表はマライ人の他民族との比重關係における従業狀態の一般を示めてゐる。

米の生産は専ら個人經營で、意力とか精力とかを集中的に持續しなければならぬ仕事に堪えられぬマライ人にとつて最も適應してをり、事實、マライ人の仕事として最も多數である。そしてこの傳統的で大して利益もないマライ人の主たる生業は、これまでのところ他の民族も殆んど之を蠶食しようとしてゐない。米作をしてゐるかぎり、彼等はカムボンにおける偷安の生活を楽しんでゐられるのである。しかし、多數のマライ人が雜多農業と

いふ分類に入つてゐる如く、彼等の間にもその作物を種々雜多なものにしようとする強い傾向があり、稀には多少とも完全にコ、椰子又はゴムの栽培に移るものもある。

聯邦州において米作地二萬四千エーカー、コ、椰子栽培地二四萬エーカーであるに對し、ゴム栽培地は一五萬八千エーカーに達する。大きく分ければマライ人の小栽培者とヨーロッパ人の大ゴム園といふ風に、生産者を二大群に分けることが出来る。支那人や印度人は小規模より大規模に亘るゴム園をもつてゐる。通常、一〇〇エーカー以下のゴム園は主としてマライ人の手にあり、總計五六萬六千エーカーに達し、大部分は非常に狭い面積のもので、そこにマライ人は少數のゴムの樹を植ゑ、それから餘分の収入を得てゐるのである。その栽培方法は經驗と専門的な官廳の指導とによつて、進歩しつゝあるが、全般的に見て在來の放任主義的なもので、大ゴム園の特徴である組織的、科學的生産は全然見られない。この點、ゴムは比較的僅の注意で生長繁茂し、タツピング（切付け）もラテックス（樹液）の最初の處理も、大して熟練や經驗を必要としないから、むしろ原始的栽培方法に特に適した生産物であるといへる。しかしこれらの小さな栽培地は面積の三分の一を大して越えず、残りの約九五萬二千エーカーにおいては一〇〇エーカーを僅に越えるゴム園が最も多く、一、〇〇〇エーカー乃至それ以上の大ゴム園は六五萬五千エーカーを占めてゐる。かやうな大ゴム園經營にマライ人の参加してゐる數は殆んど取るに足らないものであり、之に反して他民族殊にヨーロッパ人の所有地が壓倒的な比重を占めて

ゐることは次の表が之を證してゐる。

民族別所有大ゴム園數

	歐人	マライ人	支那人	印度人
一〇〇〇—一、〇〇〇エーカー	三五七	二三	二八七	一一八
一〇〇〇〇エーカー乃至それ以上	二九六	—	一二	—

マライ人がゴム園の生産に参加してゐる數は、彼等がゴム園労働者となることを極度に嫌うために一層制限される。即ち一九三一年の調査では、ゴム園労働者は

支那人	一二七、八六三人
印度人	二〇三、〇三六人
マライ人	七、三七三人

であつた。しかもこの數字さへも眞實でないやうに考へられる。それはゴム園における人口として表記されたマライ人は、大多數が園内に住むことを許可されたもので、雇傭されてゐる者ではなく他方、支那人についてはその反對のことが屢々事實であるからである。

錫鑛山は、ゴム栽培の如く、單獨の個人または家族労働をもつて行ひうる小さな私的經營が不可能であるから、マライ人は事實上全然その生産に参加してゐない。鑛山の所有權は殆んど全部、ヨーロッパ人か支那人にあ

り、支那人は鑛山勞力をも大部分供給してゐる。一般の營利事業についても相當規模のものについては同じことが言へる。即ち、大會社は殆んどヨーロッパ人の手にあり、それに對して支那人と、程度は少いが、印度人とが力強く且つ巧妙に競争し、小事業においては支那人と印度人とが主となつてゐる。支那人及び印度人はまた、小商人及び職人の大部分を占めると共に、事業界の各方面に多數雇傭労働者として働いてゐる。

マライ人が商業に向はんとする傾向は未だ顯著に認められない。商業方面においてマライ人が最も多く進出してゐるのは海峡植民地であるが、こゝでさへ有業者二五名につき一名が商業に關係してゐる程度であり、マライ聯邦州においては商業に従事するマライ人は七〇人につき一人の割合となつてゐるにすぎない。

マライ人は農園労働者としてもたゞ少數しか働いてゐないのであるから、鑛山はむろんのこと、工場においても労働者として雇傭されるものは甚だ少數である。この點は、次節において支那人及び印度人と比較して數字的に考察するつもりであるが、豫めこゝに注意しておきたいことは、彼等が勞力の供給源たりえないことは、彼等の能力または素質の點に原因があるのではなく、主として彼等の心理または生活環境にあると考へられることである。恐らく近代的經營の組織的機械的労働は彼等の心理作用または生活感情と相容れないところであらう。これは上述の如き彼等の性情からして首肯しうることである。しかし彼等に近代的労働に適應する能力が生來缺けてゐると見るのは誤りである。例へば、彼等は自動車運轉手としては世界有數の適格性をもつてをり（所謂ビル

マ・ルートを走るトラックの廻轉手はシンガポールで募集された、又、ドレツチャを扱ふ鑛夫としては支那人と同様の優秀性をもつといはれる。彼等は伶俐であり、物覚えも早く、模倣もまた巧みである。興味が彼等の眠むつてゐる精神を目覚めしめれば、彼等は優秀な勞務者となりうる素質を有してゐるのである。これがためには何よりも、彼等の精神的並に物質的生活を蔽つてゐるかの無氣力状態を打破することが必要である。彼等の間に擡頭しつつある中流階級の發展が、内部的にこの役割を演んずるであらうことは、充分これを期待してよいが、我々としてもこのことを意識して彼らの覺醒に指導の根本方針を向けるべきであらう。

### 第五節 勞力供給源としての支那人及び印度人

マライ半島には、上述の如くマライ人よりも外來住民の方が遙に多い。一九三八年現在では、マライ人二一七萬九千人（一九三一年現在一九六萬二千人）に對し、支那人が二二一萬四千人（一七〇萬九千人）、印度人が七四萬三千人（六二萬四千人）もゐた。これはマライの經濟がそれだけ非マライ化してゐることを意味する。右のうち、支那人は（イ）龐大な勞役苦力群、（ロ）店主、商人、職人、官吏等の中産階級、（ハ）銀行、商社、鑛山、農園等を營む大小の資本家、（ニ）多數の小地主から成つてをり、或る調査報告が正當にも述べてゐる如く、マライにおける支那人は、『郷土、言語等の相違のために、又移動性や各種團體の對立抗爭のために、

主觀的にはむしろ意識されてはゐないが、客觀的には凡ゆる機能を兼ねそなへた一の社會を構成してゐる。それゆゑ、支那人はマライ經濟の凡ゆる部面に入り込んでゐるのみならず、主要産業においては次表の示めす如く、重大な割合を占めてゐる。

主要産業別マライ人口及び支那人人口（一九三一年）

	總人口	支那人	同上割合
農 水 産 業	一、一九六千人	三三一人	二七・一%
鑛 工 業	二四三	一八七	七七・一
交 通 業	一二四	五九	四七・八
商 業 金 融 業	二二二	一四七	六九・二

支那人は新客（新規渡航者）とババ（マライ出生者）とに分たれる。後者は支那人としての特質を喪失してゐるが、既に社會的地位を有する者が多く、勞力の供給源となるものはむしろ新客の方である。新客は現在でもなほマライ在住支那人の三分の二程度を占めてゐる。

出生地別支那人人口

年	マライ出生者	割合	マライ渡來者	割合
一九二一年	二五九千人	二二%	九一六千人	七八%
第四章 マライ民族事情				一三三

一九三一年

五三四

三一

一、一七〇

六九

右の如く、最近、支那人は若干定住性を増加してゐるが、しかし、華僑社會の本質的な特徴はなほその移動性にある。一九三二年から一九三八年に至る間、毎年平均二四萬の支那人が入國し、約二〇萬人が出國した。そしてその間の入國超過三三萬餘はマライ在住支那人の人口増加の實に七〇%近くに當つてゐるのである。

新渡航者は資産も社會的地位もなく、多くは家族を郷村に残し、マライ滞在中は絶えず歸國の意思を抱き、送金を續けるものが多い。彼等は勤勉で刻苦して資本を蓄積し漸次に經濟的社會的地位を築いてゆく。政治的勢力は官憲の壓迫により全然ない。しかし彼等の結社は嘗て「帝國內の帝國」と形容されたほどあつて、今日では當時の勢威はもはやないが、なほ強固な地盤を有してゐる。この支那人の自治的態度とイギリスが久しく彼等にマライ開拓の先驅的役割を負はしめたことの結果として、マライ政府の支那人に對する態度は永らく可及的に自由放任の方針であつた。又、或る程度さうせざるを得なかつたのであるが、一九二八年の移民制限法及び一九三三年の外籍人登録法によつて支那人の入國は事實上制限を受け、且つ政治的意味をもつた取締が勵行されることとなつた。外籍人登録法は外國籍移民を一律に取扱ひ、マライ内の政治、社會及び經濟の諸條件に應じ外國人の入國及び居住を管理ないし制限せんとする目的をもつ立法であるが、印度人は英國保護領の人民であるからその適用を受けず、その對象は専ら支那人であつた。従つて、本法は支那勞働移民に代ふるに印度移民をもつてせんと

するマライ政府の意圖を示めすものだと解されたのであるが、しかし事實においては、前にも指摘した通り、右の二制限法にも拘はらず、支那人の入出狀況はなほ可成りの入國超過となつてゐるのである。これは結局、マライにおける支那人勞働の必要が如何に絶對的であるかを物語つてゐる。

なほマライ在住の支那人は大部分が南支那人である。その出身地別統計は次の通りである。

出身地別支那人人口の分布(一九三一年調査)

	海峽植民地	聯邦州	非聯邦州	合計	割合
福建人	二八七	一四三	一一〇	五四一	三一・六%
廣東人	一四二	二二六	五〇	四一八	二四・五%
客家	五二	二二二	五五	三一九	一八・六%
潮州人	一一五	三三	六一	二〇九	一二・二%
海南島人	三六	三〇	三二	九八	五・七%
其他共計	六六四	七二二	三三四	一、七〇九	一〇〇・〇%

福建人と廣東人とが最も多く、マライにおける大企業または大資産家となれる成功者は多くはそのいづれかの出身者である。概して云へば、州別分布からも推測されうるやうに、福建人は手廣く農業を營み、又、工業及び商業に従事する者も多い。廣東人は錫關係者の大半を占め、又、栽培業に従事する者も尠くない。客家は廣東人

と同じくマライ聯邦州における錫鑛山労働者を多數供給し、潮州人は商業、ゴム工業、漁業に従事するものが多  
い。海南島人は都市では家事使用人、地方ではゴム園で働いてゐる。又、潮州人とともに漁業に従事する者も多  
す。

マライ在住の印度人は、一九三一年の國勢調査によれば、人口六二萬四千人で、そのうち五八萬三千人は南印  
度人、即ちタミール人（五一萬五千人）、テレグ人（三萬三千人）、マラヤリ人（三萬五千人）であつた。その他  
にはバンチャツプ（三萬一千人）が主なるものである。

南印度人の中には市街地における小賣人や貿易商となつてゐるものも相當あるが、その大部分のものは苦力階  
級であり、多くは労働目的のためにイギリス人によつて輸入され、數年後には印度に歸還する。従つて、定着性  
がなく、マライの事態には無關心であり、生活も向上しない。この點、印度人がマライ社會の全面に根を下して  
ゐるといふ舊マライ政府の見解は事實に反してゐる。世界恐慌期を含む一九三一年より一九三六年の間に、入國  
者三二萬六千人、出國者三六萬三千人、差引三萬七千人の出國超過となつてゐる。事實、印度人の農園労働者の  
滞在期間は平均二、三年にすぎない。彼等はベラ州の錫鑛山に多數働いてゐるし、土木局及び都市に使役せられ  
てゐる労働者は殆んど全部が南印度人の中より募集せられる。しかし、この南印度人をマライ半島に齎らした最  
も主なる原因はゴム栽培事業であつて、現今、農園生活者總數の七一・六%は彼等よりなつてゐる。之に反して

バンチャツプ人は大抵の場合、軍事的又は半軍事的職業（巡警等）に従事せんがために渡來せるもので、年月を  
重ねるとともに漸次にその郷里より婦人と呼び、マライに定着し、或は農民として、或は牛車の挽子として、又  
は番人もしくは之に類似の職業に従事して生活を営むに至るものが多い。  
又、金貨をとするものも多く彼等である。

マライにおける一九三八年末の労働人口は四七萬一千人であつた。これは農園（主としてゴム及びココ、椰子）、  
鑛山（主として錫）、及び工場（主としてゴム工業、鳳梨罐詰工業、錫精鍊業、搾油工業）、並に政府部局（土木  
局、聯邦鐵道を主とし衛生局、公共團體を含む）に従事する勞務者である。  
今、その地域別人種別の分布を見るに次の如し。

地域別人種別労働人口（一九三八年）

地域	海峽植民地		聯邦州		非聯邦州		合計	構成割合
	千人	%	千人	%	千人	%		
南印度人	四〇・五	一六・五	七・〇	二七・七	五七・七			
支那	四五・九	一六・八	三〇・一	一四・四	三三・五			
ジャバ	三・〇	二・五	八・四	一・二	二・九			
マラ	四・八	八・〇	一四・六	二七・四	五・〇			
その他	二・二	三・五	一・八	七・四	〇・九			

合計 九九・五 二四八・三 一一六・〇 四七〇・七 一〇〇・〇 一三八

これに依れば、當然豫想されるやうに、南印度人と支那人とが労働人口の歴倒的大部分を占めてゐる。マライ人及びジャワ人も非聯邦州では若干重要な地位を占めてはゐるが、全體としては、未だ問題とするに足りない。たゞ豫想外のことは、南印度人が労働人口としては支那人よりも遙に多数を占めてゐることである。全體としては、ほゞ五對三の割合であるが、聯邦州及び非聯邦州では五對二の割合にさへなつてゐる。しかし、支那人のこの數的劣勢も、内容的に業種別的觀察を加ふれば、そこに異つた現象を生ずるのである。

業種別人種別労働人口(一九三八年)

(單位千人)

	農園	鑛山	工場	民間計	政府部局	合計
南印度人	二一四・六	七・一	八・二	二三〇・〇	四七・六	二七七・六
支那人	五九・三	三三・八	四〇・六	一三三・六	一〇・九	一四四・五
ジャワ人	九・四	一・三	〇・七	一一・四	二・五	一三・九
マライ人	一五・四	三・二	一・四	二〇・〇	七・五	二七・五
その他	一・三	一・八	〇・六	三・七	三・八	七・五
合計	二九九・九	四七・二	五一・五	三九八・五	七二・二	四七〇・七
雇傭場數	三、九三七	四四三	八五五	五、二三五	—	—

本表によれば、南印度人は農園と政府部局において最も多数を占めてゐる。即ち、農園労働者の七二%、政府

部局の六六%が印度人からなつてゐる。印度人が農園に多いのはゴム栽培労働が専ら印度人によつて提供されてゐるからであり、政府部局に多いのは、マライの場合と同様、イギリスの方針の結果である。之に對して支那人は鑛山(七一%)及び工場(七九%)において歴倒的多数を占めてゐる。これは當該事業に對する支那人の素質と能力とが、之を必要ならしめてゐる結果である。なほマライ人について云へば、それ自身としては未だ重要な役割を演じてゐないけれども、ジャワ人に較べれば、その地位は遙に重要であり、特に最近數ヶ年間に於ける進出には注目し値するものがある。

マライ人労働人口の増加

	農園	鑛山	工場	政府部局	合計
一九三五年	一〇、〇二〇人	一一三人	二三八人	三、二八五人	一三、八五六人
一九三八年	一五、四〇〇	三、二〇〇	一、四〇〇	七、五〇〇	二七、五〇〇

ジャワ人労働人口の増加

	農園	鑛山	工場	政府部局	合計
一九三五年	九、二七六	一、二五三	八九三	二、三六七	一三、七八九
一九三八年	九、四〇〇	一、三〇〇	七〇〇	二、五〇〇	一三、九〇〇

こゝには手許にある資料の都合上、三年間といふ短い期間しか觀察しえないが、それに依ると、ジャワ人労働



者はその間に殆んど全くなんらの變化も示めておないうに拘はらず、マライ人は就中鑛山及び工場において驚くべき増加を示めてゐる。觀察期間が短いから速断はできないが、これはマライ人の勞働能力に對する將來性を示めせるものと考へたい。

## 第五章 スマトラ民族事情

### 第一節 人口と民族

スマトラ（面積四十七萬三千平方呎）は世界第三の大島である。第一がニウギネアであり、第二がボルネオであり、第三がスマトラである。これに八二五萬五千人の人口が住んでをり、一平方呎當り一七・四七人の割合である。ジャワの一平方呎當り三一五・六三人に較べれば、人口は甚だ稀薄であると言はねばならぬ。恐らくスマトラでは五、六千萬の人口は容易に之を養ふことが出来るであらうと謂はれてゐるのも過大ではない。ところで右の人口の民族的構成は次の通りである。（一九三〇年國勢調査）

土 著 民	七、七四五
支 那 人	四四九
歐人(日本人を含む)	二八

支那人はジャワ及びマドウラには五八萬三千人いたのであるが、それに較べるとスマトラにゐる支那人の数が

割合に多いことがまづ留意されねばならぬ。

次にスマトラの土着民族の主なるものは次の如くである。

北スマトラ人	八九八 <sup>千人</sup>
アチエー族	八三一
ガヨ族	五三
アラス族	一四
パダク族	一、二〇八
ミナンカボウ族	一、九八九
南スマトラ人	一、三七二
バレンバン族	七七一
ランボン族	一八二
その他	四一九
スマトラ四方諸島人	二二〇
ニヤス族	二〇二
メンタウエー族	一八
スマトラ原始諸民族	一六
マライ人	一、二三二

このほかなほジャワ人が八八萬一千人、スンダ人が一一萬四千人ほど居住してゐる。ジャワ人の移住が相當多

數に上つてゐることは、支那人の場合と同様にまづ留意されねばならぬ。が、それはいづれ後に考究することとして、以上の人口構成より見れば、スマトラにおける原住民族の主要なものはアチエー族、パタク族、ミナンカボウ族、南スマトラ族、マライ人であり、それに支那人とジャワ人とが來住したものであるといふことが出来る。他になほ多くの種族があるが、それらは人口も比較的少ないし、又いづれも未開の状態にとどまつてをり、民族能力の見地からは之を無視して差支へないのである。なほ右の原住民族の中、パタク族はプロト・マライ系であり、ボルネオのダイヤ族と同様であり、他のアチエー族、ミナンカボウ族、南スマトラ族はデユウトロ・マライ系即ち開化マライ族である。

## 第二節 パタク族

パタク族はタバヌリ州及びスマトラ東海岸州の山地に居住する。人口一二〇萬を越え、スマトラでは有力な一民族である。パタクなる名稱の由來は不明であるが、西曆七世紀頃から既に用ひられてゐた。恐らく回教徒のつけた輕蔑の綽名であつて、豚を食ふ人といふ意味であらう。しかしパタク族はこれを光榮ある種族名に採用し、自らをさう呼んでゐる。

パタク族はプロト・マライ系であるから、文化の水準は一般に低い。既に古代において彼等はヘロドタスによ

つて食人種として紹介され、その悪癖は後年アラビア人によつても記録され、又マルコポーロによつても記述されてをり、現在は大いに減少したとはいへ、なほその慣習は絶無でない。印度群島の原住民の間には首狩りの慣習が行はれることはさまで珍らしいことではないが、食人の慣習は僅にニウギネアにおいて見られるのみであるから、バタク族はニウギネアの原始民族と同様の未開種族と見做されがちである。

しかしながら、バタク族は古代においてヒンヅー文化の影響を著しく受けてをり、水稻耕作、馬犂、獨特の住家様式、象棋、木綿、糸車、ヒンヅー語、書き方、宗教觀念等を學んでゐる。彼等は文字を書くことが出来、時の計算も出来、收穫曆と月曆とをもつてゐる。かゝる文化の程度から云へば、彼等は同じプロト・マライ系のポルネオのダイヤ族よりは開化してをり、むしろ比律賓のイゴロット族に近いと言はなければならぬ。たゞ回教徒の影響はジャワよりもスマトラに對して早く波及したので、これがヒンヅー文化のバタク族に對する感化を中絶せしめ、遂にバタク族をしてより高度の文化から隔絶させる結果となつたのであつた。

バタク族はその言語によつて幾つかの部族に分れてをり、トベ、カロ、ダイリ、マンダイリン、バクバク、アノコラ等がある。しかし言語學的にも人種的にも實際は大きく二分することが出来、一は中部ダイリを含むダイリ、バクバク、カロ等であり、他は異つた方言を使用するトベ族である。トベ族はトベ湖の東岸に住み、トベ語はあらゆるバタク語の根元であると云はれてゐる。

**生業** バタク族の生業は原始社會としては豫想外に多様であるが、しかし鍛冶職とか樵夫とか一定の職業を有するものも例外なくすべて農業に従事してゐる。米が最も重要な農産物であり、水稻陸稻ともに耕作される。米については玉蜀黍であり、米と玉蜀黍とが彼等の主食物である。その他、甘藷、タロ芋、薯蕷、莢豆、その他種々の蔬菜類、又、珈琲、烟草、椰子、肉桂、甘蔗、藍等も栽培される。しかし彼等は自分たちの需要分だけを栽培するので、輸出は殆んど行はれない。

農業に次いで重要な生業は家畜の飼養である。バタクの馬、特にカロ高地の馬は有名である。馬は自分たちの乗用としてではなく、賣却用に飼養するのである。高原地帯には水牛及びその他の家畜が無數に飼育されてゐるが、就中、ハダシラワスが最も盛んである。トベでは東洋の一般的習慣に似ず牛乳が飲用されてゐるが、バターとかチーズは製造されてゐない。回教徒や印度教徒を除く部落では、豚の飼養が収入を得る手段として普通に行はれてゐる。

**食事** バタク族の食事は晝と夕と二回である。朝は單に一握りの米を食するにすぎない。主食物は米と玉蜀黍である。タロ芋は貧乏人の食物とされてゐる。彼等の食事には本式の肉や魚の料理は行はれない。それは祝祭の場合だけである。しかし、彼等は蛙、野鼠、昆蟲の幼蟲、白い羽蟻等をはじめ、象、熊、虎、猿、蛇すらも嫌がらず食用とする。一旅行者の言によると、如何なる動物であらうとも、體に肉をもつてゐるかぎり、バタク族が

食べないものはないといふ。とはいへ、人肉は決して祭禮に供されるでもなく、況んや食卓上に本式の料理として取扱はれもしない。食人は彼等の宗教的迷信と結びついた復讐の一樣式であり、(イ)平民が酋長の妻と姦通した時、(ロ)裏切者、間諜、敵國への脱走者等が捕へられた時、(ハ)敵國人が武裝のまま捕へられ、しかも村人に對して武器を行使した形跡ある場合に行はれる。それ以外には、食人は公然と行はれることはない。

バタク族は棕櫚酒を作つて飲むが、酔ふほどは飲まない。烟草は甚だ愛用し、女は喫まないが、子供まで喫煙する。喫煙用のトベの銅製パイプは獨特のバタク工藝品である。このパイプと一日中喫煙する習慣とはトベ高地の住民の特徴であり、ジャワ人のクリス、蒙古人の馬と同様に彼等の生活から切離すことの出来ない存在である。パイプは普通五寸以上の銅製のものであり、酋長は三尺乃至五尺位の銅製パイプを數本所有してゐる。パイプ製造用の銅は貿易によつて入手したもので、トベの一地方で之をパイプに製造するのである。

衣服、バタク族の衣服はサロンをもつて下半身を被ひ、上半身は他の布をもつて被ふのが常である。現在は代りに色々のジャケツが用ひられるやうになつてゐる。布帛は土産の棉花を家庭で紡いで織つたものであつて、色は青、黒、赤等で、黄色は海岸地方でのみ用ひられる。カロ族とトベ族の區別は一目で分かる。カロ族の顔色は青(戦時は暗紅色)であり、トベ族のそれは褐色である。婦人たちは今もこの習慣を踏襲してゐる。又、カロ族は男女とも頭巾を被るが、トベ族の女は何も被らずに歩く。

住居、バタク族は大きな部落を作つて生活してゐる。部落の周圍には堤防の如き低い土塀を繞らし、その内側に竹藪を作つて周圍をとり圍んでゐる。この圍ひの中に普通六、七軒の住家と幾つかのソボ(會議所)とがある。又、穀倉があるときもある。そして一軒の住家には普通八家族位が住んでゐる。

バタク族の家屋は方形で構造は頗る堅牢であり、庄下の木材の組合せの如き、神樂堂の床下を想はずものがある。床下の高さは概して一・七五米、前面は棟までの高さ約八米半を有してをり、屋根は高い棟の一線から鞍形に彎曲しつゝ鞍形に垂れた軒は著しく前方に突き出し、この突出した廂は屋根の中腹部と下端とに二重に繞らされ、その廂裏とこれに接續する壁部は美しい彫刻をもつて覆はれてゐる。全體としてその外觀は悠容迫らざる貴族的な風格と藝術的な美觀に富んでをり、バタク部落の訪問者を感嘆せしめるが、一步屋内に入ると、室内の暗さの亂雑と不潔のためまるで物置同様な状態に再び一驚せざるをえない。

ソボは部落の會議所である。併し北部地方のバタク族では異性間の交際を嚴格に取締るため、十歳以上の青少年と鰥とは夜間強制的にソボに宿泊せしめられる。この點から云へばソボは青少年の宿泊所でもある。ソボはその廣さ立派さにおいて酋長の家を凌ぎ、特に屋根に施された木の葉や花模様の彫刻が立派である。ソボの周圍の壁は三尺乃至五尺の高さであり、従つて四方とも開放されてゐる點で酋長の家と異つてゐる。

性格、バタク族とニアス島の土人とは好戰的なことにおいてスマトラの住民中第一である。バタク族は他の未

開種族の場合と同様に、未知の人は即ち敵と心得てゐるため、外界との直接の交渉は回避されてゐる。他國人を回避せんとする要求とバタク族相互間の疑心暗鬼とは、部落と部落との間に道も作らなければ橋も架けないほどに甚しいものがある。この村落相互間の交通機關の缺如のため、奥地のバタク族は殊に鹽に不自由してゐる。土人たちは人を喰ふといふ評判すらも多分に自己防禦の手段に用ゐるふしもある位である。他國人を喰ふといへば外國人が近寄らないからである。

宗教、バタク族の宗教は大部分が原始宗教である。しかし一八一五年のバドリ戦争後には、最南部に居住する全人口の三分の一は回教に歸依してをり、又、一八六〇年から今日まで傳道を續けてきたドイツ宣教師によつて八萬人がキリスト教徒となつてゐる。キリスト教徒となつた土着民は今日使用人として従業してゐるものもあるといはれてゐる。

以上、バタク族の生活様式を概観したが、これによると彼等は専ら自然經濟と封鎖的な部落生活との中に閉ぢこもつてゐて、近代的諸能力は未だなんら發達してゐないと言はなければならぬ。やゝ注視すべきものとしては家畜、特に馬の飼育があるのみである。彼等を近代的な仕事に訓練しうる日は、なほ相當遠き將來に屬し、當分の間は彼等を自然兒として放置するほかないであらう。

### 第三節 アチエー族、ガヨ族及びアラス族

アチエー族はスマトラの北端アチエー州一帯に居住する。人口八三萬一千人を算へる。この地方は、元來、西方からの勢力が南洋群島に侵入するにあつた際の重要な關門であるがため、眞先きにその根據地がおかれた。イスラムの勢力が東漸してきたとき、最初のスルタン王國を建てたのもこの地（コタラジャ）であつた。アチエー族はそのため今日も熱烈な回教徒である。

現在のアチエー族は雑多な混血民族である。元來はガヨ及びアラス兩族に近いものであつたと想像されるが、純粹なアチエー族は甚だ少數であつて、山中深く居住してゐると云はれる。それで大部分のアチエー族は、マラツカ及びパダン高地からの土着民、バタク地方及びニアスから、異教徒（これは多く奴隸として來たものである）、並にジャワ人、ヒンヅー人及びアラビア人等との多様の混血によつて複雑化してゐる。

武勇、アチエー族は外國人に對して猜疑心を有し深く馴染まないところがあるが、性質としてはマライ人よりも快活で活動性に富んでをり、且つ比較的従順であり、色は黒い方である。しかしアチエー族を最も特徴づけてゐる性質は、彼等が勇敢で敢闘の精神をもつてゐる點である。一八七二年オランダの侵略に遇ふや、アチエー王國は國運を賭して敢然之に抵抗したが、交戦二年にして王都コタラジャは陥落した。しかしアチエー人は王を

擁して山地に退き爾來一九〇七年に至るまで三十有餘年、流血の慘を嘗めつゝ飽くまでオランダの暴虐に反抗しつゞけた。所謂アチエー戦争がこれである。聰明なるイギリスの總督ラッフルズは、夙にアチエー人の武勇について警告してゐたが、アチエー戦争はオランダの軍隊及び戦費の莫大な犠牲においてアチエー人の武勇を世界に示めたものであつた。アチエー人の武勇は慥に彼等の慍悍なる民族性に基くところであるが、しかしまた彼等が熱烈なる回教徒であり、且つ南方には見られないほど嚴格な戒律を守つてゐる民族であるといふことが與つて關係してゐると思はれるのである。スルタン王を奉じウラマ（回教神學者）の采配を振ふところ、アチエー人は熱狂して異教徒オランダ人に對する神聖戦争（ジハッド）に勇往邁進して生命をスルタンに捧げて悔いないのである。アチエー戦争平定して三十年後の今日、アチエー人はなほスルタンの死を信ぜず、その心底にはオランダ人に對する敵愾心を秘めてをり、オランダ人將校の刺殺されるものに珍らしくない。今日もなほ彼等の間にはオランダ人將校を刺さねば天國にゆけぬとの迷信さへ行はれてゐるといふ。

**生業** アチエー族は本來農耕民族であり、米作が彼等の主たる生業である。甘蔗も栽培され、又胡椒栽培も重要な産業となつてゐる。米作は水稻陸稻ともに行はれ、サワーはダムから引き込む雨水によつて灌漑されてゐる。植付は女によつて行はれるが、野良仕事は男子によつて行はれる。食事は通常二回で、マライ人と同様、米、野菜、魚を食し、肉類はたゞ祭禮のときに食するだけである。

**衣服** アチエー族の服装も別に特徴的なことはない。一般に男女とも細長い股衣を穿ち、男子はその上に短い腰巻を、女子は長い腰巻を用ふる。海岸地方の住民は更にジャケットを着てゐるものが多い。男子は外出の時は鋭利な短劍を腰間に帯してゐる。女子は足首に金またはその他の金屬で作つた輪をはめ、貨物を頭上に載せて運ぶ風習がある。

**家屋** アチエー族の家屋は一般に一樣の外観をしてをり、六呎の高さの十六本の杭の上に立つてゐる。家屋は三つの部分からなり、表の間、寢室、裏座敷に分れてゐる。表の間は來客の接待、宗教上の儀式、集會等に用ひられ、私用には殆んど使はれない。裏座敷は女子の日常の仕事部屋であり、また料理室でもある。寢室は最も神聖な場所とされ、最も奇麗に飾られてゐる。家具としては、裝飾物や掛布を除いては、長椅子、櫃、菓箱等があるだけで、表の間の床におかれてゐる。祭禮の日には表の間の床にはカーペットが敷かれ、來客には敷藁座が與へられる。

**村落生活** アチエー族の村（ガムボン）には民家のほかにモスク（回教寺院）とミウナサー（共同集會所）とがある。大アチエーにおいては各村毎に必ずしも自分たちのモスクをもちえなかつた。といふのはモハメットの法典によれば、金曜日の勤行にはその地方の少なくとも四十人の自由な成年男子の住民が參會するのだから開催されえないからである。そこで回教がアチエーに根據地を築いたとき、幾つかの（最初は大概四つ）の村を

結合してモスクを維持しうるが如き地域的單位をつくる必要があつた。この地域的單位をアチエーではムキムといふ。モスクはムキムを構成する村々の間の平地につくられる。それゆゑ、モスクは村の外にあり、且つミナレット(回教寺院の尖塔)——この塔上より勤行の始まるのを知らせる)がないから、アチエー人は太鼓をたいてその代りとする。太鼓は椰子の木からつくられ、日本の太鼓の如く、割り抜いた側に皮を張つてある。

ミウナサーは回教渡來以前の制度で、東印度の諸民族に共通な村の共同集會所のことである。回教渡來とともにこの共同集會所は司祭者の家となり、回教名でミウナサーと呼ばれることとなつた。ミウナサーは通常林の中にあり、普通の民家の如く造られてゐるが、窓がなく且つ内部が三つの室に分れてゐない。ミウナサーは今日では諸種の一般的な目的に利用されてゐるが、「男子の家」たることは依然として變りない。即ちミウナサーは、

(イ) 男子が夜を過す家として用ひられる。以前は成人したすべての青年が日没後集る場所となつてゐたが、この慣習は現在では廢れてゐる。

(ロ) 司祭者の家として用ひられる。併し現在では回教の齋食の月(回教曆の第九ヶ月目ラマダン月)を除いてはこの目的のために用ひられることは少ない。

(ハ) 社交場として用ひられる。村の男子は一日の仕事が終るとこゝに集る。その集りの主なる目的は罪のないむだ話である。賭博や闘鶏は長老の喧しくない村では行はれることもある。

(ニ) 日中は學校として利用される。こゝで青年はコーランの言葉を教へられる。

(ホ) 村の宿泊所としても用ひられる。他の村から來た未婚の男子はこゝで夜を過すことになる。

(ヘ) 大アチエーでは結婚の契約がこゝで取り極められる。

このやうにミウナサーは公共の集會所ではあるが、村の會議所ではない。村の會議所はアチエーではバレ・ミウナサーと呼ばれ、村の土壁の外にある開け放しの建物である。これはミウナサーの附屬物として利用され、村全體の共同の問題は通常このバレで討議される。村會所をバレ、バレイまたはバライと呼ぶことは、東印度に廣く行はれてゐるところである。

政治的社會構造 オランダ人の侵入以前におけるアチエー族の政治的社會の構造は、最高位のスルタン、サギ(土侯の聯合)の首長、ウリエバラン(土侯)、イメウム(ムキムの首長)、ガンボン(村)の頭目といふ權力系統によつて形づくられてゐた。

元來、アチエーは專制的なスルタンの下に統一された王國ではなかつた。アチエーの黄金時代(一六〇七年—一六三六年)においてさへ、有名なスルタン、イスカンドル・ムダ王は政治的權力者としてよりは、むしろ海港王と見做されねばならない。その盛觀と光榮とは大部分が彼の通商獨占に基いてゐた。それゆゑ、海港からの收入が減少した十七世紀末にはスルタンの權力は全く地に墜ち、一八七三年にオランダ人がアチエーに侵入したと

きには、『汚い半分壊れた王城に國王は居住してゐたが、彼はその臣民の支配を完全に失つてゐた。……如何なる事情から見てもこの國王は全群島のうち最も貧乏な最もみじめな支配者であつた』。しかしスルタンのみじめな政治的狀態に拘はらず、彼は依然として宗教上の尊信の的であつた。ラツフルズの言葉を藉りれば、スルタンは『至るところその人民から尊敬されてはゐたが、服従するものはどこにもなかつた』。この神聖なる王といふ觀念はバタツク族の中にも、その他スマトラや群島の中にも見出されるところで、必ずしもアチエー人に特有のものではない。併しオランダ人はアチエー戦争においては、確にスルタンのみじめな政治的狀態をのみ見て、スルタンがなほ人民の神聖なる王として尊信の的となつてゐる半面を見落してゐたのだ。オランダ人がアチエー人の意外にも頑強なる抵抗に遭遇したのはこれがためである。併し、オランダ人が王城を占領したとき、スルタンはビディエに遁れた。そしてアチエーのスルタン王の榮光の最後の影が消えた。オランダはアチエー戦争の終末をもつてスルタン王制を廢止した。

スルタンの直轄領の外は、大アチエーは三つのサギ Sagi (州) に分れてゐた。各のサギはそれが最初に包括してゐたムキムの數に従つて呼ばれた。それでサギの名稱は二十二ムキム、二十六ムキム、二十五ムキムと呼ばれてゐる。サギの發生は明瞭でないが、恐らく攻守同盟を維持しようとしたウリエバラン(土侯)によつて形成されたものと信ぜられてゐる。三つのサギの各々はその中の最も有力なウリエバランによつて指導され、かゝ

る首長のみが聯合體にとつて重要な事件に發言權をもつてゐた。併し他のウリエバランはその領土については、サギが出來なかつた以前と同様に之を統治することが出來た。サギの盟主の地位は世襲であつた。サギの盟主が如何に強力であつたかは、アチエー戦争當時、二十二ムキム聯合國の盟主、バンリマ・ポリムはスルタン王城クラトンが陥つた後もなほ一萬一千のオランダの大軍を相手にビディエにおいて勇戦し、敵を一步も近づけしめなかつたことに見て明らかである。

最初のうちは、三つのサギの首長がスルタンを選んだ。彼等は自分たちの欲する人物を選んだが通常は死んだスルタン王の一族から選ぶことになつてゐた。しかし時には外來人が選ばれたこともある。選出された者はサギの各首長にそれぞれ五〇〇ドルづつ「結婚の贈物」として贈與しなければならなかつた。そして新なスルタンの即位式は、「王子とその土地との結婚」として祝福された。しかしこの制度は當然濫用されることとなつたので、後には他のウリエバランも選舉に参加することとなつた。オランダの統治になつてからは、大アチエーは十五のウリエバラン地區に分たれ、地區は更にムキムに分たれ、ムキムはガンボン(村)に分たれたので、サギの首長は認められないこととなつた。

ウリエバランは往古からの現實の國民であり、領土的首長であつた。彼等は自己の領土における統治者であり、裁判官であり、軍隊の統帥者であり、最高の権力者であつた。彼等の権力はスルタンのそれよりも古く、王



位就任に基くものではなかつた。ウリエバランはその國民からはテウク *teuku* (*my lord*)、テウク・ポー *teuku po* またはテウク・アムボン *teuku ambon* なる稱號をもつて呼ばれ、外國人は之をラジャ(王)と呼ぶ。彼等は家畜の屠殺されるとき及び土民法の裁判を行ふとき、課税を徴収するほか、なほオランダから俸給を受けてゐる。

ウリエバランとガンボン村政との間には、なほイメウムがある。イメウムは行政區域たるムキムの首長である。元來、イメウムはムキムにおいて行はれる金曜日の勤行の宗教上の司祭者であつたが、現在では彼等の地位はその性質において俗界のものとなり、行政地區としてのムキムの世襲的首長となつたのである。そしてかゝるものとして、彼等は小ウリエバランであり、命令の傳達施行に當る役人として利用されることとなつた。オランダ政府もまたこのムキムの首長の地位を確認し彼等を行政官吏に任命した。

以上、アチエー族の生活様式、就中、政治的社會生活について略説してきたが、これに依つて見るに、彼等には近代的仕事に對する諸能力または素質について特に見るべきものはない。しかし彼等の熱烈なる宗教心と、政治的社會生活に現はれる君主に對する彼等の忠誠とは、彼等の生活の特徴づけるものである。それはなるほど未だ一國民としての團結にまでは至つてゐないけれども、之に彼等の勇武の氣質とが結びつくときには、アチエー戦争におけるやうに彼等に強力な勢力を形成するのである。そしてアチエー族に對してはこの點が最も留意される。

なければならぬのである。

なほ、ガヨ族及びアラス族は東印度中最後に發見された種族で、一九〇〇年以前においては殆んど世に知られてゐなかつた。主としてアチエー州のガヨ及びアラス地方に住んで居り、米作をもつて生業としてゐる。性質は比較的温順で、文化はアチエー族ほど進んでゐないが、生活様式等アチエー族のそれに異なるところは殆んどない。

#### 第四節 ミナンカボ 族 *minangkabou*

ミナンカボウ族はスマトラ西海岸州に住み、本據はパダン高地であるが、パダン港に居住するものは特にパダン人と稱せられ、パダン商人の名は華僑商人と匹敵するものとして著名である。スマトラ東海岸州は、後に見る如く、白人産業地帯として開發されてゐるが、西海岸州は殆んど土着民農業をもつてその繁榮を保持してをり、土着民本位に開けた地方である。してみれば、西海岸州の開發は主としてこの地方の土着民の能力に歸せられねばならないのであつて、既にこの點からしても本州の住民たるミナンカボウ族は重視されねばならない。

發祥、ミナンカボウの傳説によれば、ミナンカボウ王國はアレキサンダー大王によつて建設されたと傳へられてゐる。しかしミナンカボウの名が始めて史上に現はれたのは、一三六五年のことであり、ジャワのマジャパ

ト王国 朝貢する一地域としてあつた。

ミナンカボウの名は、傳説によると、ジャワ人の侵入に際してミナンカボウの王は Karabou (水牛) を闘はしその勝敗によつて事件を解決しようと提案した。そしてミナンカボウ族は十日間水牛に食物を與へず之を充分飢えさせておいて、その鼻先きに鋭い鐵の鉤をつけてジャワの水牛に突進させた。ミナンカボウの水牛はこれでもなま勝利をえた。これによつてこの地方とその住民を *minang Kabau* (勝利の水牛) と呼ぶことにしたといふ。この説は今日も土着民の間に深く信ぜられてをり、水牛は國民團結のシムボルとなつてゐる。併し、ファン・デル・トウク Van der Tuuk はミナンカボウの名は *pinang kabhu* に由来するといふ。これは古語で發祥地 *original land* の意味である。ミナンカボウが事實マライ人の發祥の地であるとされるところから見るとこの説が或は正しいかもしれぬ。

ミナンカボウ起原説 ミナンカボウ族がマライ人種の本種族であるか否かについては、異説が多い。しかし、ヒンヅー時代、スマトラのヒンヅー王国がなほ強大であつた時代に、ミナンカボウ族は約一五〇萬の人民が故郷にとどまつたが、ほゞ同數のものが最初はマライ半島に植民し、その後は群島の各地に移住した。一二七六年回教に改宗したマラッカ王国もこの植民者の王国である。マライ半島に移住した植民者は急激に發展し、故郷のミナンカボウを凌駕する勢を呈するに至り、マライ人の中心地はかへつてこの新マライ國に移つた。デュウトロ・

マライは、すなはちこれで、マライ半島のマライ人をはじめ群島の各地に散在するマライ人はいづれも直接間接にミナンカボウを發祥の地としてゐるといふ。この事實はマライ人のミナンカボウ起原説を立證するものである。併し未だデュウトロ・マライのミナンカボウ起原を立證するものではない。なぜなら、少くともデュウトロ・マライたるジャワ族がミナンカボウ族と併存してゐたこともまた明瞭であるからである。デュウトロ・マライの起原をこゝに穿鑿することは困難であるが、思ふにミナンカボウ族がやゝもすればそれに擬せられるのも、彼等がマライ人の宗族であるといふばかりでなく、彼等が西歐の文明に接することによつてははななくして、彼等が本来の状態にありながら發達せる文化をもち、且つ之に對する素質を有してゐるからにはかならない。

政治社會 ミナンカボウの政治社會は本質的には地域制ではなく部族制であり、母系系統の民族を基幹としてゐる。これがミナンカボウ社會の最大の特徴である。ヒンヅー時代には獨立の村落國家 *negari* が一つの國語と一人の支配者をもつた一國民を形成してゐた。併し實際にはこの王制は土着民の觀念にとつて全く外來的のものであり、決してミナンカボウの慣習の中に溶融しなかつた。それで例へばミナンカボウでは族外結婚と母系相續が仕來りであるが、王は常に同族内の結婚をし、長男が父の相續者として王位に即いた。王權は極めて局限されてをり、殆んど唯一の權限として、ネガリ間の鬭争の仲裁權をもつてゐた。鬭争が長期間に亘り勝敗が決しないときには、王は黄色の傘をもつた使節を、相争つてゐるネガリに派遣した。この傘は和平締結のために戰

場の真中に立てられる。併し、双方が戦ひを止めないなら、もはや王としては何事も出来なかつた。彼はその權力を強制すべき軍隊をもたなかつたからである。それでこの王制は外からとつてつけたものであり、全く見かけだけのものであつた。王制が廢れた後もネガリの實際の統治はそれがなくともなら支障なく行はれたのである。

そこでネガリが自主的國家といふことになるが、しかしネガリをもつて地域的統治體と考へるのは誤りである。なぜなら、各々のネガリには四つの異なる同族集團(スクウ)の代表者がなければならず、そしてこの四つのスクウの首長が最高の會議體を形成してゐるからである。ネガリは土着民の系譜上の掟の上に二重寫しにされた地域的統治のヒンヅリの觀念である。だから、同族集團はネガリがなくとも同様に機能することが出来たのである。事實、單にネガリ内に居住してゐるといふだけでは、外來人は市民權を享受できない。これがためには彼は同族集團の中に入籍しなければならぬ。それで統治の最高の單位を形成するものは、ネガリではなく、同族集團、いなむしろ一つの同族集團のうち或るネガリに居住してゐる部分であると言ふことが出来る。

同族集團(スクウ)の歴史と意義とは不幸にして明らかでない。マライではスクウ *suku* なる言葉は「足」または「四分の一部分」を意味する。しかもこの言葉がミナンカボウに由來すること、明らかであるから、本來ミナンカボウが四つのスクウ(同族集團)をもつてゐたことが、デユウトロ・マライの間にスクウなる言葉に「四つ」の意味を與へることとなつたであらうといはれてゐる。族外結婚制に立つミナンカボウ族には、元來は四つ

の異なる同族集團が族外結婚の單位をなしてゐたであらう。しかし、現在では四つの元の同族集團は多數のヨリ小さな族外結婚單位に分裂してをり、かゝる小單位が二十四あるといふものと、二十七あるといふ人とがある。村の區分たる部落もスクウと呼ばれてゐるが、これも各部落が當然系圖上の一族によつて居住せられてをり、従つて或るスクウの名稱を得ることになるからである。

ミナンカボウにおける最小の獨立の統治單位(自治社會)はサ・ブア・パルイ *sa-buah-parui* である。これはアラビア語でカウム *kaum* とも呼ばれるやうである。これは婦人系統に沿ひ同族の一母幹、り血統を引いてゐるものより成る一集團である。通常、五代まで遡り一人の婦人より分岐派生した子孫が母系に従つて一團となれる大家族である。かゝる大家族の各員は常に一部落に住み或は大きな家族家屋に住んでゐる。従つてサ・ブア・パルイは村の一地區をなして住んでをり、その上に一人の首長をもつてゐる。これをパングルー *panghulu* と呼ぶ。パングルーは系統上の最年長婦人の男性の血屬者から選ばれる。

右の大家族は分家家族に分れることがある。これをデュライ *duhai* といふ。サ・ブア・パルイは幾つかのデュライを含む(その他に各デュライの最年長婦人の兄弟を含む)大家族體であるが、デュライもそのものとして大家族であり、一集團をなしてゐる。即ち、デュライはそれ／＼獨立の家屋に住んでをり、一家の最年長婦人の最年長の兄弟によつて統御されてゐる。この統率者をママク *namak* と呼ぶ。従つて、一家の首長は單にマ

クたるにとどまるときもあるが、もし彼がサ・ブア・パルイの首長であれば、バングルーの資格をもつのである。

このやうにミナンカボウの統治社会は、婦人系統にもとづく系圖的社会によつて構成され、その關係においては男子は單に社会構成の從屬の一員たるにすぎないのであるが、しかし上下各段階の大小の社会において、その代表者にして首長たるものはや婦人ではなく特定の男子でなければならぬ。そしてこの點がミナンカボウの統治社会において最も興味のある特徴である。

ミナンカボウの統治は本來二つの會議に基いてゐる。一は村のバングルー會議であり、これは村の會議所バライで開かれる。他はネガリ同族集團の四人の首長ダック・ナン・ベランベ *datug nan berampe* たちの會議であり、これはネガリ會議所で開かれる。法の實際の強制はママク及びバングルーによつて行はれるが、執行權はスクウ（同族集團）の首長の手にある。

バングルーは二つの機能をもつてゐる。ママクとして、彼は一家の父であり、一家の成員の助言をえて活動する。バングルーとして彼は國家における彼の一族の代表である。彼は自己のサ・ブア・パルイとスクウとの間の、又、彼の一族とネガリとの間の、謂はば結合帶である。彼は他のバングルーやスクウの首長に對する唯一の責任者であり、かゝるものとして彼の統率下にある人々が部族の慣習とモハメット法を守り、指定された仕事、

例へば、道路の建設、バライやモスクの建築をなし送けるやうに監督指揮しなければならない。同様にまた彼は、彼の下にあつてママクがそれぞれのチュライのために誠實にその任務を行ふことに對して責任を負はねばならない。他方において、バングルーは會議に出席せるスクウの首長や他のバングルーに對して、彼の一族の要求を提示する義務をもつてゐる。彼が代表者として活動することに失敗すれば、彼の一族はこの首長に對して不平を申し立て、場合によつては彼はバングルーの地位を逐はれるかもしれない。

バングルーはその一族内においてその成員の間に起つた事柄は悉く知つてゐなければならぬ。出生も死亡も結婚もバングルーの知らないものはない。どんな契約も、金錢の授與も、土地の貸借も、重要な取引も、バングルーの耳を通らないかぎり、一族の成員によつては取極められない。彼は一族の共同財産と個人財産とを管理する。彼はたゞに彼の一族の出來事について知つてゐるばかりか、ネガリにおける他のサ・ブア・パルイの秘史及び逸話をも知つてゐる。それで彼が老齡となり死期が近いと感ずると、彼はこれらの傳統を自分の若き後繼者に引き繼ぐのである。

以上、ミナンカボウの統治社会の構造を略説したが、この統治については次の如き若干の特徴を拾ひ上げることが出来る。

- (1) 國家（ネガリ村落國家）の眞實の主權は個々の家族に依存してゐる。ママクも決して自己の一存で決定を

しない。重要問題はまづ一家の最年長婦人の主宰の下に各家庭で論議され、次に一家の男子成員と命令を實施するママクとで討議して決定される。

- (2) すべての決定は二つの憲法、即ち土着慣習とモハメット法との單に解釋にとどまらねばならぬ。
- (3) すべての決定は満場一致の裁決によつて達せられる。會議の議員で不同意のものは一族から放逐されることがある。

- (4) ミナンカボウの掟は眞に老人政治である。すなはち、各チユライの最年長の男子成員がママクの地位に選ばれ、サ・プア・パレイの中で最舊家たるチユライのママクがバングルーになり、ネガリのスクウの最も古い一門がそのバングルーをネガリ會議に送るのである。

之に依つて見れば、この制度は一般參政權、占有權の保證、憲法の不變に力點をおいてゐる。それは過去の傳統に縛られ、戰爭や商業等の變化狀況に適應しにくいと云はねばならぬ。又、それは平凡な男子を貧乏の線以上のところに維持し、もつと精力的な男子の移住を誘致したといはれてゐる。

ミナンカボウのかくの如き統治形態は、なるほどミナンカボウにおいては整然と保存されてゐるとはいへ、決してミナンカボウに特有のものではない。もつと崩れた形ではあるが、マライ群島の土着民族の社會にも之に類似の形態が残つてゐるのである。してみれば、ミナンカボウ族が過去においてはマライ人の、現代においてはバ

ダン人の如き優秀なる土着民族の宗教となれる榮譽は、彼等の統治社會の所産であるとは言はれないであらう。なるほど彼等の統治制度はもつとも精力的な優秀分子の移住を誘發したことはあらう。そしてこれらの優秀分子の植民者が母族に榮譽を齎したかもしれない。しかし、もつと重要なことは、ミナンカボウ族そのものが本來優秀なる素質を有する種族であるといふことではなからうか。今、遽に之を斷定するだけの論據はえられないが、しかし、それは彼等の生業を一瞥しても、或る程度これを窺へるやうに思はれる。

生業、ミナンカボウ族の生業は農業、商業、工業、狩獵、漁業等に廣く及んでをり、土着民族の生業としては多種多様である。

農業、農業としては米作が主要であり、水稻陸稻ともに耕作される。また蔬菜類も高級なものが作られてゐる。パダン高原の蔬菜類はマライ半島にまで出るといはれてゐる。その他、椰子、珈琲、ガンビール、肉桂、茶規那、樹脂ダマル、香料、煙草等の農林産物がある。前にも指摘した通りミナンカボウ族の分布する西海岸州はスマトラとしては比較的開けた地方であるが、同じく開發の進んでゐる東海岸州の如く白人産業地帯ではなく、殆んど土着民農業をもつて繁榮を維持してゐる。そして土着民本位に開けてゐるだけに、農業にしても種々の點において弾力性に富んでゐるのである。

家畜の飼養は農業ほどには發達してゐないが、なほ重要性をもつてゐる。水牛、牛、馬、山羊が飼育され、水

牛、馬の飼育数はスマトラ各州中、第二位を占めてゐる。水牛は役畜としても用ふるが、その乳及び肉は食用に供してゐる。

商業、商業についてはミナンカボウ族は特に優秀な才能をもつてゐるといはねばならぬ。彼等の村落においても市場（バサ）は重要な役割を演じてをり、常に賣手買手によつて賑つてゐるが、こゝに特に指摘しなければならぬのは、ミナンカボウ出身の俗にバダン商人と呼ばれる人々についてである。バダン人はなか／＼の利口者で、商賣の巧さ、するさにおいても華僑に負けをとらぬ敏腕家である。バダンの一般商家は華僑とバダン人とであるが、綿布人絹の取引はバダン人の手に握られてゐる。彼等の中には相當資本のあるものもあるが、比較的小資本のものが多く、これらの小資本の商店は共同の買繼者をおき、共同仕入れの形でシンガポールやバタビヤに出張して格安品を買ひ漁らせるのである。これはほんの一例であるが、かういふ商才をもつてゐる彼等であるから、スマトラ各地でも土着民の商人と云へば殆んどバダン人である。本據のバダン市やフォト・デ・コック市は勿論のこと、スマトラ茶で名高いジャンタル市でも、ゴム栽培の中心地ティンゲンギ市でも、要港タンジョンバレーでもバダン商人が活躍してゐる。タンジョンバレーでは綿布商にバダン人の進出が特に著しく、多くシンガポール市場より仕入れてメダン商人と對抗して殷盛を謳はれてゐるほどである。とにかくバタン人は商權を華僑の手に委しておかうとはしない。堂々と之に拮抗して地盤を開拓しつゝあるのである。

工業、次に工業であるが、こゝに工業といつても勿論自家生産の手工、またはせいぜいのところ家内工業の程度であるにすぎない。しかしその種類は土着民の中にあつては稀に見るほどの多様性を示めてゐる。

主として女の仕事。——紡織、レースの製造、菓蔭及び籠の製造、砂金の水洗ひ、染物、土器製作。

主として男の仕事。——網の製作、製紙、大工、ボートの製作、製材、木材の彫刻及び彩色、鑽石の採掘、鍛

冶、鉛の鑄込み、蠟燭の製造。

男女共通の仕事。——砂糖の精製、胡粉の製造、ガビール及び煙草の調製、採油。

言ふまでもなく、これらの手工は彼等の器具と彼等の技術をもつて行はれてゐるから、彼等を直ちに近代的經營の労働組織の中に編入しようといふわけにはゆかないであらう。併し彼等がこれらの手工に示めてゐる素質から見れば、彼等に近代的技術を教へ、近代的機械に彼等を習熟せしむることも、さほど困難ではないやうに思はれるのである。かく見てくるとき、ミナンカボウ族は儘にスマトラにおいて最も注目すべき民族であると言はなければならぬ。

家屋、ミナンカボウ族は鼻高く眼大きく、容貌は比較的端正であつて一種の氣品を具へてゐる。色もやゝ白く、女はやゝ丸顔の美人である。ミナンカボウの文化が彼等として發達してゐることはその家屋の建築及び裝飾、並びに服装にも現はれてゐる。こゝにもはや詳述する必要もないが、たゞその一斑を示めせば、家屋は木ま

たは竹で造られ、五、六尺の高さの床を有し、柱は床下から屋根まで貫通してゐる。二つの柱の間は一部屋（ルワン）に區劃され、従つて柱の多いほど家の奥行は長くなり、また家の前面に位置するルワンの數はその家屋に住む集合家族の數を示すものである。家の側面の一方または双方に一段床を高くした附屬の高殿造りをアンジュンと呼ばれてゐるが、こゝは客間にあてられる。母屋もアンジュンも棟は弓なりに兩端が高まり、その兩尖端は角狀を呈してゐるので、屋根は極めて特徴的な形狀をなしてゐる。それで全體としては神殿風の造りで、造りとしては素朴であるが一種の雅致に富んでゐる。家の壁は唐花模様精巧な彫刻や繪畫を施し、時には鏡硝子やモザイク風に嵌めこんである裝飾もある。家屋の外に彼等はなほ米倉（ロンキヤン）をもつてゐる。米倉をもつてゐるといふこと自體が既に文化の發達を語つてゐるが、單に建築物として見ても、それは一個の建築美術品である。

**服装** 服装は一般に男子が盛裝したときには、頭巾、ジャケツ、サロン、腰巻、ズボンを着け、女はジャケツの上になほスレンジンと稱する肩掛けやうのものを用ひる。特にフォト・デ・コツクやバダンに居住するバダン人は華美であり、スマトラの流行の先驅をなすといはれるほどあつて瀟洒な身裝をしてゐる。バダン婦人が美しく裝ひ純白のポイルのスレンジンで顔をつゝめるさまは如何にも清々しい風情であると旅行者は誌してゐる。**家族生活** 前にも一言しておいたやうに、ミナンカボウ族の家族生活の特徴づけるものは、母權制である。こ

れがために彼等の家族生活には、いろ／＼の奇習——我々にとつて——が行はれてゐる。これを形式的に見れば女尊男卑の風習といはれるかもしれない。例へばミナンカボウでは、結婚によつて自己の家族の圈内から離れるといふことは男女いづれの場合にもあゝえない。普通、結婚後も夫も妻もそれぞれ自分の母親の家に別々に居住し、夫婦による家庭は作られない。否、家庭のみではなく、結婚しても我々がその言葉の内容として解釋するやうな意味においての家族といふものさへ形成されない。夫は自己の妻や自己の子供に對して長とはならないのである。だから、嚴密な意味において、ミナンカボウの家族は系圖上では母とその子供のみからなると云はなければならぬ。男子はママクやバングルーの地位にあるもののほかは、家族内にあつては、あつてなきが如き存在である。併しこれは飽くまでも形式上より見た外觀だけのことである。實際の生活にあつては、ミナンカボウの女は淑やかであり、ある意味からいふとむしろ男の召使である。彼女たちはその家族の男のために食事を用意してやり、まづ男の食事の給仕をした上で、女たちは後から子供たちと共に食事をする。この點から見れば、彼等もまた夫唱婦和の生活を營んでゐることに變りはない。

なほミナンカボウには概して教育が普及してをり、寺小屋式ながらも教育機關が多數あり、回教僧が教師となつて教授してゐる。同族には讀み書きの出來ぬものは殆んどないと云はれてゐる。

**長所と短所** このやうにミナンカボウ族は生來優秀な素質を有し、その上に彼等なりの文化を發達させてゐる。

乙。だから、彼等は東印度においても最も自覚した民族の一だといはれ、特にバダン人は世知に長け商才に長じ、知識階級も割合に多く、人智も進んでゐるから、経済的に勢力を有し、政治的にも覺醒して、民族運動を起し東印度の解放を叫んでゐる。民族運動の指導者にして彼等の中から出てゐるものも少なくない。バダン人の發展を過信する人々は、將來東印度の自治を完成し、支配的立場に立つ民族は彼等だといふ。だが、バダン人は、一方において、重大な政治的缺陷をもつてゐる。彼等は全體としての一國民的な傳統をもたない。彼等は個人としては優れてゐるところがあるのは事實であるが、餘りにも自惚れが強く、皆が皆俺は偉いと思つてゐて、大將ばかり多く、軍卒のない觀がある。バダンには政治團體が出来ないといはれるのもこれがためである。つまり、一大指導者が出て、その下に彼等が國民的團結にまで高められなければ、彼等は壓力をもつ政治力を結成しえないのである。しかし、舊蘭印政府が最も怖れを抱いてゐた民族が彼等であつたことは確かである。この點からしても、ミンナカボウ族はスマトラで最も注目すべき民族であるといはなければならぬ。

### 第五節 南部スマトラ人

南部スマトラ、即ちランボン州、ベンクーレン州、パレンバン州には諸種の種族が居住してゐるが、主なるものはランボン族とパレンバン人とである。

ランボン族は主としてランボン州に分布してをり、山地に住むオラン・アブンと平地に住むオラン・バプランに分たれる。山地に住むオラン・アブンはランボン族の祖と考へられてゐるが、現在なほ原始民族の域を脱してゐない。平地のオラン・バプランはヒンヅー文化をうけ、ジャワのパンタムとの間に交通あり、その影響も多くうけてゐる。昔から胡椒の産出をもつて著名で、現在でもこの地方は歐洲向けの胡椒の栽培が行はれてをり、ランボン族の主なる生業となつてゐる。平地の住民の中には富裕な農園主になつてゐるものもあるが、概して云へば、ランボン族にはスンダ人の血が混り、一般に柔和にすぎて覇氣がない種族のやうである。

パレンバン人は一つの種族として見ることは出来ない。多様の混血の結果彼等は種族的特質を失つてゐる。スリヴィジャヤ *Srivijaya* はヒンヅー文化の影響を最も早く受けた地方で、西曆一世紀乃至二世紀の頃早くもヒンヅー教徒によつて植民せられた。スマトラにおいて記録に残る最初のヒンヅー王國は六四四年ジャンビー地方に起つたマラユ王國 *Malayu* であるが、その後間もなくスリヴィジャヤ王國が勃興し、之を屬國となし、パンカ島を征服し、その勢威はマライ半島にまで及んだ古代から支那の文獻に屢々現はれる三佛齊といふ國がこれであるといはれる。現在のパレンバン人は恐らくこのスリヴィジャヤ王國を建設した民族の後裔であるであらうが、スリヴィジャヤ王國の衰亡後は、この地は或はジャワ人の征服するところとなり、或は再興したマラユ王國に隸屬し、或はミンナカボウ族の下風に立つなど、諸種族の影響を最も多く被つてをり、就中、ジャワ人との混血が多



く、昔の純粹種は殆んど残つてゐないと云はれてゐる。それで今日のパレンバン人は、かつてマラユ王國を建設した民族の後裔たるジャンビー人がさうである様に、むしろマライ人と見做してさしつかへないであらう。

パレンバン州はムシ河の支流が八ツ手を擴げたやうに流れてゐる。それで土着民は殆んど河筋に集り、相當密集した部落をなしてゐる。この地方は土人ゴム栽培の本場であるだけに、彼等は勤勉で土人ゴム園は至るところに見うけられる。なほ米、椰子、珈琲等の栽培も行はれてゐる。しかしパレンバン人はまた古來より對岸のシンガポールと往來して貿易を營んできたから、商業の才に長けてをり、商賣人となつてゐるものも多い。従つて文化も進んでゐるが、どちらかといへば彼等は巧智で頗る世辭に長け、掛引が上手で、油斷がならない。パレンバン人が信用されないことも、パレンバン地方の人氣が悪いのも、彼等が悪ずれてゐるからである。彼等は使つて使へない住民ではない。しかし、之を使ふのには儼然たる態度をもつて臨み、増長せしめることがあつてはならない。

### 第六節 スマトラの開発と移入勞力

スマトラ島（附近の諸島を除く）の主要産物は、石油と年産七五萬疋ばかりの石炭を除けば、現在のところ農産物である。就中、重要な輸出農産物についてみれば、その主産地は次の通りである。

煙草。東海岸州メダン市を中心として周圍五〇キロのデリー平原。一〇〇%（土着民産業なし）

ゴム。北部アチエー州及び東海岸州。全島の八〇%

茶。東海岸州全島の八五%

油椰子。東海岸州及びアチエー州。全島の九五%

珈琲。西海岸州、ベンクレーン州、パレンバン州。土着民産業優勢にして全島の七〇%を占む。

之に依つて見れば、スマトラの主要輸出農産物は、土人産業の優勢な珈琲を除けば、他は悉く主として東海岸州に集中してゐることが明らかである。

東海岸州はその東に連るリオウ州及びジャンビー州とも古くから一衣帯水のマライ半島と交渉深く、殊に十三世紀末ジャンビー地方に再興されたマラユ王國はマライ半島に植民しスリヴィジャヤ王國に加擔してゐたマライ人を征服するなど、その勢威は大いに半島にまで延びたが、一三七七年に至りジャヤ王國に侵略されるところとなり滅亡した。こゝにおいてマラユ王國の覇權を脱したミナンカボウ族とマライ半島のマラツカ人が代つて擡頭し、マライ民族の勢力は頗る加はり、東印度全域に亘る活潑な移住分散が行はれた。このやうにマライ半島とスマトラ東海岸とは互に勢力が波及し合ひ、従つて住民の移住が相互に行はれたから、今日でもスマトラ東海岸の住民はマライ人である。

しかしながら、スマトラ東海岸の開発はマライ人では行はれなかつた。それは支那人とジャワ人との手に俟たなければならなかつた。今日、支那人とジャワ人との移住者の最も集中的な地方はスマトラ東海岸州である。ジャワ人については、今、その正確なる数字を詳にしないが、支那人はスマトラ在住者總數四四萬八千人のうち、パンカ島及びピリトン島を除けば、六二%に當る一九萬二千人が東海岸州に居住してゐるのである。この事實は、東海岸州が輸出農産物の主産地たることと照應する。すなはち、スマトラの土着民族からは、開發勞力を求めることが困難であり、結局、開發勞力としては支那人及びジャワ人の移入を必要としたことを意味する。

かゝる必要はスマトラ開發のためには今後もなほ當分の間存するものと云はなければならぬ。併し、われわれが以上において觀察した如く、スマトラの原住民族の中には、ミナンカボウ族の如く素質の優秀なものがあり、パレンバン人の如く使ひ方によつては相當使ひうるものがあり、アチエーをはじめ、バタックも漸次に進歩しつゝある民族であるから、藉すに時をもつてすれば、指導と訓練の如何によつて、開發勞力を島内の原住民族に求めることも決して空想ではないのである。

## 第六章 ボルネオ民族事情

### 第一節 人口と民族

ボルネオは世界第三の大島である。舊蘭領ボルネオ、舊英領北ボルネオ、イギリスの舊保護國サラワク及ブルネイ王國に分れてゐるが、本島全體の人口は總數三百萬人に近い。その分布及び人種的構成は次の通りである。

蘭領ボルネオ(一九三〇年調査・單位千人)	總數	二、一六八	支那人	一三四
主たる人種	土着民族	二、〇一七	ヨロツバ人	六
	アラビヤ人	七		
英領北ボルネオ(一九三一年調査・單位千人)	總數	二七〇	支那人	四八
主たる人種	ボルネオ土着民族	二〇五		
	ヨロツバ人	〇・四		
第六章 ボルネオ民族事情				一七五

ブルネイ王國（一九三一年調査・單位千人）

總數 三〇

主たる人種

マライ人

サラワク王國（一九三五年推定・單位千人）

總數 四四三

主たる人種の内譯なし。

支那人

二・七

一七六

以上の各地域の總數を合計すると二、九一二千人となる。サラワクの人口の内譯が缺けてゐるので正確なことは云ひ得ないとしても、ボルネオ全島の總人口の九割内外、即ち二百六七十萬人が本島土着民であると見て大過ないであらう。

ボルネオの土着民族の構成も相當複雑であるが、大別すれば（一）本島内陸に廣く分布するダイヤ諸族と、（二）海岸低地住民とに分つことが出来る。ダイヤ族とは内陸の蕃族の意で、本島の原住民である。恐らく後から本島に移住し來つたマライ人が先住民たる彼等を一括してダイヤと呼んだのであらうが、ダイヤ族もその基調をなすものはプロト・マライ（原マライ）系であるにしても、幾多の種族に分れ、その間文化の程度にも性能にも差異の認めらるべきものがある。海岸低地住民は支那人を除けば、一口にはデユウトロ・マライ（開化マライ）系であるが、併しその中には十五世紀前後において開化マライが東印度諸島に擴散したとき、本島に移住し

來つたものもあれば或は海漂民として群島の各地を劫掠した後、本島に定着したものもあり、加ふるに海岸低地の住民には特に混血が甚しく、ダイヤとの混血、海岸低地住民相互の混血、漢族との混血等幾多の中間型を生じてゐる。

従つて以下、右の二大別に従つて主なる種族の民度及び性能を觀察しよう。

## 第二節 ダイヤ諸族

ダイヤは上述の如く奥地原住民の總稱であるが、多くの種族に分れてをり、且つ各種族もまた部族又は支族に分たれ、加ふるに地方的差別があり、その名稱も地方によつて一でない。従つて之を人類学的に見れば多くの問題を殘してゐるやうであるが、こゝにはかゝる問題に立ち入らず、民度及び性能より見て主要な種族をあげれば次の通りである。

1. ヅスン族。舊英領北ボルネオ、舊蘭領及びサラワクに近きムルト族の居住地以外の内陸の各地。
2. ムルト族。舊蘭領及びサラワクに近き地方及び内陸の丘陵地一帯。
3. 陸ダイヤ族（或はクレマンタン族）。サラワク西部から舊蘭領西ボルネオの内陸にかけての地帯。
4. カヤン族。舊蘭領南東ボルネオの北部ブールンガン河地方及びカプアス河の支流たるマンガラムの流域。

からサラワク國境地帯。

5. ケニヤ族。マハカム河の源泉地方、カヤン河の上流地方一帯からサラワク國境地帯。

6. 海ダイヤ族(イバン族)。サラワクのレジヤン河の本支流並にルバー河上流一帯の地方。

ダイヤ族は本島の先住民であり、なほ最も低文化の段階にあるウル・アエル・ダイヤ *Oeloe Ajir Dayak* やプナン *Punan* 族等は最も早期に本島に渡來したものであらう。次には陸ダイヤ、ケニヤ族が來住し、カヤン族、ムルツト族(ツスン族)はこれよりも遅れて渡來したものと考へられる。ダイヤ諸族は大體において原マライ系統であり、彼等はいづれも東南アジアよりの移住者であることは明らかであるが、その渡來経路について東西二方向が推定されてゐる。即ちケニヤ、カヤンの兩族はチベット・ビルマ系民族に近似することより西方よりの移住が暗示され、之に反してプナン、陸ダイヤ、ムルツトの諸族は東方より移住したと云はれ、ムルツト族が灌溉工作及び階段耕作の卓越せる技術者として比律賓北部の原始宗教諸民族に酷似せる如き、或る程度の關聯を推定せしめるものである。イバン族(海ダイヤ)は最も後來の移住者である。その渡來については種々の説が行はれてゐるが、恐らくその移住はマライ半島又はスマトラ方面より西紀前一〇〇〇年頃から徐々に行はれたものであらう。但し、イバン族はその渡來が最も遅れてゐる故をもつて、ダイヤ族とは別個に取扱ふ學者もある。ダイヤ族としては舊蘭領ボルネオに六五萬人、舊英領ボルネオに二〇萬人餘、合計八五萬乃至九〇萬人に上ると推計さ

れてゐる。

### 1 ツスン族

*Dusuns*

ツスンとはマライ語で果樹園の人々を意味し、當初はマライ人によつて北ボルネオの未開人の大部分を指稱するに用ひられてゐた。現今でもこの名稱にて知られてゐる種族は漠然としてはゐるが、大體に於いてムルツト族の開化の進んだ部族を呼ぶやうである。ツスン族は一般に矮軀で頑丈な體格を有してゐる。平和を愛好し、法によく服従する種族であり、農業は彼等の天性の生業である。水田耕作を行ひ、又、煙草を栽培し、土人煙草の最も成功せる栽培者である。實際、彼等は北ボルネオの代表的農民と言はれよう。往昔、支那人との通商によつて早くから之と交はり、多少は支那人の血も交つてゐると考へられる。農業方面に進歩を示めてゐるのもその影響であらうと考へられる。

### 2 ムルツト族

*Murutis*

本族はツスン族と同一系統に屬するが、風俗習慣は更に原始的で、奥地に住むムルツト族が首狩の惡習を絶つに至つたのは比較的近年のことである。體軀は矮小であるが、狩獵は最も巧みであつて、吹矢又は槍をもつてよく野獸を獵するのである。吹矢とは長さ二米餘の木筒であつて、毒矢をこれによつて吹き出すダイヤの最も特徴的な武器又は狩具である。彼等は主として原始林産物の交易によつて生活してをり、智能程度も高からず、農耕法もツスン族より劣つてゐる。性質は落ち着きなく、住居も轉々と變へてゐる。

### 3 陸ダイヤ族

*Land Dyak*

本族はクレマンタン族 *Klemantan* とも呼ばれる。彼等は陸地居住を専らとし